

---

# 遊戯王5D's 転生者が歩む原作世界

瀬河ナツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王5D's 転生者が歩む原作世界

### 【Nコード】

N1294S

### 【作者名】

瀬河ナツ

### 【あらすじ】

突然だけど俺、広瀬悠斗ひろせゆうとは遊戯王5D'sの世界に転生してしまった。だけどまあ、転生者特権があるのか知らないけどなるとかなるだろうと思いつながら5D'sの世界で暮らすそんなノリと勢いな物語。

## 第一話 物語の始まり（前書き）

初投稿です。まだ至らぬ部分もあると思いますが読んでいただけると幸いです。

## 第一話 物語の始まり

目を覚ますとそこは知らない天井だった。はい、テンプレですね。だけど、そうとしか言えないからどうしようもない。

と、いう訳でどうも初めまして、気が付いたら転生していました。広瀬悠斗ひろせゆうとです。あ、これは転生後の名前です。

んで、どこに転生したかというのと、恐らく遊戯王5D'sの世界だと思います。恐らくだと思っるのは、両親の会話の所々に、『モーメント』やら『ネオ童実野』っていう単語が聞こえてくるからです。正直言つと勘弁してもらいます。よりにもよって遊戯王なんて…俺そこまでカードゲーム強くないのに……。まあ、悩んでもしょうがないのでとりあえず何か起こるまで傍観してますか……。てかまだ赤ちゃんなのでなにも出来ないし。

それから特に何もなくのびのびと過ごしていたのですが、俺が10歳の時に親が事故で死んでしまいました……。やっぱり転生しても肉親の辛いものがありますね。

その時は1週間ぐらい塞ぎ込みましたね。その4年後位にジャック・アトラスさんがキングに地位につきました。ここで現在の大体の時間軸が分かりました。

そして現在、というか原作開始時の数か月前、

「さてと、どうしたものかな……」

暇潰しがてら散歩していると、不良に絡まっている不遇な少女を見

つけたから助けようかななんて思ったのが運の尽きでした。水色の髪をしたツインテールな少女に出会っちゃいました。

どう見ても主要キャラクターの龍可です。本当にありがとございます。

「おい、てめえなに黙ってたんだよ？」

「いやー、この子が困ってるからやめてあげよう……なんて……」

「ああ!？」

ひいひい！ 怖いなあ。でもここで負けたら男としていろいろと終わってしまう……。あ、いい事思いついた。

「あの、それならデュエルで決着をつけませんか？」

「あ？」

「俺が勝つたら彼女を解放して下さい。俺が負けたら俺のデッキと有り金を渡すので彼女を解放して下さい」

「ああ？ なに言って……まあいいだろう。テメエの身ぐるみ剥いでやるぜ」

お手柔らかにお願いしますよ。そう思いながらデュエルディスクを装着し、デッキをセットしようとしていると、

「あの……大丈夫ですか……？」

と龍可が声をかけて来ました。大丈夫ですかと聞かれたら全然大丈夫じゃないとしか言えません。心臓がバクバクしてます。でもまあ、心配させる訳にはいかないから……

「ははは……大丈夫だよ。うん、大丈夫……」

「（……すごく心配なんだけど）」

さて、頑張りますか……

「デュエル！」

不良LP4000 悠斗LP4000

「先行は俺がいただくぜ！ 俺のターン！」

そういえばこの世界ってコイントスやじゃんけんで先行を決めないんだよね。早いもの勝ちとか無いわー。さて、俺の手札は……あ、勝ったかも。

「俺は魔轟神レイブンを攻撃表示で召喚！ さらに暗黒界の取引を発動！」

げ、相手のデッキって暗黒魔轟神（暗黒界と魔轟神の混成デッキの事）！？ やばい、このデッキの厄介さはよく知ってるからな……。

でも、今回は墓地にモンスターをなるべく多く送る事が鍵となるから、別にいいけどな。

「俺は暗黒界の軍神ゴールドを捨て、ゴールドの効果でゴールドを特殊召喚！ さらに、魔轟神レイブンの効果発動！ 手札を任意に捨てることで捨てたカード枚数分レベルと攻撃力をアップさせる。俺は魔轟神クシャノ、暗黒界の軍神シルバ、魔轟神クルスを墓地に送り、レベルを3つ上げ、攻撃力1200ポイントアップ！」

ここで、シルバとクルスの効果発動。シルバは手札から捨てられた時、特殊召喚する。そしてクルスの効果は手札から墓地に捨てられた時、レベル4以下の魔轟神を墓地から特殊召喚する。俺は魔轟神クシャノを特殊召喚！」

まずっ、これでチューナーとシンクロ素材が2体ずつ揃った。これは……本当にヤバイ！

「まず、魔轟神レイブンに暗黒界の軍神ゴールドをチューニング、伝説の悪魔よ、贄を喰らい、その姿を現せ！ シンクロ召喚、魔轟神レヴユアタン！ さらに、魔轟神クシャノに暗黒界の軍神シルバをチューニング、暗黒の魔神よ、その力今ここに顕現せよ！ シンクロ召喚、魔轟神ヴァルキュルス！ 伏せカードはなしでターンエンドだ」

まずいよ〜！ 攻撃力3000と2900が並んだよ！ 相手本気すぎでしょ！ それならこっちだって本気でやってやる！

「俺のターン、ドロー！ 手札抹殺発動！」

「なんだ？ 手札事故か？」

なんとでも言う方がいいさ。俺の墓地に送ったのはドラグニティードウクス、ドラグニティークエスト×2、ドラグニティージャベリン、ドラグニティームズミステイルの五枚。これで分かったと思います。俺のデッキはドラグニティデッキです。

時に、こっちの世界じゃ全ての低レベルドラゴン族ドラグニティには召喚成功時にドラグニティモンスターを召喚して装備できるだよ。ね。やっぱりライディングデュエルが主流なこの世界じゃ、永続魔法の『竜操術』やフィールド魔法の『竜の渓谷』があまり使えないからかな？

「そして、ドラグニティークエストを攻撃表示で召喚し効果発動。手札からドラグニティークエストを召喚してドラグニティークエストを装備する。そして、ドラグニティークエストの効果でドラグニティークエストを特殊

召喚し、ブラックスピアの効果でファランクスをリリースして、墓地からドラグニティードウクスを特殊召喚。

さらに、ドラグニティーブラックスピアにドラグニティードウクスをチューニング、大いなる龍翼よ、捻じれ、狂い、槍となり、敵を貫け！ シンクロ召喚、ドラグニティナイトーガラドボルグ！」

ドラグニティナイトーガラドボルグ（オリジナルカード） 7

ドラゴン族 シンクロ 風属性

攻撃力2200 守備力1300

ドラゴン族チューナー一体+チューナー以外の鳥獣族モンスター一体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時デッキからドラグニティと名のつくドラゴン族モンスター一体を装備する事が出来る

このカードは自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター一体につき攻撃力が300アップする。

俺の目の前に現れたのはゲイボルグを赤くしたような竜に跨り、螺旋を描いた槍を持った竜騎士だった。これこそが俺のお気に入りモンスターの1枚、ドラグニティナイトーガラドボルグだ。

「ドラグニティナイトーガラドボルグの効果でデッキからドラグニティーブランディストックを装備」

「へ、だがそいつの攻撃力は2200。俺のモンスターには遠く及ばないぜ！」

「それは残念。ドラグニティナイトーガラドボルグの効果、このカードは自分の墓地に眠るドラゴン族モンスター1体につき攻撃力は300ポイントアップする。俺の墓地には7体のドラゴン族モンスターがいる。よって2100ポイントアップ！」

「な、なんだと！？ いつの間に……！？ そうか、手札抹殺と暗



黒界の取引の時か！」

「正解です。さらにフィールド魔法、竜の渓谷を発動し、効果発動。手札を1枚捨て、デッキからドラゴン族モンスターを墓地に送る。ドラグニティーパーリムを墓地に送り、ドラグニティアームズーレヴァティンを墓地に送ります。これによりドラグニティナイトーガラドボルグの攻撃力はさらに600ポイントアップ！」

ついでに永続魔法、竜操術発動。これによりドラグニティと名のついたモンスターを装備しているモンスターは攻撃力500ポイントアップ！ よって、ドラグニティナイトーガラドボルグの攻撃力は2200+2700+500で攻撃力5400！」

「こ、攻撃力5400だと!?!」

うん、自分でも驚きました。まさか、ここまで攻撃力が上がるなんて思いもしなかったよ。「じゃあ、バトルフェイズ入ります！ドラグニティナイトーガラドボルグで、魔轟神ヴァルキュリスを攻撃！ スパイラルランサー！」

そう言うと、ガラドボルグは槍を振りかぶり、思いっきり投擲する。さらに竜の方がブレスを吐き、槍がブレスを纏い、ヴァルキュリスを貫く。そしてその余波が不良さんに襲い掛かる。

不良LP1500

「ぐ、ぐう……だ、だがこれでめえのバトルフェイズは終わりだ！」

「残念だけど、ドラグニティーブランディストックの効果により、このカードを装備したモンスターは2回攻撃する事が出来る！」

「な、なんだとお!?!」「これで終わりです。ドラグニティナイトーガラドボルグで魔轟神レヴュアタンを攻撃！ スパイラルランサ

ー!」

「ぐ、ぐああああ！」

不良LPO

ふう、これで一件落着かな？

「はい、約束通り、彼女を解放して下さいね」

「ちっ、約束は約束だ。好きにしろ」

そう吐き捨てて、不良の人はどこかへ行ってしまった。結構律儀な方なのかな？ まあ、いいや。俺も早くこの場から去ろう。

「じゃあね。気を付けてかえるんだよ」

そう言って、その場から逃げようとするど、

「あの……」

……なんか、いなか予感がするぞ。

## 第一話 物語の始まり（後書き）

感想、意見などがあれば是非お願いします。

## オリジナル人物設定（前書き）

今回はオリジナルキャラクターの人物の設定です。これは開始時の設定なので物語が進むにつれて変更があるかもしれません

## オリジナル人物設定

広瀬悠斗

16歳

容姿 とあるの上条さんの髪がしつとりした感じ

身長 170

体重 63

ネオ童実野シティに住む一般人。両親を早くから失ってる為高校には行かずバイトして妹の学費と生活費を稼いでいる。

考えている事がたまに口から出ており、友達からは分かりやすい奴と言われる。

口調は敬語だったりタメだったりと不安定だがデュエル中はほとんどタメ。

使用デッキは本気時がドラグニティ（ビート＋パワー）、それなりは氷結界<sup>ロック</sup>かサイバー（鬼畜パワー）、手加減はヴォルカニック（バーン）を使う。

実は転生者で気付いた時には5D'sの世界に来ていた。自称デュエルは強くない（実際に転生前は強くなかった）が実は転生前の彼の周りに強い人間が集まっていただけで普通からすればかなり強い方

広瀬優奈

11歳

容姿 FF?のユウナを小さくした感じ

身長 132

体重 20

ネオ童実野シティに住む一般人。両親を早くから失っている為、兄と二人で暮らしている。

とてもクールで毒舌。滅多にテンパる事は無いという。

使用デッキは本気は次元ダークとヴァイロンそれなりは暗黒魔轟神とサイバーダーク（アニメ仕様の）、手加減はゾンビデッキ（舐めると死ぬ）。

実は軽度のブラコン。デュエルの腕は悠斗より強いと思われるが、実は悠斗が手加減していただけの為、本当は悠斗よりちょっと弱い程度

からさわおちは  
唐沢落葉

2X歳

女性

若くしてデュエル喫茶落葉（おちば）を経営する女性。快活な性格をしており、細かい事は気にしない。

デュエルの腕前はマジキチレベル。本気時は1ターンエクゾディアを使って来る。手加減時は悪魔族デッキを使う。親のいない悠斗を雇い、それなりに待遇してくれたい人。

いせはるか  
伊勢遥

女性

19歳

喫茶店落葉でバイトをする大学生。二重人格の兆候があり、無意識に男っぽい口調で話したり、女言葉で話す。

デュエルの腕はそれなりが高く、使用デッキはデッキ破壊と除外デッキ。

水上陽介

20歳

男性

落葉で働く大学生。とても気が弱く、私などと女っぽい口調で話す。デュエルの腕はまずまずだが押しが弱い。使用デッキは4帝デッキ。

## オリジナル人物設定（後書き）

感想、意見、指摘がありましたら是非お願いします



## 第二話 VS 龍亞（前書き）

今回は龍亞との対決です。微妙なオリカが二枚ほど出てきます

## 第二話 VS 龍亞

「  
……」

誰か、助けて下さい……この気まずい空間から助けて下さい。

話を遡る事、30分前

「あの……」

去ろうとすると、龍可ちゃんが話しかけてきました。まずい！  
早く逃げないと死亡フラグが乱立する。イリアステルとかダークシ  
グナーとかマジ勘弁して下さい。

「助けてくれてありがとうございます」

「あ、いや……気にしなくていいから！ 大丈夫だから！ それじ  
ゃあ俺はここで……」

どんな事があっても早くこの場から脱出して、平凡な日常に戻ら  
なければ。じゃないとシグナーやダーグシグナーとかイリアステル  
の戦いに巻き込まれる羽目になってしまう」

「あの、思ってる事が殆ど口から漏れてますけど……」

oh、ナンテコツタイ。小説とかでよくある事をリアルでやってしまった。しかもその相手は一番聞かれたくない相手に聞かれてしまった！

「あの、シグナーとかダークシグナーとかイリアステルってなんですか？」

「え……！？ あー、えーと、うーん」

どっしりおぼろげ、どっしりおぼろげ。どっしり訳すればいいか……。

「とりあえず……長くなりそうだからお礼も兼ねてうちに来る？」

「……そうします」

よし、この間に言い訳を考えよう。

そう思っていた時もありました。全く思いつきませんでした。いやね、流石に重要単語を漏らしちゃったからどうすればいいか思いつかないんですよ。

「あの……やっぱり話さないとだめですかね？ どうせいつか分かる事ですし」

「いつか分かる事がだから知りたいんじゃない」

……ですよねー。さて、どうしようか……あ、いい事思いついた！

「あの……デュエルしませんか？」

「デュエル？」

「うん、俺が勝ったら無罪放免、ていうか何も聞かないで。それでえーと、「あ、龍可です」龍可ちゃんが勝ったら、おとなしく話すよ」

「え、でも……あなた「ああごめん、俺も名乗ってなかったね。俺は広瀬悠斗、高校に行っていないフリーターさ」悠斗さんすごく強いし……」

「いや、俺そんな強くないよ？ 妹にしょっちゅう負けてるし（手加減してるけど）でも、うーん……じゃあハンデとして俺はシンク口召喚しないっていうルールでどう？」

「それなら、いいです「たっだいまー！」「」

おや、誰か帰って来たみたいです、というか龍亞でしょう。龍亞は帰ってきて一直線でこっちに走ってきて、

「龍可ー！ 誰か来てるみたいだけど、一体誰が「あ、どうも初めまして。俺は広瀬悠斗です」どうも、俺は龍亞だよ！」

「悠斗さんは私が不良の人に絡まれている時に助けてくれたのよ。とてもデュエルが強い。それで、今から私とデュエルするのよ」

「え、そうなの！？ いいなあ〜龍可」

「じゃあ、龍亞君がデュエルする？ 龍可ちゃん、それでもいいかな？」

「別にいいですけど……」

龍可がそういうと、龍亞は大はしゃぎで自分のデッキにデュエルディスクにセットしてきました。子供は元気でいいなあ、俺は負けちゃいけない状況なのに……まあいいや、勝てばいいんだ勝てば。

「行くよ、「デュエル！」」

龍亞LP4000 悠斗LP4000

「先行は頂くよ！ 俺のターン、ドロー！ ドラグニティーアキュリスを攻撃表示で召喚し、効果発動。手札からドラグニティードウクスを召喚し、アキュリスを装備！ 二枚伏せてターンエンド」  
「俺のターン、ドロー！ D・モバホンを攻撃表示で召喚して、効果発動！ ダイアルオーン！」

とまあ、どこかのヒーローみたいな名前を龍亞が叫ぶとモバホンのダイヤル部分が光り出し、しばらくすると、その光は5のところ  
で止まった。攻撃表示で5という事は確か……

「ダイヤルの目は5だから5枚ドローして、その中のレベル4以下の『D』と名前のついた特殊召喚する！ それ以外のカードはデッキに戻しシャッフルする。ドロー！ よし、俺はD・ラジオンを攻撃表示で特殊召喚！ さらに、装備魔法、ダブルツールD&Cをラジオンに装備して、ドラグニティードウクスに攻撃！」  
「畏カードオープン、くず鉄のかかし。このカードは1ターンに一度相手の攻撃を無効にして、再びこのカードをセットする」

ふはははは、遊星だけが持つてると思うなよ！ 普通に出回ってるなら何枚もあるに決まってるじゃないか！

「ちえ、カードを2枚セットしてターンエンド」  
「俺のターン、ドロー。フィールド魔法、竜の渓谷を発動してその効果を発動。手札のカードを一枚捨てて、デッキからドラグニティと名のついたカードを手札に加える。俺はドラグニティージャベリ

ンを墓地に送り、ドラグニティアームズミスティルを手札に加え、ドウクスをリリースしてミスティルを特殊召喚。さらに破壊されたアキュリスの効果発動。フィールドのカードを1枚破壊する。俺はラジオン破壊」

「え、うそ!？」

「ミスティルの効果発動。墓地にいるアキュリスを装備する。そして、モバホンに攻撃」

「罨カードオープン、ディフォーム! このカードは『D』と名のついたモンスターが攻撃対象になった時に発動する事が出来る。相手の攻撃を無効にし、対象となった『D』と名のついたカードの表示形式を変更する! 俺はD・モバホンを守備表示に変更!」

おお、上手く避けた。やっぱり強いなあ。手札は無いし、攻撃は終わったし、

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー! よし、俺はD・キメランを守備表示で召喚! さらにリバーズカードオープン、ブレンD、このカードは相手のカード2枚を選択し、相手はそのどちらかを破壊する! 俺はドラグニティアキュリスとドラグニティアームズミスティルを選択する!」

「なら俺はアキュリスを選択して、アキュリスの効果発動。俺はモバホンを破壊する!」

「無駄だよ! D・キメランの効果、このカードが守備表示の時相手は『D』と名のついたモンスターを魔法、罨、モンスターの効果の対象にはならない!」

んな、そんな効果があるの!? それじゃあアキュリスを破壊したのは失敗した! どうしよう、ミスティルを破壊するわけにはいかないし……! しょうがない。

「なら俺はくず鉄のかかしを破壊する」「さらにモバホンを攻撃表示に変更して効果発動！ ダイヤルオン！ ……よし、出た目は3。よって3枚ドロして、その中からレベル4以下の『D』と名のついたモンスターを特殊召喚する！ 俺はD・スコープンを特殊召喚！ そして、手札からジャンクBOX発動！ このカードは墓地にいる『D』と名のついたモンスターを特殊召喚する！ 甦れ、ラジョン！ 最後にD・スコープンの効果でラジカツセンを手札から特殊召喚！」

まずいまずいまずいまずい！ チューナーが出た上にディフォーマーが5体も出てきた。来るぞ……ライフ・ストリームは出ないにしたって龍亞のエースモンスター、パワー・ツール・ドラゴンが。

「レベル4Dラジョンに、レベル3Dスコープンをチューニング！ 世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！ シンクロ召喚！ 愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！」

キター！ パワー・ツールの攻撃力は2300だけど効果が強いからなあ……負けたかも。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！ 1ターンに一度デッキからランダムで装備カードを手札に加えるパワー・サーチ！ 来た！ 俺は2枚目のダブルツールD&Cをパワー・ツール・ドラゴンに装備して、ドラグニティアームズミスティルに攻撃！」  
「くっ、罠カードオープン！ ドラゴンズ・リベンジ！」

ドラゴンズ・リベンジ

オリジナルカード  
罠

このカードは自分のフィールドに存在するドラゴン族モンスター

が相手モンスターの攻撃対象になり、その攻撃力の差が1000以上の時発動する事が出来る。

ダメージステップ後にお互いのカードを破壊し、その戦闘ダメージを互いのプレイヤーに与える。その後、攻撃宣言して来た時のモンスターの攻撃力以下のドラゴン族モンスターをデッキから特殊召喚する。

「このカードは相手モンスターが攻撃宣言した時、自分ドラゴン族モンスターとの攻撃力の差が1000以上の時発動する事が出来る。ダメージステップ終了後お互いのモンスターを破壊し、お互いその戦闘ダメージを受ける！」

「だけど、パワー・ツール・ドラゴンは装備されたカードを代わりに墓地に送る事でその破壊を無効にする！」

「だけどダメージは受けてもらうよ！」

龍亞LP2800 悠斗LP2800

「さらに、攻撃してきたモンスターの攻撃力以下のドラゴン族モンスターをデッキから特殊召喚する！ 出でよ、ドラグニティアームズ・レヴァテイン！ レヴァテインの効果で俺はミスティルをレヴァテインに装備させる」

「う……レヴァテインの攻撃力は2600。追撃は出来ないや。モバホンを守備表示に変更してターンエンド」

さてと……どうするかな？ パワー・ツールの今の攻撃力は2300、レヴァテインは2600、勝つには一手足りない。でも、出来ればこのターンで決めたいところかな。

「俺のターン、ドロ。調和の宝札を発動しドラグニティープランデイスティックを墓地に送り2枚ドロ。さらにドウクスを召喚して



墓地のブランディストックを装備。そしてドウクスの効果によりフィールドのドラグニティの数×200ポイント攻撃力を上げる。これでドウクスの攻撃力は2300となる。レヴァティンにでパワー・ツール・ドラゴンに攻撃！」

「う、うう……でも、まだまだ！」

龍亞LP2500

「いや、これで終わりだよ！ 手札から速攻魔法、ドラゴン・インパクトを発動！」

ドラゴン・インパクト オリジナルカード  
速攻魔法

自分のフィールドにいるドラゴン族モンスターを破壊する事でどちらかを選択する。

破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分を相手プレイヤーに与え、そのモンスターと同属性、元々の攻撃力半分以下のドラゴン族モンスターをデッキ、墓地から特殊召喚する事が出来る。このカードで特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

送ったモンスターの元々の攻撃力以下モンスターを破壊し、その攻撃力半分以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する事が出来る。このカードで特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「このカードの効果により俺はレヴァティンを破壊し、その半分を相手に与える。吼えろ、レヴァティン！」

俺がそう叫ぶとレヴァティンは高らかに咆哮した後、破壊される。そして咆哮によっておこった余波が龍亞に襲い掛かる！

龍亞LP1200

「でも！ レヴァティンがいなくなった事でドウクスは下がる

し、俺のモンスターはラジカッセンとモバホン、カメランの3体がいる！」

「だけど、ドラゴン・インパクトの効果でデッキからレヴァティンの攻撃力の半分で風属性、ドラゴン族モンスターを特殊召喚する！俺はドラグニティーブラックスピアを特殊召喚！さて、ここで龍亞君に問題です。何故俺はレヴァティンを墓地に送ったでしょう？」

「えっと……俺にダメージを与える為？」

「それもある。だけど本当の目的はそこじゃない。ヒントはレヴァティン戦闘以外で破壊される事が俺の目的だよ」

「……もしかしてレヴァティンの効果の一つに効果破壊で発動する効果があるとか？」

「お、龍可ちゃん正解。レヴァティン効果によって墓地に送られた時、装備されているモンスターを特殊召喚できるんだ」

ドラゴン・インパクトは限りなく不安定なカードだけど、このレバ剣とドラグニティデッキにはかなり強力なコンボになるんだよね。だってこのカード普通に使ったらホルスLv8破壊してもLv半分ホルスLv4すら召喚できないんだよね。てかLv8破壊してLv4召喚する必要性が分からないし。

「つまり、どういう事？」

「簡単にいうと、レヴァティンが効果破壊されたりすると装備されたモンスターを特殊召喚できるんだ。この場合はミスティルだね」

「しかもドウクスにはブランディストックが装備されてるから二回攻撃が可能だし……」

「えっ、そうじゃあ……」

「……詰みだね。龍亞君の」

「「……」」

「ミスティルを特殊召喚！そして効果によってアキュリスを装備

！ ブラックスピアでモバホンに攻撃。さらにドウクスでラジカッ  
センとキヤメランに攻撃して、ミスティルでトドメ！」  
「うわあああああ！」

龍亞LPO

なんか最後全然締まらなかったけど何とか勝つことが出来た……  
今回は調和がああのタイミングで来たことが本当に幸いしたよ。来て  
なかったらブランディは手札の肥やしになってたし。

「じゃあ、俺は帰るから。妹に夕飯作らなきゃいけないし」

「はあ、さっき聞きそびれましたけど妹がいるんですね」

「うん、デュエルアカデミアに通うね。うち両親がいないから俺が  
妹の学費と生活費を稼がないといけないし」

「そうなんですか……って妹さんデュエルアカデミアに通ってるん  
ですか？」

「うん、広瀬優奈って言うけど……知ってる？」

「え！？ 優奈ちゃんのお兄さんなんですか!？」

え、妹を知ってるの？ そんな目立ちたがるような娘じゃないん  
だけど……

「知ってるもなにもクラスメイトだし、成績はいつも上位だし……  
そっか、優奈ちゃんのお兄さんなら強くて納得」

「ははは……まあ、これからもうちの妹をよろしくね。それじゃあ」

「はい、また」

「またね悠斗の兄ちゃん！」

ははは……またね、か……これは原作に巻き込まれそうな予感……

……がするなあ……どうしよっ？

## 第二話 VS 龍亞（後書き）

感想、意見、指摘がありましたら是非お願いします

### 第三話 VS 優奈 機械竜の力(前書き)

今回は超絶攻撃力が出てきます。あとオリカも結構出ます。

### 第三話 VS 優奈 機械竜の力

「どうしてこうなった（＾o＾）／」

「兄さん、馬鹿みたいにオワタポーズ取ってないで。部屋に入るなら入って下さいよ。鬱陶しいです」

「いや、すみません。で、何故龍可ちゃんと龍亞君がいるし」

今日は午前から夕方までバイトだったのでバイトから帰ってくる  
と、家には龍可と龍亞がいました。なんでだろうね、わからないや。  
……さてと、

「優奈、バイト行ってきます」

「何言ってるの、バイトは今日はもうないでしょ」

くう、こんな時俺のバイトスケジュールを把握している我がいと  
しい妹が恨めしい！ はあ、もう諦めよう。

「いらつしゃい二人とも。何もない家だけどゆっくりしてってね」

「は、はいお邪魔します」

「まあ、俺は夕飯を作るからなにもしてやれないけどね。ていうか  
食べてく？」

「いいんじゃないですか？ どうしますお二人とも」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「ゴチになりまーす！」

さて、4人分だし、激安の豆腐があったからそれ買ったし……麻  
婆豆腐にでもしようかな……それと中華スープでも作るうっと、

「しばらくお待ちください」

「はいお待たせ。口に合うか分からないけど、腕を振るって作ったからまあ、不味くはないと思うよ」

「そんな、とつても美味しそうですよ！」

「わあ、いったきま〜す！」

「いただきます」

三人が食べ始めるのを見て自分も席に座り食べ始める。うん、美味い。そうやって4人で夕飯を食べていると突然龍亞が、

「そついえば優奈ちゃんと悠斗の兄ちゃんってどつちが強いの？」

と聞いてきたので、これに対して優奈は、

「私ですよ。まあ、兄さんが勝つこともありますが勝率は私の方が上です」

そつなんだよなあ。いくら本気のデッキやってなく、本気だしてないからといって、それを差し引いても優奈は結構強い。それはもうジャックに勝てるんじゃないかね？ ってレベルで。まあ、ジャックの純粋なパワーデッキじゃ、優奈の本気デッキとの相性は最悪に悪いのもあるけど、

「大体兄さんは力押し過ぎるんです。もっと除去カードや蘇生カードを……」

「ははは……面目ないです」

「（……ねえ龍亞。悠斗さんのデッキってそんなに力押ししてたっけ？）」

「（ううん。蘇生や除去、強化とか兼ね備えてるデッキだったよ）」



しまったな、二人には本気デッキ見せてるのか。あの特別のデッキ持ち合わせてはよかったな。

「じゃあ、腹ごなしも兼ねて、一回俺と優奈のデュエル見た後、タッグデュエルでもやる？ 二人ともデュエルアカデミアの生徒ならタッグデュエルもあるだろし、参考になると思うよ」

「それに、龍亞さんが使ってる不安定な機械族デッキの強化の参考にもなると思いますよ」

「ちよつと、不安定な機械族デッキってどういう意味さ!？」

「機械複製術とリミッター解除、機械族強化カードがあまり入っていないデッキには妥当な評価だと思いますが。なら見てみますか？ 私と兄さんが使う機械族デッキを。という訳で兄さん」

「はいはい。じゃあ、いつも通りライフ8000、ワンキル有りバトルな」

そう言つて俺はいったん自分の部屋に戻り、デッキを取り出す。機械族デッキ言つたし……鬼畜サイバーデッキしかないよな。このデッキ、下手するとオーバーキルなんてレベルじゃ済まないダメーシたたき出すからなあ。

「んじゃ、やるか優奈」

「分かりました、手加減しませんよ」

「デュエル!」

悠斗LP8000 優奈LP8000

「え？ なんでライフ8000なの？」

「うちのルールみたいなものだよ。4000だったらすぐ終わっちゃうでしょ」

「なるほど……」

まあ、うちのっっていうよりは元いた世界でのだけどね。

「先行は俺がもらつよ。俺のターンドロ！ ……初っ端からとばしまーす。未来融合ーフューチャー・フュージョナー発動。俺が融合素材にするのは……サイバー・ドラゴンを含む機械族モンスター32体だ」

「え！？ デッキを一気に32枚も融合素材に!？」

「それじゃあ、悠斗の兄ちゃんのデッキが……どうしたの優奈ちゃん」

「……い、いきなりキメラテック・オーバー・ドラゴンを出す気ですか!？ しかも素材は32体!？ 流石にないでしょう!」

うん、俺も驚きだよ？ でも、これで驚いてると次のターンはさらに驚愕する事になるよ？ だって手札にはあのカードがあつて俺のデッキは2枚、次のターンあれが来る確率は2分の1なんだし。フューチャー・フュージョンを使ってオーバー・ドラゴンの召喚は出来ないのは知ってるし、それでもオーバー・ドラゴンを指定したのはあのカードが来やすくする為のデッキ圧縮が目的だから。

「3枚カードを伏せてターンエンド」

「(くっ、あの中の一枚が確実にあのカード！ でも手札にはそれを破壊するカードがない……なら速攻で勝つしかない!) 私のターン、ドロ！ 魔法カード、トレード・イン発動！ レベル8のモンスターを墓地に送り2枚ドロします。私は青眼の白龍を墓地に送り二枚ドロ!」

「ってそっちも速攻ワンキルが目的かい。てことはいきなりサイバー・ダーク・ドラゴンを出す気が」

「それはそっちも同じでしょう。いきなりオーバー・ドラゴンを出

そうとしてるんですから。魔法カード、パワーボンド発動。手札のサイバー・ダーク・キール、ホーン、エッジの三体を融合して鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンを特殊召喚！ 鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンの効果発動、墓地に眠るドラゴン族モンスターを装備する。私は青眼の白龍を装備」

げ、攻撃力5000にまで上がっちゃった。まだ足りないにしても流石に不味いかも。

「さらに魔法カード、パワー・ブースター発動」

パワー・ブースター（オリジナルカード）

自分デッキのカードを任意の枚数墓地に送る。送った枚数×200ポイント攻撃力がアップする。

そのターンのエンドフェイズ。墓地にあるカード枚数×200ポイントのダメージを受ける

「最後に魔法カード、デジヨネット・ブースター発動！」

デジヨネット・ブースター（オリジナルカード）

自分の墓地、デッキのカードを任意の枚数除外する。除外した枚数×300ポイント攻撃力がアップする。

そのターンのエンドフェイズ、手札と墓地のカードをすべて除外する。

「これによって私はデッキの30枚を墓地に送り、34枚除外！

そしてサイバー・ダーク・ドラゴンは16200ポイントアップ！」

「こ、攻撃力21200……！」

「普通のライフでも約5倍……8000ライフでも約2.5倍じゃん！」

「これで驚いているなら、次か2ターン後のターン腰を抜かすことになりますよ。これの倍は超えますから。まあ、次なんてありませんが。サイバー・ダーク・ドラゴンで攻撃、フル・ダークネス・バースト！」

「くっ、使いたくなかったけど畏発動！ フォース・リターン！」

フォース・リターン（オリジナルカード）

自分が直接攻撃による戦闘ダメージを受ける時に発動する事が出来る。その戦闘ダメージを4分の1にする。

このカードが発動したターンのエンドフェイズ時に自分のライフを半分にする。

「この効果によって、俺のダメージは4分の1である5300なる！ よって俺のライフは2700残る！」

「でもフォース・リターンの効果によって兄さんのライフは半分になる！ ターンエンド。そして私はサイバー・ダーク・ドラゴンの元々の攻撃力分ダメージを受けます」

悠斗LP1350 優奈LP7000

「俺のターン、ドロー！ ……この勝負俺の勝ちだね。畏発動、チェイン・マテリアル！ とりミットリバーズを発動し、サイバー・ジラフを召喚しリリース！ このターンに俺が受けるダメージは0となる！」

「来たわね。兄さん最強のカードの一枚！ つてことは来るわね！」  
「もちろん、魔法発動、パワー・ボンド！ チェイン・マテリアルの効果によって融合対象はフィールドと手札だけじゃなく、デッキと墓地にも及ぶ！ 俺は墓地にいる機械族モンスター32体を除外して、現れる！ キメラテック・オーバー・ドラゴン！」

そう叫ぶと、32本の頭を持った機械の竜が現れた。

「キメラテック・オーバー・ドラゴンが召喚に成功した時、自分フイルド上のカードを全て破壊する。だけどキメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は融合素材としたモンスターの数×800となり、パワー・ボンドの効果により攻撃力は倍になる！ オーバー・ドラゴンの融合素材は32体、よって攻撃力は25600×2倍で51200！」

「な！ 51200ですって!?!」

「そんな、サイバー・ダーク・ドラゴンの20000を簡単に超えてるじゃん！」

「でも、キメラテック・オーバー・ドラゴンはチェイン・マテリアルの効果によってこのターンで破壊されるわ！」

「残念、手札からアーマードサイバーンを召喚し、キメラテック・オーバー・ドラゴンに装備。これでキメラテック・オーバー・ドラゴンの破壊は免れる！ ターンエンドでアーマード・サイバーンを墓地に送って破壊を無効する！」

これで優奈の勝ちは殆どなくなった。次のターン、51200のオーバー・ドラゴンの攻撃が待ってるし。

「私のターン、ドロー！ ……カード伏せて、ターンエンド」

「まあ、デッキが残り4枚だしね」

「……私、こんなにデッキ消費の激しいデュエル初めて見たわ」

「僕もだよ……」

なんか龍可と龍亞がすごいなあ、って目で見てるけどこのデッキに関しては普通の構成ともいえる。ホントは封印の黄金櫃やタイムカプセルも入れてパワー・ボンドとチェイン・マテリアルをサーチしたりするんだけど、今回は二人の為に「やろうと思えば、戦う事

すら馬鹿らしくなるほど圧倒的な攻撃力』を見せつけてやるためにわざわざそれらを抜いてここまで攻撃力を高めたのだ。本来だったら4万超えるか超えないか程度の攻撃力にしかならないと思う。

「俺のターン、ドロー。キメラテック・オーバー・ドラゴンでサイバー・ダーク・ドラゴンを攻撃！」

「くっ、畏発動、エナジー・バースト！」

「んな！ このタイミングでそれを引くか!？」

エナジー・バースト（オリジナルカード）

相手モンスターが自分機械族モンスターに攻撃宣言した時にライフを半分支払い発動する事が出来る。

相手モンスターの攻撃力を自分モンスターの攻撃力に加算する。ただし、このターンお互いのモンスターを戦闘で破壊することはできない。

次のターン後のエンドフェイズ時、自分の攻撃力を加算したモンスターを破壊する。

「これによつてサイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力は71200！」

「すごい！ キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力を上回った！」

「これで優奈ちゃんの勝ちだ！」

ちい！ まさかこのカードを引くとは！ オネストの機械族限定罨カードだけど、壊れてるっぽいこのカードをこのカードを引くとは……妹にはチートドローの才能が備わってるんですか!? だけど、最後の1枚にはこれを入れていなければ負けていただろうなあ。

「甘いよ！ 速攻魔法、リミッター解除！」

「そこでそれ!？」

「このカードは自分機械族の攻撃力を倍にする! よって、キメラ  
テック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は102400!」

うわあ、カンストしたよこれ。そして、勝てる気がしないなあ…  
…。

「いっけえ! レヴオリューション・レザルト・バースト!」  
「迎撃して、フル・ダークネス・バースト!」

俺のオーバー・ドラゴンの白いブレスと優奈のダーク・ドラゴンの  
黒いブレスが激突する。結果は分かっているけど、オーバー・ドラ  
ゴンのブレスが押し勝ち、ダーク・ドラゴンを飲み込み、優奈まで  
飲み込んだ。

「きやあああああ!」

優奈LPO

ふう、なんとか勝てた……やっぱり完全のパワーデッキは難しい  
な。

「で、どうだった? 参考になったかな?」

「……あんな攻撃力の高いモンスター出せないから参考にならない

「よ」

「まあ、そうだろうね。でも、その気になれば10万を超えることがわかったでしょ？ まあ、普通は2万程度でやめとくんだけど。さてと、じゃあタッグデュエルといきますか」

「当たり前ですが1万越えの攻撃力は出しませんよ。龍亞君に機械族運用の仕方を教えるのが目的ですからね……一万以上は出しませんよ」

「んじゃ、ちょっとデッキ調整するからルールとか決めといてね」「分かりました。あんまり時間取らないでくださいよ」

さて、さっさと作っちゃお。攻撃重視じゃなくて運用重視でね。



### 第三話 VS 優奈 機械竜の力(後書き)

キメラテック・オーバー・ドラゴンをオーバー・ロード・フュージョンを使って召喚したときの最高攻撃力は理論上63200らしいです(不可能らしいけど)

また、作者が友達とやっててパワー・ボンドとチェーン・マテリアルのコンボで召喚した時は機械族モンスター50体融合時は8万ジャストになります。……そんなに攻撃力あっても意味がないですけど。因みにこの時アルカナフォーースOVERTHE FOO Lを攻撃すると400万にも及びます。なにそれ怖い。

とまあ余談はこれくらいにして、感想、ご意見、こんなオリカ考えたぜ！ などがありませんたら是非よろしくお願いします。

**第四話 VS 龍亞&優奈 前編 闇に染まりし暗黒鳳の羽ばたき(前書き)**

今回は分割して投稿します。

優奈のデッキはアニメ仕様の

龍可のデッキはタッグフォーエース仕様となっております。

#### 第四話 VS 龍亞&優奈 前編 闇に染まりし暗黒鳳の羽ばたき

「どう？ ルール決まった？」

「ええ、ライフは全員に8000ポイントからスタートで、フィールドは全員に与えられます。タッグ内の魔法、罠の効果は共有します。あと、味方プレイヤーのダイレクトアタックを庇うのはありません。タッグはくじで龍可さんと兄さん、私と龍亞さんタッグに決まりました。因みに私達は攻撃力1万以上のモンスターを出す事は出来ません。」

「まあ、1万以上じゃなければいいのですが。それと、今から数分は作戦会議タイムです」

なるほど、要は1万以上じゃないモンスター、攻撃力9999以下のモンスターを出せばいいのか。まあ、出すかは分からないけど。さて、これからちょっと作戦会議しますか。」

「龍可ちゃん、龍可ちゃんの切り札やキーカードを見せてくれる？」

「えっと、はいこれです」

なになに、サニー・ピクシーにクリボン、サンライト・ユニコーンにエンシエント・ホーリー・ワイバーンってタッグフォースのカードもあるのかい。でもまだエンシエント・フェアリー・ドラゴンはないのか。」

「うーんとね、龍可ちゃんのデッキには自身のライフを回復させるカードは何枚入ってる？」

「えっと、5、6枚くらいかな？」

「だったら、俺が時間を稼ぐから、ライフを回復させてエンシエント・ホーリー・ワイバーンを出して一気に畳み掛けるよ」

「え、それだと悠斗さんが……」

「大丈夫、いつもみたいなの鬼畜パワーならまだしも本来のサイバードッキをアレンジしたヤツなら数ターンなら楽勝で耐えられるよ。後は……このカードを使ってごらん。光属性デッキには相性いいカードだから」

どちらも初期ステータス低い機械族デッキだからこそ耐えられるんだよね。それに、今渡したこのカードは今回のキーカードなるかな。さてと、それじゃあやりますか。優奈も見たことのない本来のサイバードッキを見せてやるよ。

「行くよ、……デュエル！」「……」

「先行は俺が頂くよ。俺のターン、ドロー！ D・ラジオンを攻撃表示で召喚してカードを二枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー。永続魔法、マシン・デベロッパを発動、このカードは自分フィールドに存在する機械族モンスターの攻撃力を200ポイントアップさせ、機械族モンスターが破壊される毎にジャンクカウンターを2つ乗せる。さらにサイバー・ドラゴンを特殊召喚。このモンスターは相手フィールドのみモンスターが存在する時、特殊召喚する事が出来る。さらに、プロト・サイバー・ドラゴンを召喚し、カードを1枚伏せてターンエンド」

当然ながらバトルロイヤルルールによって1ターン目は誰も攻撃する事が出来ない。

「次は私のターンですね、ドロー。魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからレアメタル・ドラゴンを墓地に送ります。そしてサイバー・ダーク・ホーンを召喚してレアメタル・ドラゴンを装備し

ます。カードを3枚伏せてターンエンドです」

「私のターン、ドロー！ サンライト・ユニコーンを攻撃表示で召喚して効果発動！ デッキの一番上をめくり、装備カードだった場合手札に加える。それ以外だった場合デッキの一番下に戻す。引いたカードは装備魔法、一角獣のホーンによって手札に加え、サンライト・ユニコーンに装備。カードを2枚伏せてターンエンド」

「この瞬間、畏カードオープン、アタック・リフレクター・ユニット。フィールドのプロト・サイバー・ドラゴンをリリースしてデッキからサイバー・バリア・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚する」

1ターン目が終了し、最大攻撃力を持っているプレイヤーは優奈のサイバー・ダーク・ホーンの3000、最大守備力を持っているのは俺のサイバー・バリア・ドラゴンの2800だ。さて、これだけが本番、あつちはどう出てくるかな……？

「俺のターン、ドロー！ D・ラジカツセンを攻撃表示で召喚してターンエンド！」

まあ、確かにサポートカードが潤沢に入っていない『D』デッキは『D』の弱点であるステータスの弱さのせいで攻撃力2500も守備力2800も超えられないからだろう。

「俺のターン、ドロー。サイバー・ドラゴン・ツヴァイを攻撃表示で召喚。さらに魔法カード、フォトン・ジェネレーター・ユニットを見せて、このターンサイバー・ドラゴン・ツヴァイはサイバー・ドラゴンとして扱う。そして、見せたフォトン・ジェネレーター・ユニットを発動！ サイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイをリリースして、デッキからサイバー・レーザー・ドラゴンを特殊召喚して効果発動！ このモンスターの攻撃力以上の攻撃力、守備力を持つモンスターを破壊する！ 俺はサイバー・ダーク・ホ

ーンを破壊する、フォトン・エクスターミネーション！」

「くっ、サイバー・ダーク・ホーンは破壊される」

「これによってマシン・デベロッパにジャンクカウンターが2つ乗る！ そして、サイバー・レーザー・ドラゴンで優奈を攻撃！

エヴォリユーション・レーザーショット！」

「畏発動！ 攻撃の無力化。このターンのバトルフェイズは終了します」

ちっ、上手くかわされたか。しかも次のターン確実にサイバー・ダークの二体目が来るぞ。ヤバいな……

「ターンエンド」

「私のターンです、ドロー。サイバー・ダーク・エッジを攻撃表示で召喚して、墓地のレアメタル・ドラゴンを装備。さらに永續魔法・竜操術を発動！ 竜操術の効果で手札からドラグニティーブランド・イストックを装備。行きます。サイバー・ダーク・エッジでサンライト・ユニコーンを攻撃！」

「残念だけど、その攻撃は通さないよ！ サイバー・バリア・ドラゴンの効果発動！ このカードが表側攻撃表示の時、1ターンに1度だけ攻撃を無効にする」

「だけど2回目は通ります。サイバー・ダーク・エッジでサンライト・ユニコーンを攻撃！ カウンター・バーン！」

「畏発動、ドレイン・シールド！ 相手の攻撃を無効にしてその攻撃力分ライフを回復するわ！」

龍可LP11500 悠斗、龍亞、優奈LP8000

「かわされましたね。ターンエンドです」

「私のターン、ドロー！ シャイン・エンジェルを攻撃表示で召喚！ サンライト・ユニコーンでラジカッセンを攻撃！」

「なんの罠発動、ディフォーム！ このバトルを無効にし、ラジカツセンの表示形式を変更する！」

「なら、シャイン・エンジェルでラジカツセンを攻撃！」

「ラジカツセンの効果発動！ 『D』が攻撃対象になった時、1回だけバトルを無効にする！」

おおー、これはいいコンボだ。ディフォームでディフォームでラジカツセンの表示形式を変えて、2回目はラジカツセンの効果で防ぐ。龍可がラジオンを攻撃してもレグルスの攻撃力じゃ勝てないからカードを消費しただけよしとしよう。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ D・モバホンを攻撃表示で召喚し、効果発動！ ダイヤルオン！ やった、出た目は6よって6枚ドロー！ よし、D・ボードンを守備表示で召喚！ カードを1枚伏せてターンエンド」

うーん、龍可は今防御に徹してるのかな？ ボードンの守備での効果は確かこのカード以外に戦闘耐性を与える効果だったはずだし……ここでマグネンUが来たら最悪だな。

「俺のターン、ドロー。サイバー・ヴァリーを攻撃表示で召喚し、魔法カード、機械複製術を発動！ このカードは自分フィールドに攻撃力500以下の機械族モンスターをデッキから2体まで特殊召喚する。これでサイバー・ヴァリーをさらに2体特殊召喚して、サイバー・レーザー・ドラゴンの効果発動。サイバー・ダーク・エッジを破壊！ そして、マシン・デベロッパにジャンクカウンターが2つ乗る。行くよ、サイバー・レーザー・ドラゴンでD・ボードンを攻撃！」

「なんの、カメラランの効果で一回のバトルは無効だよ！」

「ならサイバー・バリア・ドラゴンでD・モバホンを攻撃！」  
「だけど、ボードンの効果で戦闘では破壊されないよ！」  
「でも戦闘ダメージは受けてもらおう！」

龍亞LP7300

「ターンエンド」

「私のターン、ドロ。サイバー・サーヴァントを攻撃表示で召喚」

サイバー・サーヴァント（オリジナルカード） 4 機械族

光属性

攻撃力900 守備力500

このカードが召喚された時、デッキからレベル4以下の『サイバ  
ー』と名の付いたモンスターを特殊召喚する。

「このカードの効果によって私はサイバー・コンダクターを特殊召  
喚します」

サイバー・コンダクター（オリジナルカード） 3 機械族

光属性 チューナー

攻撃力1200 守備力400

このカードが召喚された時、全てのプレイヤーは手札が2枚にな  
るようにドロする。このカードはモンスターの効果によって特殊  
召喚された時、デッキまたは墓地から『サイバー』と名の付いたモ  
ンスターを特殊召喚する事が出来る。

「このカードは召喚された時、全てのプレイヤーは手札が2枚にな  
るようにドロします」



その効果によって俺と優奈はカードをドローする。やばいなドロ  
ー出来たのはありがたいけど、来るな……シンクログ。

「そして、サイバー・コンダクターが特殊召喚された事によりデッ  
キからサイバー・ダーク・キールを特殊召喚します。レベル4、サ  
イバー・ダーク・キールに同じくレベル3、サイバー・コンダクタ  
ーをチューニング。暗黒の鳳凰よ。今ここに顕現し、この世の全て  
を焼き尽くせ！ シンクログ召喚！ 生誕せよ、サイバー・ダーク・  
フェニックス！」

サイバー・ダーク・フェニックス（オリジナルカード） 7

機械族 闇属性 シンクログ

攻撃力1800 守備力1400

『サイバー』と名の付いたチューナー+チューナー以外の『サイ  
バー・ダーク』と名の付いたモンスター1体以上

このカードがシンクログ召喚に成功した時、墓地に存在するこのカ  
ードよりレベルの低いドラゴン族モンスターを装備し、その攻撃力  
分攻撃力をアップさせる。

このカードが魔法、罫、モンスターの効果を受けるとき、このカ  
ードをリリースする事で発動を無効して破壊、さらに600ポイン  
トダメージをそのコントローラーに与える。

このカードがエンドフェイズ時に墓地に存在する時、フィールド、  
または手札の機械族、ドラゴン族モンスターどちらかを墓地に送る  
事で次のターンのスタンバイフェイズにシンクログ召喚扱いとして特  
殊召喚する。

「来たな。暗黒鳳、サイバー・ダーク・フェニックス！」

優奈のそれなりデッキのエースモンスターの一角にして、ほぼ不  
死の能力を持つ機械の鳳凰！

「サイバー・ダーク・フェニックスがシンクロ召喚に成功した時、墓地からこのカードよりレベルの低いドラゴン族モンスターを装備し、その攻撃力分攻撃力をアップさせます。私はレアメタル・ドラゴンを装備、よって攻撃力は4200!」

「よ、4200!?!」

「いきます、サイバー・サーヴァントでサイバー・バリア・ドラゴン」

「サイバー・バリア・ドラゴンの効果発動、この戦闘を無効にする!」

「ならサイバー・ダーク・フェニックスでサイバー・バリア・ドラゴンを攻撃。ダークネス・ブラスト・フレア!」

「うう、サイバー・バリア・ドラゴンは破壊され、マシン・デベロップにジャンクカウンターにさらに2つ乗る!」

悠斗LP4800

やばいなあ……バリア・ドラゴンが破壊された。しかも一気に3200も持つて行かれたし。

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロ―! そよ風の精霊を攻撃表示で召喚、そして魔法カード、ライトニング・チューンを発動! 自分のレベル4光属性モンスターを選択し、そのモンスターが表側表示で存在する限りチューナーとして扱うわ! 私はシャイン・エンジェルを選択!そして、レベル3、そよ風の精霊にレベル4、シャイン・エンジェルをチューニング! 聖なる守護竜よ、ここに現れ、世界を明るく包み込め! シンクロ召喚! 輝け、エンシエント・ホーリー・ワイバーン! エンシエント・ホーリー・ワイバーンの効果発動、このカードは自分と相手のライフの差分攻撃力が変化するわ!」

「この場合はどうするんだ？」

「そうですね……お互いの1番ライフの高いプレイヤー同士にしましょっ」

「ということとは……優奈の8000と龍可の11500の差分だから……攻撃力は3500上がって、攻撃力は5600か。」

「（ここでサイバー・ダーク・フェニックスを攻撃したいけど伏せカードが……だけど、サイバー・サーヴァントなら）エンシエント・ホーリー・ワイバーンでサイバー・サーヴァントを攻撃！ セイント・サンクチュアリ！」

「くっ、サイバー・サーヴァントは破壊されます。しかし、畏発動、ダメージ・コンデンサーを発動！ 手札を1枚捨て、受けたダメージ分のモンスターをデッキから攻撃表示で特殊召喚します。受けたダメージは4700！ よって、攻撃力3000の青氷の白夜龍を特殊召喚！」

優奈LP3300

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターンドロー！ D・スコープンを攻撃表示で召喚して、レベル4、D・ラジオンにD・スコープンをチューニング！ 世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！ シンクロ召喚！ 愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！」

来たよパワー・ツール・ドラゴン。俺以外全員がシンクロ召喚してるし、なんか疎外感を感じるよ。はあ、早く『サイバー』チューナー来ないかなー。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果を発動、パワー・サーチ！ ……」

…来た！ 装備魔法、ダブルツールD&Cを発動してパワー・ツール・ドラゴンに装備！ 行っけえ！ パワー・ツール・ドラゴンでサイバー・レーザー・ドラゴンを攻撃！ クラフティ・ブレイク！」「くう、サイバー・レーザー・ドラゴンは破壊され、マシン・デベロッパーにジャンクカウンター2つ乗る」

悠斗LP3700

俺を集中的に狙いに来たか！ 確かに手負いに近いけどさ！ でも次のターンになったら覚えてる！ マシン・デベロッパーのジャンクカウンターは存分に溜まった。本番と行きますか！

第四話 VS 龍亞&優奈 前編 闇に染まりし暗黒鳳の羽ばたき(後書き)

意外とサイバーデッキを使うのが楽しくなってきた作者です。

しかし、本気時にはドラグニティデッキを使います。まあ、基本はサイバーとドラグニティの2つを使用していきたいと思います。

感想、ご指摘などありましたら是非お願いします。

なお、オリジナルカードの案も募集しております。

**第五話 VS 龍亞&優奈 後編 機巧の駿馬対暗黒鳳(前書き)**

いつの間にか9000アクセス、ユニーク1500を突破して  
いた、本当にありがとうございます。これからも遊戯王5D・s  
転生者が歩む原作世界をよろしくお願いします。

第五話 VS 龍亞&優奈 後編 機巧の駿馬対暗黒鳳

悠斗LP3700 優奈LP3300 龍亞LP7300 龍可LP11500

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー。サイバー・ヴァリーの効果発動。このカードと自分フィールドのカードを1枚除外して、カードを2枚ドロースる。サイバー・ヴァリー2体を除外して2枚ドロー！そして永續魔法、マシン・デベロッパの効果発動。このカードを墓地に送る事でジャンクカウンターの数以下の機械族モンスターを墓地から特殊召喚する！ジャンクカウンターの数は8、よってレベル8以下の機械族モンスターを特殊召喚する。俺はプロト・サイバー・ドラゴンを特殊召喚して速攻魔法、地獄の暴走召喚発動！攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚した時に発動する事が出来る。召喚したモンスターと同名モンスターをデッキ、手札、墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する！そしてプロト・サイバー・ドラゴンはフィールドに存在する限り、サイバー・ドラゴンとして扱う！俺はデッキ、墓地からサイバー・ドラゴンを3体特殊召喚！優奈は青氷の白夜龍を好きな数だけ召喚していいよ」

「……青氷の白夜龍はデッキに1枚しか入ってません」

よし、準備は整った。後はチューナーさえ来れば……！

「最後のサイバー・ヴァリーの効果発動、このカードとプロト・サ

イバー・ドラゴンを除外して2枚ドロ！ ……来た！ 手札から  
チューナーモンスター、サイバー・シンクロンを特殊召喚する！」

サイバー・シンクロン（オリジナルカード） 3 機械族 光  
属性 チューナー

攻撃力1600 守備力400

このカードはフィールド上に『サイバー』名の付いたモンスター  
が3体以上の時、手札を1枚捨てて特殊召喚する事が出来る。

このカードが『サイバー』と名の付いたシンクロモンスターのシ  
ンクロ素材となる時、シンクロ召喚したモンスターの攻撃力を80  
0ポイントアップさせる。

「このカードはフィールド上に『サイバー』と名の付いたモンスタ  
ーが3体以上存在する時、手札に1枚捨てる事で特殊召喚する事が  
出来る。俺は手札からサイバー・フェニックスを墓地に送り特殊召  
喚。そして、手札からサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚して、  
手札から融合の魔法カードを見せてこのターンサイバー・ドラゴン  
として扱う。そして、融合を発動！ フィールドのサイバー・ドラ  
ゴン2体とサイバー・ドラゴン・ツヴァイを融合して、サイバー・  
エンド・ドラゴンを融合召喚！ そして、レベル5、サイバー・ド  
ラゴンにレベル3、サイバー・シンクロンをチューニング！ 天翔  
ける機巧の駿馬よ、閃光となりて、敵を貫け！ シンクロ召喚！  
駆け抜ける、サイバー・ライト・ユニコーン！」

サイバー・ライト・ユニコーン（オリジナルカード） 8 機

械族 光属性 シンクロ

攻撃力2300 守備力2600

『サイバー』と名の付いたチューナー+チューナー以外の『サイ  
バー』と名の付いた光属性モンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地から存在す



る『サイバー』と名の付いたモンスターをシンクロ素材となったモンスターの数だけ特殊召喚する事が出来る。この効果で召喚したカードはレベルが1下がり、攻撃する事が出来ない。

このカードはフィールドに存在する機械族モンスター1体につき、攻撃力、守備力が300ポイントアップする。

俺の目の前に現れたのは白銀の色をした機械のユニコーンだった。これこそがこのデッキのエースの一角、サイバー・ライト・ユニコーンだ。

「さ、サイバー・エンドに、サイバー・ライト・ユニコーンですって!?! 兄さんのエースカードが2体同時に召喚されるなんて!」

「サイバー・ライト・ユニコーンの効果発動、このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材となったモンスターの数だけ自分の墓地から『サイバー』と名の付いたモンスターを特殊召喚する! 蘇れ、サイバー・ドラゴン2体! さらにサイバー・ライト・

ユニコーンの効果を発動、このカードはフィールド上に存在する機械族モンスター1体につき攻撃力、守備力を300ポイントアップさせる! フィールドにいる機械族モンスターは9体、よって2700ポイントアップ! ついでにサイバー・シンクロンを『サイバー』と名の付いたシンクロモンスターの素材とした時、攻撃力を800ポイントアップさせる! 2300+800+2700、よって合計攻撃力は5800! 行くよ、サイバー・ライト・ユニコーンでサイバー・ダーク・フェニックスを攻撃! 光速の雷、ライトニング・インパルス!」

「墓地にいる、ネクロ・ガードナーを除外してバトルを1回無効にします!」

「んな、そんなカードデッキに入ってたっていつかいつの間」

「墓地に!?!」

「ダメージ・コンデンサーのコストですよ。因みにこのカードをデ

ツキに加えたのはついさつきです」

なるほど、なら知らなくてもしょうがないな。って違う！ このターンでダーク・フェニックスを破壊できなかった！ まずいな……。

「なら、サイバー・エンド・ドラゴンで青氷の白夜龍を攻撃、エタール・エヴォリューション・バースト！」  
「くっ、青氷の白夜龍は破壊されます」

優奈LP2300

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「私のターンですドロー。魔法カード、苦渋の選択を発動。デッキからカードを5枚選択して、相手にその1枚を選ばせて選んだカードを手札に加え、それ以外を墓地に捨てる。選ぶのは私の前のプレイヤーである兄さんですよ。そして、私が選んだ5枚はこれです」

えーと、なにになに……真紅眼の飛竜と魔竜ディアボロス、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンにダーク・ホルス・ドラゴン。そして……あれ？ おかしいなあ、幻覚かな？ そうだよな。じゃないとあのカードが存在する訳ないよね。よし、目を閉じてもう一度……

「……なんでSintウルース・ドラゴンがそこにあるの!？」

それはパラドックスが使うカードでしょ？ 使うにしたって今使っちゃダメでしょ!？ それ以前になんで優奈が持つてるさ!？  
今まであれ、おかしいな? と思っただけでも気のせいだろと思っただけで我慢してたけど流石にアウトだよこれは! ……まあ、今更我が愛

しい妹にこの事を聞いてものりくらりかわされるだけだし。逆に『なぜ兄さんが知ってるんですか?』とか言われたりしたら終わりだし我慢しよう。

さて、それはさておき……何を選ぶかな……全てドラゴン族だから、サイバー・ダーク・フェニックスの蘇生コストにされるし、墓地にはサイバー・ダーク3種が揃ってるからサイバー・ダーク・ドラゴンが召喚されたためにトゥルースを墓地に残しておくのは危険だ。なんせ遊戯王史上3体目の最高攻撃力である5000の攻撃力を持つモンスターだからな。それに真紅眼の飛竜も墓地に送るのは危険すぎる。魔竜ディアポロスは確か相手のデッキトップを確認して、デッキトップ、またはデッキボトムに戻すカード。このタイミングじゃ墓地に送っても構わないカード、ダーク・ホルス・ドラゴンも同じく今は墓地に送っても構わないカード。

ダークネスメタルも墓地に送っても大丈夫。となると、トゥルースと飛竜の二択だな。さて……どちらを選ぶ……

「さあ、どうします兄さん?」

「……S i n t トウルース・ドラゴンを手札に加えてもらうよ」

「では、S i n t トウルース・ドラゴンを手札に加え、それ以外は墓地に送ります。そして、サイバー・ダーク・フェニックスで、サイバー・ドラゴンを攻撃、ダークネス・ブラスト・フレア!」

まずい! この攻撃が通れば俺のライフは一気に削られる! これは絶対にしのがないと!

「畏発動、くず鉄のかかし! このカードでこの戦闘を無効にする!」

「でも、サイバー・ダーク・フェニックスはカードの効果を受ける時、自身をリリースしてカードの効果は無効化して破壊します!」

そうか！ ぐず鉄のかかしは対象を取るカードだ！ しかも、攻撃したのはサイバー・ダーク・フェニックスだから効果を受ける事になる。

「そして、兄さんに600ポイントのダメージを与えます」

悠斗LP3100

「ゆ、悠斗さん！ で、でもこれでサイバー・ダーク・フェニックスはフィールドからいなくなっただわ！」

「いや、サイバー・ダーク・フェニックスが墓地にいる時、エンドフェイズにフィールド、手札から機械族、またはドラゴン族モンスターを墓地に送る事で次のターンのスタンバイフェイズにシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する事が出来るんだ」

「え！？ それじゃあ……」

「エンドフェイズ、手札のS i n t ウルース・ドラゴンを墓地に送り、次のターンのスタンバイフェイズにサイバー・ダーク・フェニックスは復活します。さらに、通常召喚してないターンのエンドフェイズに、墓地の真紅眼の飛竜を除外して、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

……結局、両方とも墓地に送られちゃったよ。……しょうがない、優奈を玉砕覚悟で削るか。

「私のターン、ドロー！」

「この瞬間サイバー・ダーク・フェニックスは復活！ さらに、サイバー・ダーク・フェニックスの効果で魔竜ディアボスを装備します」

「シャイン・エンジェルを攻撃表示で召喚。そして、エンシェント・ホーリー・ワイバーンでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃！ セイ

ント・サンクチュアリ！」

「だけど、パワー・ツール・ドラゴンは装備カードを墓地に送る事で破壊を無効にする。そして、ダブルツールD&Cの効果でダメージステップ終了時、装備したモンスターと戦闘したモンスターを破壊する！」

「まだよ！ サンライト・ユニコーンでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃！」

「うっ、パワー・ツール・ドラゴンは破壊される」

龍亞LP3100

よし、これでパワー・ツールを破壊した上にライフを大幅に削った！ だけどその代償としてエンシエント・ホーリー・ワイバーンが破壊されちゃったなあ。……次の優奈のターンが来る前に優奈を倒さないと。

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ 罨カード、ブレンDを発動！ 俺はサイバー・エンド・ドラゴンとサイバー・ライト・ユニコーンを選択！」

なっ！？ このタイミングまでずっと温存してたの！？ 俺がエースモンスターを召喚するタイミングを狙っていたのか！ どうする？ どっちを捨てる！？

「……俺はサイバー・ライト・ユニコーンを選択する！」

「よし！ そしてもう1枚の罨カードもオープン！ リビングゲデッドからの呼び声！ このカードでパワー・ツール・ドラゴンを蘇生して効果発動！ パワー・サーチ！ ……よし、装備魔法、巨大化をパワー・ツール・ドラゴンに装備！」

「この場合はどうするんだ？」

「合計の比較でいきましょう」

つまり攻撃力は倍になるのか。……マズいな。

「パワー・ツール・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！ クラフティ・ブレイク！」

「ちっ、畏カードオープン！ プライドの咆哮！」

ジャックのカードだからあんまり使いたくなかったけど背に腹は代えられない！

「俺は差分の600ポイントを支払い、このターンパワー・ツール・ドラゴンの攻撃力+300ポイント攻撃力をアップさせる！ 反撃のエターナル・エヴォリユーション・バースト！」

「でもパワー・ツール・ドラゴンは装備カードを墓地に送る事で破壊を無効にする！」

「それでもダメージは受けてもらうよ！」

悠斗LP2500 龍亞LP2800

「カードを1枚伏せて、モバホンを守備表示に変更してターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地に存在するサイバー・レーザー・ドラゴン、サイバー・バリア・ドラゴン、サイバー・ドラゴン、サイバー・フェニックス、そしてサイバー・ライト・ユニコーンをデッキに戻してシャッフルする。そして2枚ドロー！ 先にカードを1枚伏せてサイバー・コンダクターを攻撃表示で召喚し、効果発動。全てのプレーヤーは手札が2枚になるようにドローする。そしてレベル4となったサイバー・ドラゴンにレベル3、サイバー・コンダクターをチューニング！ 機巧の飛

竜よ、天を翔る翼を羽ばたかせ、蒼穹を馳せよ！ シンクロ召喚！  
舞い上がれ、サイバー・ワイバーン！」

サイバー・ワイバーン（c02さんが考えてくれたオリジナルカード）  
7 機械族 光属性 シンクロ

攻撃力2600 守備力1800

機械族チューナー+『サイバー』と名の付いたモンスター1体以上このカードをシンクロ召喚する場合、自分の墓地の機械族のチューナー1体と『サイバー』と名の付いたモンスター1体以上の合計のレベルが7になるようにゲームから除外する事でシンクロ召喚扱いで特殊召喚する事ができる。

自分フィールド上に、このカード以外の機械族モンスターが存在する場合、このカードのカード名は『サイバー・ドラゴン』としても扱う。

このカードが墓地に送られた時、墓地の機械族モンスターをゲームから除外する事でデッキからカードを二枚ドローする。

「サイバー・ドラゴンを守備表示に変更して、サイバー・ワイバーンでボードンを攻撃、エヴォリューション・アサルト！」

「ラジカッセンの効果で1回目のバトルは無効！」

「ならサイバー・エンド・ドラゴンでモバホンを攻撃！」

「でもボードンの効果で戦闘では破壊されず、守備表示だからダメージは0だ！」

「それは残念。サイバー・エンドは貫通効果を持っているのさ！」  
「え、嘘!?!」

サイバー・ライト・ユニコーンがない今、優奈を倒すのは不可能に近い。なら、手負いでライフが少ない龍亞を狙うしかない！

「これでゲームオーバーだ！ エターナル・エヴォリューション・

「バースト！」  
「うわあああああ！」

龍亞LP0

よし、これで龍亞は倒した！ 後は優奈をだけだ！

「カードをさらに2枚伏せてターンエンド」

「私のターンです、ドロ！。魔法カード、サイバー・ダーク・インパクト！ を発動。墓地に存在するサイバー・ダーク・キール、エツジ、ホーンをデッキに戻して鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンを召喚！」

来やがった！ 恐れていたモンスターがもう来やがった！ ヤバイなんてレベルじゃねえ！

「サイバー・ダーク・ドラゴンの効果で墓地のSinentウルース・ドラゴンを装備。さらにサイバー・ダーク・ドラゴンは墓地のカードの枚数×100ポイント攻撃力をアップします。私の墓地は12枚のカードがありますよって1200ポイント上がり、攻撃力は7200！ いきます、サイバー・ダーク・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！ ダークネス・フルバースト！」

「そう簡単にやられてたまるか！ 速攻魔法、ハーフ・シャット！ フィールドに存在するモンスターの攻撃力を半分にする。ただし、この効果で半分にしたモンスターは戦闘では破壊されない！ 反撃のエターナル・エヴォリューション・バースト！」

優奈LP1900

「……粘りますね。（くっ、いつもの超力押し単純デッキじゃな



くて兄さんが真剣が本気で作ったデッキを生半可な攻撃力じゃ、倒せませんか)なら、サイバー・ダーク・フェニックスでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃。ダークネス・ブラスト・フレア!」

「甘いわ! 畏発動、ガード・ブロック。この戦闘でのダメージは0だ! そして1枚ドロ!」

「でも、サイバー・エンド・ドラゴンは破壊されません。カードを1枚伏せてターンエンドです」

「私のターン、ドロ! ……踊る妖精を守備表示で召喚して、カードを1伏せてターンエンド」

次は龍亞のターンだけど、龍亞のライフは既に0のため、飛ばして俺のターンになる。

「俺のターン、ドロ。魔法カード、サクリファイス・パワー発動!」

サクリファイス・パワー(オリジナルカード) 魔法

自分フィールドに2体以上モンスターがいる時発動する事が出来る。モンスターを1体リリースし、その攻撃力をもう1体の攻撃力に加える。

「俺はサイバー・ドラゴンをリリースして、サイバー・ワイバーンの攻撃力を2100ポイントアップさせる。これで終りだ! サイバー・ワイバーンでレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで攻撃! エヴォリュション・アサルト!」

「甘いです。畏カード、魔法の筒発動!」

「んな!?!」

「これで、この攻撃は兄さんに返って来ます!」

「舐めるな! 速攻魔法、サイバー・ハウリング機巧咆哮発動!」

オリジナルカード  
機巧咆哮

速攻魔法

フィールドに存在する機械族2体をリリースして発動する。フィールドに存在する全てのカードを破壊し、全てのプレイヤーはそのカードの枚数×300ポイントのダメージを受ける。

「このカードの効果で俺はサイバー・ワイバーンとサイバー・ダーク・フェニックスをリリース！」

「何を言ってるんですか？ 忘れたんですか？ サイバー・ダーク・フェニックスは効果を受けるとき、このカードをリリースしてその発動を無効にして破壊する効果があるんですよ」

「優奈こそ忘れてないか？ このカードの効果はコストなんだぜ？」  
「……ああ！」

そう、カードの効果を受け付けない不死の暗黒鳳だがコストによるリリースなら話は別だ。ジャックがスカーレット・ノヴァ・ドラゴンをリリースしたように、十代がアルカナフォースO・THE FOOLをリリースしたように、リリースする事が出来る！

「よって、機巧咆哮の効果は発動し、フィールドのカードを全て焼き払う！ フィールドのカードは優奈がレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン、サイバー・ダーク・ドラゴン、S・I・N・T・U・L・S・ドラゴン、竜操術、まだ発動してない魔法の筒の5枚、龍可ちゃんのフィールドにはサンライト・ユニコーン、踊る妖精、一角獣のホーンと伏せカードが2枚で5枚。俺のフィールドにはなにもない。合計10枚のカードを破壊し、全てのプレイヤーに3000ポイントのダメージを与える！」

「え！？ そんな事したら兄さんのライフまで！」

「んな事もとより承知の上だ！」

今回のデュエル、最大の難敵は優奈だと最初から分かっていた。

優奈のデッキにはサイバー・ダーク・フェニックスを筆頭に厄介なモンスターがふんだんに盛り込まれているからね。……例えば今回は出なかったけどエンシエント・ホーリー・ワイバーンの真逆の効果を持つサイバー・ダークとかね。はっきり言うなら現段階で龍可が優奈に勝つのは不可能だ。例えばライフの差が10000近くあるうとも簡単に引っくり返すだろう。理由は簡単、龍可のデッキには攻撃力3000オーバーが1枚もないからだ。そして、俺も優奈を相手しながら龍可を倒すのは難しかったから自爆覚悟で優奈を倒すつもりだった。つまり、最初から俺の目的は優奈との相打ちだったのだ。

「独りぼつちは寂しいもんな……。いいよ、一緒にいてやるよ……」  
「ちよっとそれどこの魔法少きやああああ！」

優奈、悠斗LP0 龍可LP8500

「……」  
「……いや、悪かったからさあ。機嫌直してよ」

タッグデュエルだったために勝利を手に入れた俺だったが、その代償として妹の機嫌が最悪になってしまいました。いや、確かに相打ちなのに俺の勝ちなんて事になったら納得いかないのはわかるけど。

「……まあ、ずっとこのままなのはいけないのでひとまず納得しま

すが、それにしても兄さん、珍しいですね。兄さんが本気で勝ちに来るなんて。龍可さんに渡したカード、あれはオネストでしょう？」  
「ん？ ああ、そうだよ。ちょっとやりたいことが出来たからさ」

ここまで主要キャラに関わったらほぼ確実に原作に巻き込まれるのは間違いない。ならせめて少しくらい原作よりいい方へ物語を変えていきたい。具体的には龍亞単体でデイマクに勝てるようにとかね。オネストが有れば超魔神イドだって蹴散らせるだろう。他には因果切断や次元幽閉とかも渡したし、既に原作のデツキより強くなってると思う。

「フォーチュンカップまで後3ヶ月か……」

そろそろ出場者選考という出来レースが始まるらしいし、頑張つて2人とも強くしますか……

**第五話 VS 龍亞&優奈 後編 機巧の駿馬対暗黒鳳(後書き)**

あと数話はさんでからフォーチュンカップに入りたいと思います。  
いつものように感想、ご指摘、意見、オリジナルカードの案がありましたら、どんどんお願いします。

第六話 こちらデュエル喫茶落葉（前書き）

大変長らくお待たせ致しました。ちょっとリアルが忙しかったので時間がかかってしまいました。

## 第六話 こちらデュエル喫茶落葉

「……なんでさ」

いつも通りの朝。俺、広瀬悠斗は郵便受けを確認してみると、

『カップオブフォーチュン参加証』

なんて死亡フラグバリバリな手紙が入っていた。あれ？ あの大会ってシグナーを探すための一種の出来レースじゃなかったっけ？  
なのになんでこんなものが入っているのよ？

「なんでさー！ー！？」

「兄さん、朝から喧しいです」

「ぐふおー！」

訳がわからず思わず絶叫していると我が妹からキドニーブローを叩き込まれました、解せぬ。

――休話閑題――

「それで、朝から馬鹿みたいに叫んでいた理由はなんですか？」

「は、はい……実はフォーチュンカップの参加証が郵便受けに届いてまして」

「それで、それと絶叫になんの関連性があるんですか」

「いや、まさか自分が参加するとは思いいにもよらなかったの……」

まあ、参加するなら仕方ないとして、どういつデッキで戦うかと考えないとな……

「もう、いつそのこと本気サイバーで蹴散らせばいいじゃないですか？ 私のサイバー・ダークも複合したサイバーデッキで」

うーん、やれなくもない気がするけどやる気はしないなあ……。……  
というかそのデッキ事故る確率高いだろう。サイバー系に加えてサイバー・ダークを入れて、さらにドラゴン族も入れないといけないからさ、実質無理だね。

「まあ、悩んでもしょうがないでしょう。いつも通り（ピピピッピピピッ！）おっと電話ですね。はい、広瀬ですが」

『あ、優奈ちゃん！ 俺だよ！ 俺！』

「我が家はオレオレ詐欺には対応しておりません。もう1度お掛け直し下さい」

こちらから、今どきの11歳がオレオレ詐欺なんて知らないだろ。

『オレオレ……？ よく分からないけど、大変だよ！ ビッグニュース、ビッグニュース！』

「はあ、どうしたというのですか？ こっちはまだ朝食を食べないから早くして欲しいのですが」

『龍可にフォーチュンカップの参加証が届いたんだ！』

「へーそうなんですかすごいですねー」

薄っ！ 妹のリアクション薄いな！ そこまで朝食をお預けにされるのが嫌か！？

『あ、あれ？ 優奈ちゃん反応薄いね？』



「だって兄さんも参

「ストープ！（優奈、俺が参加する事はまだ2人に話さないで  
！）」

「（なんでですか？ ってああ、分かりました）」

なんでってそりゃあ……。

「（そっちの方が面白いから）（です）（ね）」

『？ どうしたの2人とも？』

「うっん、なんでもないよ。それで龍可ちゃんの反応はどうなの？」

『それがさ聞いてよ！ 龍可が出ないって言ってるんだよ！』

そこは原作と同じなのね。ただ俺が参加する以外に原作と変わりが  
なしか。

「へー、そうなんだ。じゃあ龍可君が出るのかな？」

『え！？ なんで分かったの！？ そう、俺が龍可の格好をしてフ  
ォーチュンカップに出るんだ！ それでね、悠斗の兄ちゃん……』

「俺を強くして欲しいって？ そりゃ構わないけどさ。今日バイト  
だからさ、優奈にバイト先に連れてきてもらって」

『え？ いいの？』

今日はちょうどあそこでのバイトだしね。ナイスタイミングだね。

「今日は10時からバイトだから、それ以降に来てね。じゃ、また  
後で」

そうやって俺は電話を切り、朝食を作り始める。今日はトースト  
とベーコンエッグにインスタントのオニオンスープという洋食で行  
くかな？

「こんちわーっす」

「あ、悠斗君おはよう。今日も頑張ろうね」

バイト先に着き、バイト先の店長（唐沢落葉さん 2X歳 女性）に挨拶し、制服に着替えて品出しなどの仕事をした後、開店までの間雑談する。

「そういえば、うちにフォーチュンカップの参加証が届いたんですよ」

「そうなの悠斗君！？ スゴいじゃない！」

「さ、流石悠斗君です」

「って事は目指すは優勝なんやる？」

上から店長、同じバイトの水上さんと伊勢さんがそんな事言ってきたがそれに対して俺は、

「いやあ、そんな大した事じゃないと思いますよ。どうせ初戦敗退すると思いますし」

「フォーチュンカップに出場したデュエリストがバイトしてる店」

「…ふふふ、行けるわね……！」

「待つんや店長。どうせなら優奈ちゃんも同時に宣伝して、うちのツートップ宣伝塔にするんや」

「あ、じゃあ私が友達を伝えてここを宣伝します」

ダメだこの人達聞いてねえ。というか俺をダシに宣伝するき満々だ。

話を聞いてくれないならせめて、

「……そんな事するならバイト代上げてくださいよ」

バイト代を上げて貰おう。いや、今でも結構バイト代貰ってるんだけどさ。それでも貰えるなら多く貰いたいし、

「やーね、冗談よ。それよりみんな、そろそろ開店よ。準備して」

「……うーす（は、はい）」

そう言われて全員が定位置につき、店長が自動ドアの電源を入れる。それと同時に何人か人が入ってくる。

「……いらっしやいませ。デュエル喫茶、落葉へ！」「」

デュエル喫茶『落葉』、簡単に説明するとデュエルスペースがある喫茶店だ。因みにカードシヨップでもありカードも取り扱っているためか7・8割がデュエルで出来ているこの世界では老若男女国籍問わずお客さんがやってくる。従業員は今日いない人も含めれば7人程度、ちよつと規模が大きめな店である。さて、そんなデュエル喫茶『落葉』だが、来店するお客さんを簡単に紹介してみよう

「悠斗君、いつものお願い」

「はい、トーストセットですね。しばらくお待ちを」

今の人は常連客の岸さん。D・ホイールの研究と開発をしているらしい。デュエルはやるより見る方が好きらしく、デュエルスペースでやっているデュエルをよく観戦している。朝はモーニングセットに限るらしく、毎日これを食べる。……家で作った方が安上がりでいいのに、言わないけど。とまあ、自炊派でフリーターで妹を養っている俺にはそんな金のかかる事は出来ないあとか考えながら厨房の伊勢さんに頼まれた物を言っつて、料理を受け取って注文した人のところへ持って行く。フロアは2人しかいないため、かなりのスピードで動き続けなければならない。

「お待たせいたしました、モーニングセットです」

「お、ありがとね」

岸さんにモーニングセットを出し、次々と配膳をこなす。最初はいろいろとダメ出しを食らったけど今じゃ一人前に仕事できるようになったしね。慣れってスゴいよね。

「悠斗さん！ デュエルスペース借りますね！」  
「おー、仲良くデュエルしろよ。喧嘩したら怒るからな」

次は第2の常連客である宮田、夏乃、宇佐美のアカデミア三人組。こいつらはタッグフォースのキャラなんだけど、俺の記憶が正しければTF5では宇佐美は社会人だった気がするのだが……。まあ、それを言ったら石原姉妹だってアカデミア生だから最近は気にしたら負けだと思ってるけどね。因みにこの3人、2日に1度は必ず来店してデュエルスペースを利用するが成績は宇佐美以外あまり良くない。というか、宮田に関してはネオスばかりを狙っていて他のE・HEROのサポートカードが殆ど入ってない。しかも「N」<sup>ネオスベーション</sup>「シリィズ」のカードが鬼畜モグラしか入ってない上にネオススペースもグラン・ネオスも入れてないなんて馬鹿としか言い様がないデッキ構築をしている。夏乃に関しては論外に近い。暗黒界デッキだから手札から墓地に捨てるカードはそれなりに入っているのはいい。しかしなぜそのカードのほぼ全てが手札コストとして扱われ、効果による墓地送りにするカードじゃないのかがすごく疑問だ。しかも、夏乃本人はその事を知らないし、それ以前に効果とコストの区別すらついていないのだろう。まあ確かに分かりにくいけどね。宇佐美は普通に強いけど本気がジュラシックなのか恐竜なのかはつきりしてもらいたいところだ。どっちもそれなりに強いから軽く困る。

「悠斗さ〜ん、このカードってどういうタイミングで使えばいいんですか？」

「宮田、俺は今バイト中なんだが？ ……で、どのカードだ？」

「これです！ ソウル・テイカー！」

あー、確か相手モンスターを破壊してライフを1000ポイント回復させるカードだっけ？ 4000だろうと8000だろうと1000のライフ回復はちょっと痛いけど、モンスターを破壊出来る

効果を考えれば得してるのかな？ と少し考えるカードだね。

「まず、このカードの特徴は相手モンスターを破壊出来る事と相手ライフを回復させる事にあるんだ」

「でも相手のライフを回復させたらこつちが不利になるんじゃない……」

「そこは使うタイミング次第だな。例えば相手フィールドに攻撃力の高いモンスターが1体だけいて、自分フィールドにそいつを倒せるやつが居なかった時とかに使えば相手に直接攻撃出来るしな。だけど注意が必要なのはアルカナイトジョーカーといった対象をとるカードの効果を受け付けないカードには意味ないから気をつけるよ」

「なるほど！ でもやっぱりライフを回復させないで相手にダメージを与える方法ってないの？」

「その時はシモツチによる副作用か墮天使ナース・レフィキュルを使うんだな。でもソウル・テイカーの為だけにこの2枚を入れるのはあまりにも非効率的だからそれならキュアバーンデッキを構築する事をオススメする」

ただし、そのデッキを作ったら2度とデュエルしないけどなと心の中で付け足す。今じゃ懐かしくなってきた前世の記憶、友達がバーンデッキを得意としてその一つのキュアバーンとやった事があるが対戦結果は無惨としか言い様がない敗北だった。ギフトカードや運命の分かれ道、ソウル・テイカーに燃える藻と言ったカードをふんだんに使われて相手に1度もダメージを与える事なく敗北してしまい、それ以来キュアバーンは半トラウマと化している。ていうかいきなりギフト2枚とかイジメだね。6000ダメージだよ？もうね、マジキチ。涙が止まらないよ（パーフェクトデュエルのな意味で）

「へえ、なるほどお……」

「流石、悠君ですね。勉強になります」

「おいコラ宇佐美、昔みたいにその名前で呼ぶな」

「昔ってまだ中学卒業してから1年も経ってないじゃないですか」

「人間、少しでも時間が経てば変わるものなんだよ。それに、呼び方に関しては中学入ってからずっと言ってるし」

「いいじゃないですか幼なじみなんですから」

「いや、幼なじみだからこそ止めてもらいたいのだが」

そう、実は俺と宇佐美は幼なじみだったりする。といっても家が近かったから偶然そうなっただけだし、これを切欠で原作ブレイクしてしまうのも嫌だったので少々ぞんざいに扱って来たのにめげずに絡んでくる。

「じゃあ、俺は仕事に戻るぞ。おとなしくデュエルしてるよ」

「……はい」「」

そう軽く注意した後仕事に戻り、てきぱきと仕事をこなす。只今午後4時前、喫茶店よりデュエルスペースを利用する人が増えてくる時間帯である。よって今の時間帯は俺もデュエルスペースの方に行く。けど夕方頃にバイトに入ってくる人もいるので喫茶の方が忙しくなる事はあまりない。

「兄さん、来ましたよ」

「悠斗の兄ちゃん、こんにちは！」

「こんにちわ悠斗さん」

そこへやっつと云うかなんと言うか優奈が龍可と龍亞を連れてやって来た。

「おー優奈はいいとして2人ともよく来たね。あんまり相手出来な  
いけどゆっくりしていいってね」

と若干営業スマイルを浮かべながらそう言うと龍可は顔を赤らめ、優奈はまたかこの野郎みたいな汚物を見るような目でこちらを見つめ、龍亞は2人の表情に首をかしげていた。首をかしげたいのはこっちです。なんなんだ2人とも、女の子ってたまに意味不明な時があるよね。とか思っているところからともなく、

「……見ました？ あれが悠君の必殺スマイルですよ。顔はそれなりで普段あまり笑顔を見せないからたまに見せると何人か不覚にもときめいてしまう人がいるんです」

「へえ、悠斗さんって意外と鈍感なんだね。あんな必殺スマイル魅せられたら誰だってときめくよ」

「それよりも私は悠斗さんが優しい言葉で話している事に驚きなんだけど」

「お前ら今度シバく」

後ろで「「「理不尽です！」「」と叫んでいるが無視して龍可達に1枚のカードを渡す。

「えっと、悠斗さんこれは……？」

「ああ、それはこの店の会員カードだと思えばいいよ。そのカードに表記されている数字が今のランク（強さ）で、その数が大きい程その人が強いって事を表すんだ。最高は10だから頑張つて10を目指してね。……因みにあそこにいる馬鹿なアカデミア生三人組は宮田が2、夏乃が2、宇佐美が5という見事な事になってます。アカデミア生なのね。酷いよね」

「「「っ」」」

そう言うと宮田と夏乃がばつが悪そうに目を逸らした。……自覚はあったんだね。なら少しは頑張つて勉強しようよ、きつと才能は



あるんだから。

「じゃ、俺はデュエル講座をする準備をして来るよ」

「デュエル講座？」

「兄さんがこの店長である落葉さんに頼まれてやっている簡単な授業みたいなものですよ。兄さん、無駄に知識だけがありますから」  
「無駄って言っちゃ駄目でしょ。知識はあって損はないんだから」

前世じゃ効率よくシューティング・スターを召喚するデッキとか作っていたりしたし、知識ならそれなりにあると自負してるよ。

「それで、今日は何について授業するんですか？」

「そうだなあ……龍亞君の為に機械族についてでも説明しようかな？ こないだ戦士族を説明したからちようどいいでしょ。んじゃ、準備して来るからそこらへんで座って待っててね」

さて、機械族についての説明を言うと聞いたけどなにを説明するかな……？ シリーズ系のカードとサポートカードは当然の事として、後は禁止カードや簡単なコンボでも説明するかな？ 何はともあれ、始める前にもう1回カードを見てみるかな？

## 第六話 こちらデュエル喫茶落葉（後書き）

喫茶のメンバー等のサブキャラは後日紹介したいと思います。いつもの如く、感想、ご指摘、意見、オリジナルカードの案などがありました是非お願いします

第七話 悠斗の簡単デュエル講座と……（前書き）

難産だった……というかかなり長くなってしまった。  
まあ、それはともかく。第七話、始まります

## 第七話 悠斗の簡単デュエル講座と……

「じゃあいつもの如く初心者でも分かる遊戯王講座始めるよ」

そう言つと客席から拍手は聞こえて来る。うん、ちょっと恥ずかしいけどこつやって拍手が聞こえると悪い気はしないし、やる気が出るよなあ。

「さて、今日のテーマは機械族についてですが、機械族といったらどんな特徴があるか知ってますか？」

「はい」

「はい、龍可ちゃん」

「攻撃力の高さ……かな？」

「うーん、残念。攻撃力の高さはドラゴン族がトップだね」

なんせ、攻撃力5000のF・G・Dも伝説の竜騎士もS・I・N・T  
ウルース・ドラゴンの全てがドラゴン族だからね。

「はい！」

「……はい、宮田」

「怖いカードがいっぱいあります！」

「それは貴様のトラウマだ」

そんなにミストボディ+キメラテック15連打+リミッターが怖かったのかな？

「はい！」

「……はあ、はい夏乃。まともな解答してくれよ」

「性格の悪い人がよく使います！」

「それは貴様の偏見だ。全国の機械族使いに謝れ。てか後で覚えてるよ」

誰が性格悪いって？ 失礼な、そんなに酷いことはしてないけどな。

「はい！」

「えーっと、成田山君だっけ？（珍しい名前だよな）どうぞ」

「かけえモンスターがいっぱいいます！」

「あー……（どう反応するべきか……前の馬鹿2人と違ってまだ子供だしなあ……）それには概ね同意するけどそれは君の価値観だね」

というかさつきからまともな解答が1つも来ないんだけど、こういう事なの……？

「は、はい……」

「ん？ 確か姫美ちゃんだっけ？ どうしたのかな？」

「き、機械族の……特徴は……種族数の多さと……シリーズの多さ……が特徴……です」

「……………」

「あ、あの……間違っていましたか……？」

「……いや、正解。大正解だよ」

まさか、彼女が（年齢的な意味で）知ってるとは思わなかったからね。マジで予想外。ってそういえば彼女はタッグフォース5でサイバー・ダークを使ってたんだっけ？

「そう、姫美ちゃんが言ったように機械族最大の特徴はその数の多さとシリーズカードの多さなんだ」

機械族が入ってないパックを探すのは難しいって位に出てるし、シリーズ系のカードも沢山あるしね。……まあ、その反面ちょっと扱いにくいカードもあるけどね。

「今日はその機械族のシリーズカードの一部と機械族全体をサポートするカードを見ていきたいと思います」

まずは……何から行くかな……？ ……お、これでいいか。

「『VWXYZ』シリーズ。5枚のモンスターカードとそれらを組み合わせた融合モンスターが特徴となる光属性、機械族モンスター群。融合モンスターは融合のカードを必要としない珍しい融合手段で融合素材となるカードを除外する事で特殊召喚できるよ。因みにこれは特殊召喚であって融合召喚じゃないため融合失敗等のカードは使えません。一部除いて幾つかがユニオンモンスターな為、召喚は比較的簡単で、結構扱いやすいシリーズ。そしてその融合モンスターの効果は手札をコストにして、相手のカードを破壊したり、表示形式を変えたりする効果だね。因みにサポートカードは1枚もないね」

因みにこのシリーズ、出た当初はこれらのカードを集めるのにすら苦労して、さらにデッキを作るとなるとかなりの資金が必要だったから出た当初は諦めたんだよなあ……。強いんだけどさ、融合素材3体ともレアカードってどういう事なの……。？ ぶっちゃけ融合モンスターは強いけど素材はどこにでもあるカードだよ……。？

アーリー・オブ・ジャスティス

「次は……これだ、『A・O・J』シリーズ。闇属性、機械族で構成されていて対光属性とリバースモンスターのカードが多く入っています。代表的なカードは闇属性以外との戦闘時には無類の強さを誇るA・O・Jカタストルや相手の墓地にある光属性モンスター1

体につき攻撃力を200ポイント上げるA・O・Jライト・ゲイザーなどがあります」

ライト・ゲイザーには大した思い出はないけどカタストルには(トラウマ方面で)思い出がある。いや、生前はワームとかも使用してたからね、カタストルに即粉 砕されてね、泣いたわ。

「次、俺が愛用している『サイバー』シリーズ。これはサイバー・ドラゴンを中心としたサイバー・ドラゴンをサポートするモンスターカードや魔法、罠カードで構成されています。代表的なカードはサイバー・エンド・ドラゴンやキメラテック・オーバー・ドラゴン等がいます。シンクロだと……サイバー・ライト・ユニコーンやサイバー・ワイバーン等がありますね」

気のせいだろうか？ キメラテック・オーバー・ドラゴンと言った瞬間、アカデミア3人組がブルツって身震いしたような……そんなに怖いかオーバー・ドラゴン。ちょっとオーバーキルしただけじゃない……5万程。

「次は『サイバー・ダーク』シリーズ。これは『サイバー』シリーズと似てるけど非なるもので、墓地に存在するドラゴン族を装備して強さを発揮するカードだね。代表的なカードは鎧黒龍 サイバー・ダーク・ドラゴンとサイバー・ダーク・フェニックス等があります」

ただフェニックスはあまり出回ってないらしいから知ってる人は少ないらしいけどね。

「えーっと、次は……これでいつか、『D』デュフォーマーシリーズ」

「あ、俺の使ってるカード！」

「……龍亞君、静かに。このシリーズの特徴は表示形式によって効

果が変わる事だね。例えばD・ラジカツセンだったら攻撃表示なら2回攻撃が出来て、守備表示なら1回だけ戦闘を無効に出来るんだ。ただ『D』シリーズは総じてステータスが低いから決定力はあまり強くないからちょっと使いにくいカードだね」

そう言うつと龍亞が落ち込んだような顔をするけどしようがなくな  
？ 他と違って圧倒的に低いんだから。

「次は……もう、最後でいいかな？ 『ジエネクス』シリーズ。殆どが機械族で構成されているシリーズで属性やレベルなどの様々なサーチカードがあるのが特徴。それに派生系で『リアル・ジエネクス』と『A・ジエネクス』の2種類あるのも特徴だね。キーカードとなるのはA・ジエネクス・アクセルやジオ・ジエネクスかな？」

A・ジエネクス・アクセルは普通に強いし、ジオ・ジエネクスも低級のジエネクスがいればかなりの強さを誇るからなあ。

「さて、次は機械族全体をサポートする魔法、畏カードを紹介したいと思います。まずは大御所、リミッター解除。これは自分の機械族モンスター全ての攻撃力を倍にするカードなんだけど、倍になったモンスターはそのターンのエンドフェイズに破壊されるから注意が必要だよ。次にマシン・デベロッパ、これは機械族の攻撃力を200ポイント上げる効果の他に、機械族が破壊されるたびにカウンターを2つ乗せて、このカードを墓地に送ることで乗っているカウンターの数以下のレベルである機械族モンスターを墓地から特殊召喚出来ます」

個人的にはただで機械族デッキならこの2枚はかなりの頻度で使われると思う。特にリミッター解除は機械族デッキなら必ずと言っていいレベルで使われていると思う。



「他には機甲部隊の最前線といった、1ターンに1度、戦闘で破壊された機械族と同属性でその攻撃力以下の機械族モンスターを特殊召喚するカードや機械族モンスター専用の融合カードであるパワー・ボンドがあります。このカードは機械族融合モンスターの攻撃力を倍にして融合召喚するカードなんだけど、パワー・ボンドは発動したエンドフェイズに融合したモンスターの元々の攻撃力分ダメージを受けるので注意が必要だよ」

まあ、ダメージを受けるだからブラック・フェザー・ドラゴンで無効に出来るし、サイバー・ジラフとかでも無効に出来るから大した問題はないけど。

「後は……ないかな？ まあ、これらのカード以外にもいろいろと専用サポートカードとかあるから探してみるといいよ。最後に機械族デッキの強さを見せるためにデモンストレーションデュエルをやりたいと思うんだけど……優奈、ちょっとこっち来て」

「……はあ、分かりました」  
「知っているとは思うけど彼女は俺の妹の優奈、デュエルの腕前もかなりあるきつと将来有望なデュエリストだ。んで、今からこの中の誰かと優奈にデュエルしてもらうんだけど……優奈とやりたい人はいる？」

そう言うつと辺りから手を上げる人がたくさんたくさん……そんなにいるんか、予想外すぎる。と言ってもこんなにデュエル出来るわけもないので、じゃんけんで3人まで絞り込む事に。何故3人かと言つと優奈が『めんどくさいですが、こんなにいるなら3人くらいならやっつてあげます』と言ったからだ。うん、優しい妹で俺は幸せだよ。

「……それで、勝ち残ったのはお前らか……相変わらず運がいいな夏乃」

「いやあ、それ程でも」

褒めてないから、と言いたいが言わない。優奈とやったら確実に負けると分かっているのにね、この場合運が悪いんじゃないだろうか？ とまあ、じゃんけんで勝ち残ったのは夏乃、龍亞と金髪の少女だった。金髪の少女の名前は……え？ 匿名希望だって？ なんですか？

という訳で謎の金髪少女の3人となりました。にしても、この金髪少女どこかで見たことあるんだよなあ……ここからはちょっとダイジェストでお送りしたいと思います。

1戦目、VS夏乃は始める前に教えたアドバイスと優奈が手札抹殺を使った為召喚出来たレインと俺も知らない謎の暗黒界を召喚して攻撃力4600のサイバー・ダーク・ドラゴンを破壊。優奈のライフを3000まで削ったもののその次のターンに新たなサイバー・ダークを召喚されて敗北、でもまあ5000も削った（この店では8000ライフがデフォルト）のはかなり善戦したといえるだろう。うん、成長してるようだなによりだ。

2戦目の謎の金髪少女戦は悪魔族を中心としたモンスター群を使い、（何故持つてるってツッコみたいけどこの世界じゃ珍しい事じゃないからツッコめない）邪神アバターを召喚して圧倒し、負けるかと思いきやそこは優奈にも意地があるのか機巧咆哮を使いアバタを破壊。さらにサイバー・ダーク・フェニックスを召喚し、リミッター解除を使って大ダメージを与えられると思われたがダメージ軽減カードでダメージを軽減され、次のターンで邪神ドレッドルートを呼ばれ敗北。優奈徐々に悔しさを味わう（個人的には最近優奈勝ち続きで天狗になられたくないのでありがたいと思うけど）……にしてもホントあの少女は何者なんだろう……？

まあ、今は置いていて3戦目、VS龍亞ですが……

「……優奈ちゃん、大丈夫？」

「……ええ、全く悔しくないと言ったら嘘になりますが、勝つことも負けることもあるのがデュエルですから、なんとか割りきれます。それより龍亞さん、手加減は一切しませんよ」

「あー、優奈待った」

「？ なんですか兄さん？」

「次のデュエルなんだけど、このデッキ使ってやってくれない？」

「いいですけどどんなってああ……了解です」

どんなデッキを渡したかって？ それはちよつと先のお楽しみ。

「じゃあ行きますよ。「デュエル！」」

優奈LP8000 龍亞LP8000

「先攻は私がもらいます。私のターン、ドロー。A・O・Jサウザンド・アームズを攻撃表示で召喚。カードを2枚伏せてターンエンドです」俺のターン、ドロー！ D・ラジカッセンを攻撃表示で召喚。……確かサウザンド・アームズの効果は光属性以外とのバトルではバトルを行わずに破壊されるんだっけ？ さっき誰かがそんな事言ってたような……。なら、ラジカッセンでサウザンド・アームズを攻撃！」

おー、ちよつと聞いた程度でよくサウザンド・アームズの効果を覚えてたな。流石……と言いたいところだけど大事な事を忘れているな。1つはこのデッキがA・O・Jデッキだという事。もう1つは……

「甘いというか、光属性以外と戦闘する可能性があるのに、私がないにも対策を取ってないと思いますか？ 永続罫、DNA移植手術を発動！ このカードはフィールドに存在するモンスターの属性を1つに固定する事が出来ます。私は光属性を選択します」

「このカードの存在だ。A・O・Jは対光属性を中心としたカードで構成されている。それ故に光属性以外との戦闘ではあまり使えないカードが発生する（それでも十分強いけど）それを解消するのがDNA移植手術だ。このカードのおかげでA・O・Jは本来の力を発揮出来る！」

「ラジカッセンは光属性となったためバトルは続行、そして攻撃力はサウザンド・アームズの方が高いためサウザンド・アームズの反撃！ スラストエッジ！」

「うっ……」

龍亞LP7400

「カードを2枚伏せて、ターンエンド……」

うわっ、龍亞のテンションが目に見えて落ちてる。警戒してなかったんだろっな……頑張れ、次があるさ。

「私のターン、ドロ！。A・O・Jブラインド・サッカーを攻撃表示で召喚。そして、フィールドに2体以上の光属性モンスターがいるため手札からA・O・Jコズミック・クローザーを特殊召喚です」

……うわあ、優奈の奴容赦ないな。召喚したのがアンリミッターじゃなかったから良かったけど、それでもこの攻撃が通れば一気に5000以上もライフを削れるぞ。

「コスミック・クローザー、サウザンド・アームズ、ブラインド・サッカーの3体で攻撃」

「させないよ！ 罠発動、スクランブル・マシーンズ」

スクランブル・マシーンズ（オリジナルカード 罠

相手モンスターがダイレクトアタックを行うときに発動する事が出来る。自分のデッキから機械族モンスターを相手フィールドのモンスターの数だけ特殊召喚する。このカードで召喚されたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「このカードの効果で俺はD・マグネンU、ボードン、ライトンを守備表示で召喚！」

「でも戦闘は続行します。コスミック・クローザーでボードンを攻撃します」

「マグネンUの効果発動！ このカードが守備表示の時、相手はこのカード以外を攻撃する事が出来ない！ そしてボードンの効果でこのカード以外は戦闘では破壊されないよ！」

上手く防いだな。でもスクランブル・マシーンズの効果でエンドフェイズに召喚したモンスターは破壊されるから依然として龍亞が不利なのは変わらないな。……そう思っていた時もありました。

「カードを2枚伏せてターンエンドです」

「エンドフェイズに罠カード、緊急同調を発動！ 俺はレベル3のボードンとマグネンUに、レベル1のライトンをチューニング！」

すげえ！ いつの間にこんなコンボを考えたの！？ これでパワ

ー・ツールを召喚出来るから龍亞が少しだけ有利になるぞ！

「世界の平和を守るため、勇気と力がドッキング！ シンクロ召喚！ 愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！ そして俺のターン、ドロー！ D・モバホンを攻撃表示で召喚して魔法カード、機械複製術を発動！ これによって俺は更にモバホンを2体攻撃表示で特殊召喚して最初に召喚したモバホンの効果発動！ ダイヤルオン！ ……よし出た目は3。よって3枚ドロー！ 俺はD・リモコンを特殊召喚。さらにリモコンの効果で墓地のマグネンUを除外してデッキからラジオンを手札に加える。まだまだ行くよ！ レベル1モバホんにレベル3リモコンをチューニング！ 世界の平和を守るため、正義の力が悪を裁く！ シンクロ召喚！ 正義の拳、アームズ・エイド！」

あれ？ なんで持ってるんだろう？ アームズ・エイドは遊星のカードだから渡してないんだけどな……？ ……これが原作破壊か。いや、今更って気もするけどさ。

「アームズ・エイドをパワー・ツール・ドラゴンに装備。2体目のモバホンの効果発動！ ……ちえ、出た目は1、よって1枚ドロー！ ……何もなければカードを戻してシャッフル。そして最後のモバホンの効果発動。よし、出た目は4、よって4枚ドロー。D・ビデオンを守備表示で召喚。そしてパワー・ツール・ドラゴンの効果発動、パワー・サーチ！」

え！？ まだ装備させるの！？ 既に結構なダメージは確実なのに、更にダメージを上げるつもり！？

「よし、装備魔法、巨大化をパワー・ツール・ドラゴンに装備。最後に速攻魔法、リミッター解除を発動！」

……えーっと、パワー・ツールの元々の攻撃力は2300だから  
巨大化を使って倍の4600。更にアームズ・エイドを装備してる  
からプラス1000して、リミッター解除の効果で倍だから……1  
1200か……。うん、オーバーキルだね。しかもアームズ・エイ  
ドの効果で破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを与えられるし  
……これはヒドイ。てかいつの間にかこんなに成長したんだ？ 教え  
てって言ってたけど俺が教える事殆どないじゃん。

「パワー・ツール・ドラゴンでコズミック・クローザーに攻撃、ク  
ラフティ・ブレイク！」

「畏発動、ガードブロック。このカードの効果でこの戦闘でのダメ  
ージは0となります。さらに畏カード、アルケミー・サイクルも発  
動します。このカードは発動したエンドフェイズまで私のフィール  
ドに存在するモンスターの元々の攻撃力を0にして、このカードで  
0になったモンスターが破壊された時、私は1枚ドローします」

「元々の攻撃力を0に！？ それじゃあ……」

……アームズ・エイドの効果は発動しない。なんてコンボなんだ。  
自分のダメージは0の上に2枚ドローするなんて……。

「エンドフェイズ、アームズ・エイドを墓地に送ってパワー・ツ  
ール・ドラゴンの破壊を無効にして、カードを1枚伏せてターンエン  
ドだよ」

「私のターン、ドロー。手札から闇の誘惑を発動します。デッキか  
ら2枚ドローして手札の闇属性モンスターを1枚除外します。私は  
A・O・Jアンリミッターを除外します。手札からA・O・Jクラ  
ウソラスを捨てて装備魔法D・D・Rを発動し、除外されたアン  
リミッターを特殊召喚してこのカードを装備します。そしてA・O・  
Jサイクルリーダーを通常召喚」

えーと、サイクルリーダーが3でA・ボムが2だから合計レベルは5。……来るな……鬼畜クラスのあいつが。もつと言えば俺のトラウマ。

「レベル2、A・O・Jアンリミッターにレベル3、A・O・Jサイクルリーダーをチューニング。悪を穿つ正義の機械よ、今ここに絶対なる正義の威光を示せ！ シンクロ召喚。切り刻め、A・O・Jカタストル！」

「攻撃力は……2300？ それじゃあパワー・ツール・ドラゴンは倒せないよ！」

「そう思いますか？ 龍亞さん、サウザンド・アームズの効果覚える前にこのカードの効果覚えるべきでしたね。カタストルでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃！」

「返り討ちだよ。行け！ パワー・ツール・ドラゴン」

その言葉とは裏腹にパワー・ツール・ドラゴンは全く動く事なく、眩い光線に体を貫かれる。まあ、当然の結果だよな。

「カタストルの効果発動です。このカードは闇属性以外と戦闘を行う時、バトルフェイズをスキップして相手モンスターを破壊します！ 行きなさい。正義の威光、アブソリュートジャスティス！」

「お前（貴女）はこの毘沙門天の代理だ（よ）！？」「」

それには流石にツッコミを入れるぞ！ しかもスペカ的には両方共光符だしてそんな事はどうでもいい！ 俺以外にも優奈の技名にツッコミを入れた奴がいたな……一体誰だ？ この世界に東方は……あるのかも知れんけど遊戯王第一なこの世界では絶対にマニアック過ぎる。……まさか、いやそれはないか。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果で巨大化を墓地に送って破壊は



無効にするよ」

「それでも攻撃力は2300ですか……勝てませんね。サウザンド・アームズでビデオンを攻撃です」

「ビデオンは破壊される。だけどビデオンが破壊された瞬間に罠カード、自由解放を発動！」

あ、それシェリーのカード。1回しか使っていないけど。うーん、何時の間にも手に入れてたんだらう？

「このカードの効果でブラインド・サッカーとサウザンド・アームズを手札に戻すよ！」

本来ならカラストルが正解なんだろうけど、サウザンド・アームズは連続攻撃が出来るし、ブラインド・サッカーの追撃を避ける為だらう。

「ならば魔法カード手札抹殺を発動します。私の手札は2枚、龍亞さんは0枚なので1枚も引けません、私はこの2枚を捨てて2枚ドロウします。カードを1枚伏せてターンエンドです」

……今更ながら気付いたんだけどこれ、こんな方法でカラストル呼ぶくらいならディサイプ・アームズ召喚した方が良かったんじゃないかな？ いや、でもカラストルだったらこの状況だったら無敵に近いから良かったのかもしれないし……。うーん、わからん。

「俺のターン、ドロウ！ 優奈ちゃん、モバホンを倒せなかったのは間違いだったね。Dモバホン2体を攻撃表示に変更、さらに効果発動！ 出た目は2と6。よってまずは2枚ドロウ！ D・ラジオンを攻撃表示で召喚！ そして1回デッキをシャッフルして今度は6枚ドロウ！ D・ラジカッセンを攻撃表示で召喚するよ。さら

にパワー・ツール・ドラゴンの効果発動して、手札に加えたデーモンの斧をパワー・ツール・ドラゴンに装備するよ」

そんな懐かしいカードまで入れてたんだ。って待て……これ、デーモンの斧が無限に再生しない？

「エンドフェイズに速攻魔法、D・ザ・バーストを発動！」

ディフォーマー

D・ザ・バースト（CO2さんが考えてくれたカード）

速攻魔法

『D』と名の付いたモンスターの召喚に成功しており、『D』と名の付いたモンスター2体以上の表示形式を変更した自分ターンのエンドフェイズ時に発動する事ができる。

自分フィールド上の『D』と名の付いたモンスター1体をリリースし、フィールド上のカード2枚を破壊する

「このカードは（以下略）が出来るんだ。俺はモバホンをリリースしてDNA移植手術とA・O・Jを破壊するよ！」

「流石にそれはさせません！ 速攻魔法、我が身を盾に発動します！ このカードは自分のモンスターを破壊するカードが発動された時、ライフを1500ポイント支払う事でその発動を無効にして破壊します！」

優奈LP6500

おお、まさかカタストルを破壊から防ぐためにちよつとふざけて入れたんだけど見事に使いこなしたよ。感激感激

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー。貪欲な壺を発動します。墓地のブラインド・

サッカー、クラウソラス、コズミック・クローザー、サイクルライダー、サウザンド・アームズをデッキに戻してシャッフル。そして2枚ドローします。私は再びサウザンド・アームズを召喚。行きま  
す、サウザンド・アームズでモバホンに攻撃」

「畏発動、ガード・ブロック！ ダメージを0にしてカードを1枚ドローするよ！」

「でも、サウザンド・アームズはフィールドにいる存在する光属性モンスター全てに攻撃する事が出来ます。でもその前にカタストルでラジオンに攻撃です。正義の威光、アブソリュートジャスティス！」

「……ラジオンは問答無用で破壊されるよ」

「そしてサウザンド・アームズでラジカツセンに攻撃！」

龍亞LP6800

「カードを1枚伏せてターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！ パワー・ツール・ドラゴンの効果を発動、パワー・サーチ！ よし、装備魔法、集中防御盾を発動！ さらにD・クロックンを守備表示で召喚して効果発動！ 1ターンに1度このカードにディフォーマーカードを1つ乗せるよ。そしてさらに速攻魔法、百機夜工を発動！ 墓地の『D』を全て除外してその枚数×200ポイント攻撃力をアップさせるよ！ 俺の墓地にいる『D』はちょうど10体！ よってパワー・ツール・ドラゴンの攻撃力は2000ポイントアップ！ いっけえ、パワー・ツール・ドラゴンでサウザンド・アームズに攻撃！」

「うう……サウザンド・アームズは破壊されます」

優奈LP3000

……なんか優奈の調子が悪いな。なんていうかいつも見たいみたいなキレがない。表面上にはあんまり出してないけど精神的にキテ

るみたいだし……さつき負けてるのが結構キテルみたいだね。……  
しょうがない。ここはとして少し焚き付けますか。

「おーい優奈」

「……なんですか兄さん？」

「いや、なんか調子が悪そうだなあって思ったんだけどさ、大丈夫？」

「……そんな事別に言われなくたって大丈夫ですよ」

あ、ダメだ。かなりキテるわこれ。だったら優奈にとっての最強の切札を切りますか。

「優奈、このデュエルに勝ったらお前の好きなシュークリームを買ってあげるよ」

そう言った瞬間、優奈の雰囲気が変わったような気がした。

「……それは本当ですね？ 兄さん」

「ああ、本当だ買ってあげるよ」

「そうですか。なら、本気を出さないわけには行きませんか！ 私はダメージを受けたことで手札を1枚捨てて罠カード、ダメージコンデンサーを発動します！ このカードは自分が受けたダメージ以下のモンスターをデッキから特殊召喚する事が出来るカードです。私はA・O・Jリーサル・ウェポンを特殊召喚！ ……龍亞さん、ここから本気で行きます」

「……うん！ でも俺も負けないよ！ カードを1枚伏せてターンエンド！」

「私のターン、ドロー。まずは黙する死者を発動して墓地のアンリミッターを蘇生。さらにA・O・J・サイクロン・クリエーターを攻撃表示で召喚。レベル2、A・O・Jアンリミッターとレベル5

A・O・Jリーサル・ウェポンにレベル3、A・O・Jサイクロン・クリエーターをチューニング。悪を穿つ正義の機械よ。その強大なる力を持って、あらゆる悪に絶対的な破壊を示せ！ シンクロ召喚。殲滅せよ、A・O・Jディサイシブ・アームズ！」

キターー！ 最強のA・O・J、ディサイシブ・アームズが！  
これはキツイぞ！

「ディサイシブ・アームズの効果発動！ 1ターンに1度、相手フィールドにセットされたカードを1枚破壊します、デストロイ・ブレイク！」

「ああ！ 俺の聖なるバリア ミラーフォースが！」

「……危なかった。破壊しといてよかったですね。行きます！ カタストルでパワー・ツール・ドラゴンに攻撃。正義の威光、アブソリュートジャスティス！」

「集中防御盾を墓地に送って破壊は無効だよ！」

「そして、ディサイシブ・アームズでクロツクンを攻撃します。悪を滅ぼす砲撃、ツイン・バスター・キャノン！」

うわあ、これはヒドいな。龍亞が圧倒的に不利じゃん。逆転出来るとしたらまだ龍亞のデッキに罠カード以外で除去カードが入っている事が必須条件だろうね、これだと。

「ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！ ……カードを1枚伏せてターンエンド」

モンスターカードは来なかったようだね。これはいよいよマズイ事になって来たぞ。

「私のターン、ドロー。2枚目の貪欲な壺を発動。墓地のアンリミ

ツター、リーサル・ウェポン、コアデストロイ、サウザンド・アームズ、サイクロン・クリエーターをデッキに戻してシャッフル。そして2枚ドロウします。ディサイシブ・アームズの第2の効果発動です。手札を1枚捨てて相手フィールドの魔法、罫カードを全て破壊します！」

これでパワー・ツールの守りはなくなった、今攻撃すれば破壊できるね。

「さらに手札からコズミック・クローザーを特殊召喚します。バトルフェイズ、まずはカタストルでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃！」

「うう……パワー・ツール・ドラゴンは破壊されるよ」

「さらにコズミック・クローザーとディサイシブ・アームズの追撃！」

「う、うわああああ！」

龍亞LP100

ここからは大方予想通りだと思えますが龍亞のラストターン。龍亞はリミッター解除を引いたがフィールドにモンスターがいなかったためにも出来ずに優奈のターンになり、一斉攻撃を受けて敗北しました。まあ、序盤からあんなにモンスター出せばそうなるよね。

「2人とも。よく頑張ったね。特に龍亞君、いつの間にあんな強く

なつたの？」

バイトが終わり、帰路の途中でふと気がついた事を龍亞に聞いてみた。すると龍亞は

「悠斗の兄ちゃんや優奈ちゃんに負けたときにね、もっと強くなりたいって思ったから独学で色々勉強したんだ。俺の夢はプロのデユエリストだけど、今は2人に勝つ事が目標だよ」

と言って来た。正直予想外な回答だったから、優奈と顔を合わせずして啞然とした後、2人で少し笑いながら、

「俺（私の）の首は高いぞ（ですよ）。頑張って追いついてみな（さい）少年」

と言いつ返した。多少原作とは違ったスタートになるかも知れないけど、それでもこの2人の成長が楽しみになって来たよ。

さあ、原作開始まで残りわずかか。どんなイレギュラーがあるか分からないから気合い入れて行きますか。

第七話 悠斗の簡単デュエル講座と……（後書き）

次回から原作スタートです。悠斗はどんな感じに原作に関わって行くのか？ 頑張って書きたいと思います。

いつものように感想、ご指摘、意見、オリジナルカードの案などがありましたら是非お願いします。というか感想下さい……割りと切実に感想が欲しいです。



**第八話 原作開始、龍亞VS遊星はまさかまさかの大接戦（前書き）**

少し遅れましたが第八話です。悠斗は内心で遊星の事を蟹と読んでいますが、別に遊星アンチって訳ではありません。

## 第八話 原作開始、龍亞VS遊星はまさかまさかの大接戦

「はあ、相変わらずトップスに入るのって面倒だよな」

「まあ、お金持ちが住んでる所ですからね。警備も厳重になるんでしょね」

「そんなもんなんかねえ」

どうも、最近バイトで新人が入って来て新人の研修を任された広瀬悠斗です。今俺と優奈は龍亞と龍可が住んでいるトップスの一角に行くためにトップスの中に入るための検査を受けています。2人の家に行く理由は簡単、今朝バイトがないから優奈と何するかを考えていたら、突然龍可から電話があつて

『悠斗さん……人を拾っちゃった』

なんて言ってきたからちよつとふざけて、

『龍可ちゃん……誘拐は犯罪だよ。おとなしく、警察行こうか……？』

って言ったら、慌てて否定して、家の前に人が倒れていると感じたから外に出てみると、本当に人が倒れていたから（それもマーク1付き）助けたいらしい。……うん、どう考えても蟹（遊星）です。本当にありがとうございます。って待てよ。蟹が来たって事はもう原作に入ったのかな？ もうそんな時期なんだなあ。とか考えているとトップスに入るためのゲートでの前で、

『だから、この中にマーク1付きの屑野郎が居るんだって！』

『ですから、ここからは先は許可がないと捜査出来ないんです！』

となんか誰かがゲートの警備員ともめていた。この時期に揉めるのって確か……ああ、やっぱり。恐らく最もセキュリティに似合わない漢、牛尾さんが。

「お、悠斗君、優奈ちゃんこんにちは」

「こんにちはは、伊東さん。お勤めご苦労様です」

「ははは、ありがとうございます。ちょっと待っててね。すぐに中に入る手続きを取るから」

「ありがとうございます。それで、こちらの方はどちら様なんでしょうか？」

優奈が伊東さんと話しているのを聞きながら俺は牛尾の方を見る。うん、どう見てもセキュリティには見えないよね。どっちかっていうと極道とかの一員にしか見えないよ。

「ああ、こちらの方は……サテライト方面を管轄にしているセキュリティだよ」

「え？ こんな顔に傷つけて極悪そうな顔してるのにセキュリティなんですか！？」

「おいそれはどういう意味だ！？」

それは思っても口に出しちゃダメだぞ優奈よ。それが本当の事だとしてもね」

「兄さん、口から思考が駄々漏れですよ」

oh……なんてこったい。またやってしまった。いい加減考えた事が口から出るのを直した方がいいな。

「く、口の聞き方がなつてねえガキどもだなあ……！」

「そんなに息を荒くしないで下さい。息が臭い上に気持ち悪いです。ていうか呼吸しないで下さい、環境汚染の原因になります。いや、それ以前にあなたという存在が存在するだけで世の中に悪い影響を与えているのです。願わくば少しでも早く私の視界から消えて下さい」

……うわぁーお、久しぶりに見たよ。優奈の超毒舌コンボ。でも優奈って初対面の人にはあまり毒を吐かない筈なのにどうしたんだ、珍しい。

「いや、なんかあの人を見たら性格が歪んでそうで心から嫌悪感を覚えましたので……」

……子供って不思議だよ。その人の性格とか雰囲気を大まかに把握するんだもの。確かにこの時牛尾はサテライト住民の事を屑と呼び、マーカー付きの事もゴミ扱いしていた。だから俺も嫌いな人物だったしね。俺には原作知識がある。だからある程度の人の性格とか価値観とかを知ってる。しかし（トウルースを持ってたりと不思議な点はいくつか有るが）優奈は一般人だ（他人が違うと言っても少なくとも俺はそう思っている）原作知識が有るわけがない。なのに人の本性を把握するんだから子供ってすごいと改めて思う。

「お待たせ。許可取ってきたよって、どうしたの悠斗君？　なんか遠い目をして」

「いえ、子供ってすごいなあって改めて実感しまして」

「ははは、それはやっぱり子供は純粹だからさ、大人みたいに醜い心を持ってないからね」

「そんなもんですかね。あ、許可取れたんなら失礼しますね。ほら、優奈行くぞ」

「分かりました。では伊東さん、失礼します」  
そう言っただけで俺と優奈はトッパスの中に入る。そしてある程度歩いてから、優奈に話しかける。

「……なあ、なんであそこまでセキュリティの人を罵倒したんだ？」  
「……あの人を見たらなんかものすごい悪意とか丸出しでとても不快なものだったので……。ほら、兄さんは知ってるでしょう？」

……ああ、そういえばそうだった。優奈は普通の子供とはちよつと違う所がある。正確には人の性格とか感情（怒りとか喜びとか漠然としたもの）を読み取れるのだ。例えばAという人がいる。優奈はその人と会話するだけでその人がどんな性格をしていて、今機嫌がいいのか悪いのか、怒っているのか喜んでいるのかというのが分かるのだ。

……優奈はそんな超能力にもならないただ感受性がかなり高いだけなのに苛められていた。理由は簡単、その感受性の高さとか昔から異常に大人びていたからだ。小さい子供は無邪気だ。大人が理屈を立てて考えるのは違い自分のやりたい事したい事を通してやる。しかし優奈は無駄に大人びていた為に子供が言う事にわざわざ理屈を立てて言い返していたのだ（ぶっちゃけどこで覚えて来たんだっけと思うような事も俺に言っただけだからだろうか、小学校に入った時から優奈は苛められていた。1回だけこっそりと優奈の学校での生活を見に行った事がある。そこで見たのは『気持ち悪い』『化物』『広瀬の癖に生意気だ』と言った罵詈雑言を受けながら苛められる優奈の姿だった（机に落書きされたりとかそんな低レベルなものだったが、ここで暴力なんて振られていたら俺はそいつらをまとめて殴っていただろう）。それでも見るに耐えなかつた俺はすぐに優奈の担任にその事を報告したがその時担任が言ったことは知っていたのに止めずに見て見ぬふりをするという本当に腐った言葉だった。だからだ、だから俺は多少なりとも異常でもデュエルが全て

な実力主義のデュエルアカデミアに転校させたのだ。そのおかげで優奈の苛めはなくなつた（それでも数人を除いて全員優奈から距離を置いているが）それでも昔よりよくなつたからいい。……優奈が一体何をしたつて言うんだ。ただ感受性が高いだけの普通の女の子じゃないか。なのによつてたかつて優奈の事を苛めて……

「さん。兄さん」

「ん？ ああごめん。考え事してた」

「……大丈夫ですか？ なんかすごい悲しみと憎しみが混ざつたような顔をしてましたけど」

「大丈夫だよ。ちよつと昔の事を思い出していただけだから」

危ない危ない。危うく負の感情に埋もれてしまふところだった。昔の事という単語でなんの事だか分かつた優奈は顔を伏せながら、

「……やっぱり、おかしいですよね私。人の感情を漠然としたものでも感じ取れるなんて……それにこんな私の為に兄さんは学校を「優奈、それ以上は言うな。それに高校に行かなかつたのは他にも理由がある」……はい」

そつだ、優奈が俺が高校に進学しなかつた事に負い目を感じる必要はないのだ。あれは俺がちゃんとした理由があつて止めたことだ。優奈に責任はないし、あいつにも責任はない。全部俺が招いた事なんだから。それに、

「優奈、前に俺が言つた事覚えてるか？」

「え？ 確か……」大丈夫。例えお前が世界中の人間から嫌われても俺だけは好きでいてやる。例えお前が世界で一人ぼっちになつたとしても俺だけはそばにいてやる。だつて俺らは

「「兄妹だから」」

そうだ。俺は約束したんだ。父さんと母さん、そして優奈と。優奈が独立するまでは一緒にいると、そして俺が死ぬまでずっと優奈の味方していると。

「だからさ、そうやって自虐なんてするなよ。それに、お前にだって友達とか理解者位いるだろ？ そいつらを頼れ、お前は1人じゃないんだから」

「まあ、確かにこかげさん（夏乃の妹）や姫美さんといった私みたいにちよつと特殊な友達はいますし、最近じゃ龍可さんや龍亞さんとも仲良くなつてきましたし……」

「そう、だからそういった友達を頼りな。俺だってこの先どうなるか分からないんだから」

そうだ。俺は気がついたらこの世界に転生してたんだ。前世の記憶はあるが、死ぬ直前の記憶がバツサリと抜け落ちている。だってまた気づかないうちにどこかに転生させられるなんて可能性があるのかも知れない。

「……って随分暗い話になった上に長くなったな。少し急ぐか、龍可ちゃん達も待ってるだろうし」

「……そうですね。これ以上遅くなったら龍亞さんが何か言いそうですもんね」

そう、言ってさっきまでの話を打ち切り、談笑をしながら龍可達の家に向かった。

いつ死ぬか分からないんだ。だったら今を楽しく生きてやる。

「……で、なんでこんな事になってるの？」

そう龍可に聞きながら俺は庭？ の方を見る。するとそこには二トロ・ウォリアーで攻撃を仕掛ける蟹とそれを妨害電波で防ぐ龍亞の姿があった。あれ？ 本来ならここでマグネンをボコされて負けるじゃなかったっけ？ 何故にまだライフが残ってるし……どういう事だ？

「……どういう事だ？ なんであそこまで強くなってるんだ？」

「いや、確実に兄さんが強くすぎたからでしょう」

「そうよ。十中八九悠斗さんの指導のおかげ（せい）ですよ」

くう、小学生2人に指摘されるなんて……不覚。ていうか現実から目を反らしたくないだから指摘しないで欲しかった。それはさておき、二人のフィールドを確認してみよう。蟹のフィールドには二トロ・ウォリアーとターボ・シンクロン。伏せカードが1枚あり、手札は3枚。龍亞はフィールドにはボードン、マグネンU、モバホンの3体、伏せカードは無しの手札は2枚。お互いのライフは共に4000と今は互角の状況だ。さて、妨害電波の効果で二トロ・ウォリアーがエクストラデッキに戻って龍亞のターンだ。

「俺のターン、ドロー！ まずはモバホンの効果発動！ 出た目は



6、よって6枚ドロ！ よし、D・スコープンを攻撃表示で召喚！ レベル3、D・ボードンとレベル1、D・モバホンにレベル3、D・スコープンをチューニング！ 世界の平和を守るため、勇気と力がドッキング！ シンクロ召喚！ 愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！」

うおう、なんて早いシンクロ召喚だ！ 軽くビツクリだ。これなら蟹だって大ダメージ確定だね。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！ パワー・サーチ！ …… やった、装備魔法、クラッシュ・バンカーをパワー・ツール・ドラゴンに装備！」

クラッシュ・バンカー（オリジナルカード） 装備魔法

機械族モンスターに装備する事が出来る。このカードを装備したモンスターは攻撃力が1000ポイントアップし、相手モンスターを破壊したとき相手モンスターを除外し、相手に1000ポイントのダメージを与える。

龍亞がそう言うと、パワー・ツールの手に大きな杭打ち機が……うん、パイルバンカーだね。いや、確かにドリルに並んで漢の浪漫だけどさ。デュエルで使っつていいものなの？

「いつけえ！ パワー・ツール・ドラゴンで攻撃！ 古き鉄の夜の一撃、リボルビング・ブレイカー！」

アルトアイゼン・ナハト！？ 何故にナハト！？ しかもそれなりに似合ってるし！

「畏発動！ 攻撃の無力化！ バトルを無効にして、バトルフェイズを終了する！」

「ならカードを2枚伏せてターンエンド！」  
「俺のターン、ドロ。魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のレベル・ステイラーを墓地に送り、チューニング・サポーターを攻撃表示で特殊召喚！ さらに魔法カード、調律を発動。俺はデッキのロード・シンクロンを手札に加え、デッキの1番上を墓地に送る」

……落ちたカードはボルト・ヘッジホッグ、いいカードが落ちたな。さらにロード・シンクロンか……容赦ないなあ。

「さらに魔法カード、機械複製術を発動し、デッキのチューニング・サポーターを2体特殊召喚。そして、ロード・シンクロンを召喚！ チューニング・サポーターはシンクロ素材とする時レベル2として扱う事が出来る。行くぞ！ レベル2となったチューニング・サポーター2体に、レベル4、ロード・シンクロンをチューニング、集いし希望が新たな地平へいざなう、光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 駆け抜ける、ロード・ウォリアー！ チューニング・サポーターの効果でこのカードをシンクロ素材とした時1枚ドロする。俺は2体シンクロ素材にしたから2枚ドロ！ ボルト・ヘッジホッグの効果発動！ このカードはフィールドにチューナーがいる時特殊召喚する事が出来る！ さらに墓地のレベル・ステイラーの効果でロード・ウォリアーのレベルを1下げ、このカードを特殊召喚。レベル2、ボルト・ヘッジホッグとチューニング・サポーターとレベル1、レベル・ステイラーに、レベル1、ターボ・シンクロンをチューニング。集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 轟け、ターボ・ウォリアー！」

……本当に容赦ないな蟹。ターボにロードって十分過ぎる戦力だよ。

「行け、ターボ・ウォリアーで攻撃！」

「でもパワー・ツール・ドラゴンの方が攻撃力は上だよ！ 行けえ、パワー・ツール・ドラゴン！」

「ターボ・ウォリアーの効果発動！ このカードはレベル6以上とバトルを行うとき、相手の攻撃力を半分にする！」

これでパワー・ツールの攻撃力は半分の1650、ターボの攻撃力を下回った。さて、どうする龍亞？

「パワー・ツール・ドラゴンは装備したカードを墓地に送る事で破壊を免れる！」

龍亞LP3150

「なら、ロード・ウォリアーで攻撃！ ライトニング・クロー！」

「畏発動！ パワー・フレーム！ この戦闘を無効にしてその攻撃力の差分攻撃力をアップさせる！」

あ、これは……

「優奈ちゃん、悠斗さんこれって……」

「ええ、多分プレイミスですね。ターボ・ウォリアーの時に使えば攻撃力は850上がって4250まで上がりましたね。さて、これが本当にただのプレイミスなのか……それとも」

……なにかを狙ってやっているのか、どっちかだね。さて、次のターンどう動くかな……？

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！  
……よし！ 俺は装備魔法、エナジーランチャーを発動！」

エナジーランチャー（オリジナルカード） 装備魔法

自分フィールドに存在する機械族モンスターにのみ装備する事が出来る。このカードを装備したモンスターは自分ライフと相手ライフの差分攻撃力をアップする。このカードを装備したモンスターが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターのレベル×300ポイントのダメージを与える

龍亞がそう叫ぶとパワー・ツール・ドラゴンの右腕に巨大な銃が装備される。さっきがナハトだったからこれは……ヴァイスのオクスタンランチャーかアーベントのバルチザンランチャーだな。というか今回スパロボネタが多いな。それはさておき、今の2人のライフ差は850だからパワー・ツールの攻撃力は……3850か。

「行けえ！ パワー・ツール・ドラゴンでターボ・ウォリアーを攻撃！ 夕方の白騎士の砲撃、バルチザンランチャー！」

「くっ！ ターボ・ウォリアーが破壊された瞬間畏発動、奇跡の残照！ このターン、戦闘で破壊されたターボ・ウォリアーを復活させる！」

「でも一回破壊したことには変わらないからエナジーランチャーの効果発動！ このカードを装備したモンスターが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターのレベル×300ポイントのダメージを与えるよ！ ターボ・ウォリアーのレベルは6、よって1800ダメージを遊星に与えるよ！」

遊星LP450

今ので二人のライフ差は2700となったからパワー・ツールの

攻撃力は5700となつてターボ・ウォリアーでも倒せない領域になつてしまった。でもそれを覆すのが蟹（遊星というか主人公）なんだよなあ……これの前作の主人公であるクラゲ（十代）に比べたらまだだと思っけどさ。てかここで蟹が負けちゃダメでしょう、我ながら龍亞を強くしすぎたと思う。ははは……どうしよう？ ボマ―にだつてデイマクにだつて勝てそうだぞこの龍亞。

「ターンエンドだよ」

「俺のターン、ドロ―！ 手札のスピード・ウォリアーを捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚。さらにジャンク・シンクロンを召喚し、効果発動！ 墓地のスピード・ウォリアーを特殊召喚！ レベル2、スピード・ウォリアーに、レベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力を呼び起こす、光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、ジャンク・ウォリアー！ そして、ロード・ウォリアーの効果でデッキからシールド・ウィングを特殊召喚！ レベル2、シールド・ウィングにレベル5、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く、光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、ジャンク・アーチャー！」

「……優奈、こいつを見てくれ。どう思う？」

「すごく……鬼畜です……ていうか、シンクロモンスターを4体フィールドに並べた上に1ターンに2体ずつ召喚ってどんなチートドロ―ですか」

うん、概ね同意するよ。そしてこのタイミングでアーチャーとかひでえ。

「ジャンク・アーチャーの効果発動！ 1ターンに一度、相手モンスターをエンドフェイズまで除外する、デイメンジョンシユート！」

あ、パワー・ツールが除外された。それによってパワー・ツールに装備されてたカードは全て破壊されて……終わったな。

「さらに速攻魔法、ダブルサイクロンを発動！ お互いの魔法、罨ゾーンのカードを1枚破壊する。そして、ダブルサイクロンで破壊された荒野の大竜巻の効果発動！ このカードがセットされた状態で破壊された時、相手フィールドのカードを1枚破壊する！ 俺はD・ボードンを破壊する！ 行け！ ジャンク・アーチャー、ジャンク・ウォリアー、ターボ・ウォリアー、ロード・ウォリアーの四体でダイレクトアタック！」

「うわああああ！」

### 龍亞LPO

えーっと、ロードが3000、ターボが2500、ジャンクは両方とも2300だから……合計は10100で、龍亞の残りライフは3150だったから6950のオーバーキルか。まあ、ご愁傷様つと言つところかな？ でも頑張った方が、蟹のライフを1000以下まで削つたしね。その後、お互いに軽い自己紹介をした後、今度は龍亞の家で夕飯をご馳走になった（というか俺が材料買ってきて作った）後、解散になった。

そして、その夜。俺と優奈は龍亞の家の駐車場で蟹が来るのを待っている。つーか張り込みをしている。

「ねえ、兄さん。ホントに遊星さんはここに来るんですか？」「うん、来ると思うって噂をすれば……はい、遊星さん。どこ行こうとしているのかな？ 今日は龍可ちゃん達の家に泊まるんじゃないかなの？」

「……悠斗か。俺がいたら2人の迷惑がかかるからな。それに、行くところもあるしな」

「迷惑がどうかは龍可ちゃん達が決める事だけ……いいや、行ってらっしゃい」

「……止めないのか？」

「ん〜本来なら気絶させてでも止めないといけないとは思っただけど、行くところがあるんでしょ？ その行くところの為に遊星さんはマーカー付きの犯罪者になってまでもサテライトから出てきたんだから」

「なっ!?!? どうしてそれを……!?!?」

原作知識です。とは言えないからなあ……なんて答えるか……

「だって気絶したところを龍可ちゃん達に拾われたって事は多分セキユリテイから逃げていたところで力尽きたかなにかあったんでしょ？ それにここはトップスだよ？ バレなければ安全なところかも知れないけどバレたらまた捕まって更に罪が重くなる。そんなリスクが高い場所にシティの犯罪者はいかないからね。だったらそんな事知らないサテライト住民だと考えるのが妥当でしょ？」

ぶつちやけこじつけですが。と内心で言うが、シティの事にあまり詳しくない蟹は信じてくれたようだ。

「それに、今生の別れって訳でもないし、またいつか会えるでしょ」

「ああ、そうだな……」

「だけどね、遊星さん。1つだけ言っておくよ。龍可ちゃん達を悲しませるような事をしたら俺は遊星さんを軽蔑するからね。あの2人は優奈の友達であって、俺のとっても弟や妹みたいな存在なんだから」

2人に出会ってまだ4ヶ月位。原作でも嫌いではなかったからか、俺はこの生活が結構気に入ってた。だから俺は万が一でも蟹があ

2人を悲しませるような事をしたら本気でキレるだろう。

「……分かった。心に留めておく」

「じゃあ、俺が言いたかったのはそれだけですから、遊星さん、またどこかで」

「では、失礼させて頂きますね」

「またな、2人とも」

そう言っただけで俺達は蟹と別れ帰路につく。帰る途中、夜空を見上げながら、フォーチュンカップまで後数日か……とか思いながら、俺の切り札である『円卓の龍騎士』を使うのに十分な相手が何人いるか考えて、心を踊らせた。



**第八話 原作開始、龍亞VS遊星はまさかまさかの大接戦（後書き）**

最近スパロボOGs（ちょっと古い）にはまっけてしまい、クリアに向けて頑張っていたので更新が遅れました。アルトとヴァイスがっこいいよ。

いつものように感想、意見、指摘、オリジナルカードの案などがありましたら是非お願いします。

今回は多分フォーチュンカップ開催ちよつと前の話となります。

第九話 悠斗VS優奈 本気と本気のぶつかり合い（前書き）

今回も難産でしたが、意外と早く書けました。それでは第九話お楽しみ下さい。

## 第九話 悠斗VS優奈 本気と本気のぶつかり合い

「兄さん、準備はいいですね。本気で行かせてもらいます」

「あー、はいはい。分かったよ、本気でやればいいんですよ。はあ、なんでこんな事に……」

どうも、我ながら超ガチデツキを作ったなあ、と思う広瀬悠斗です。いや、ホントに調子に乗りすぎた、ネタデツキやテーマデツキじゃなくてマジなガチデツキ作っちゃったよ。なんていう事をしてくれたのでしょうか（俺の無意識が）。まあそれは置いて、なんでこんな事になってるのか考えよう。

えーっと、龍亞が蟹のところ行こうと言ってきた（どうやらアキ遭遇イベントは既に終わってたらしい）

ちょうど大会用にデツキを構築していた蟹に調整の為にデュエルを挑もうとした（龍亞達に聞こえないように）

優奈がどんなデツキかと聞いてきたから（転生してから）今までにないくらい超ガチなデツキと答えた

よろしい、ならばデュエルだよ優奈（今ここ）

……あれ？ 全く分からないぞ………どういう事だ………？ 俺何か悪い事言ったかな？ うーん、分からん。けど本気でデュエルを挑まれたなら今回は真剣にやるとしますか………。

「行くぞ優奈、お前の望み通り本気でな」

「分かってます。……長年待ち望んで来たことですから」

優奈がなんかボソボソ言ってるが結構距離があるのでなに言って

るか分からない。因みに今回の観戦者は龍亞、龍可、蟹、氷室とじいさん（名前忘れた）の5人だ。

「デュエル」

悠斗、優奈LP4000

今回は大会用のデッキって事で4000ライフでのデュエルだ。さて、手札は……まあまあかな。

「俺のターン、ドロー。ドラグニティ トリブルを攻撃表示で召喚し効果発動。デッキからドラグニティ ファランクスを墓地に送る。さらに魔法カード、調和の宝札を発動。手札からドラグニティ ブランディストックを墓地に送り2枚ドロー。ついでに魔法カード、トレード・インを発動。手札のドラグニティアームズ レヴァティンを墓地に送って更に2枚ドロー。そして、トリブルを墓地に送り、ドラグニティアームズ ミスティルを特殊召喚し効果で墓地のドラグニティ ブランディストックを装備する。カードを2枚伏せてターンエンド」

「な！？ たった1ターンでここまでドローして、上級モンスターを召喚するなんて！」

「悠斗の兄ちゃんは強いんだから、これくらい朝飯前だよ！」

いや、そんな事はないから。単に手札がよかつただけだから。っと、いけない。デュエルに集中しなきゃ。優奈の本気デッキは2つある。1つはヴァイロン、そしてもう1つは……

「なるほど、兄さんの本気はドラグニティだったんですか……私のターン、ドロー。終末の騎士を攻撃表示で召喚し、効果発動。デッキからネクロ・ガードナーを墓地に送ります。カードを2枚伏せて

ターンエンド」

ってあれ？ 意外と普通な出方だな。初っぱなから高レベルモンスターを出されると踏んでいたんだけど……。

「俺のターン、ドロー。ドラグニティ ミリトゥムを攻撃表示で召喚。ミリトゥムで終末の騎士を攻撃」

「畏発動です。万能地雷グレイモヤ。兄さんの1番攻撃力の高いモンスター、ミステイルを破壊します。そして、終末の騎士はなす術なく破壊されます」

優奈LP3700

「ターンエンド」

「私のターン、ドロー。闇の誘惑を発動してカードを2枚ドロー。そして異次元の偵察機を除外します」

ちい！ ついに中核となるカードが来たか！ 優奈のもう1つの本気デッキ、それは除外を主体としたダークモンスターデッキ、通称次元ダークだ。このデッキで恐ろしいカードの内の1枚こそが異次元の偵察機と呼ばれるカードだ。このカードは除外される事によってその真価を発揮する。何故ならこのカードは除外されたエンドフェイス、攻撃表示で特殊召喚出来るのだ。生け贄にもカードのコストにも使える、真面目に厄介なカードだ。

「さらに手札から暗黒界の取引を発動します。お互いに1枚ドローして、1枚墓地に捨てます。私はキラー・トマトを捨てます」

「俺はドラグニティ プリムスピルスを墓地に送る」

さて、今優奈の墓地には3種類の闇属性モンスターがいる。つま

りだ、来るぞ……あまりの強さに唯一制限カードになったダークモンスターが……

「私の墓地に三種類闇属性モンスターがいる時、手札からダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚します！　そしてダーク・アームド・ドラゴンの効果発動！　墓地の終末の騎士を除外してドラゲニティミリートウムを破壊します！」

「そう簡単に破壊させるか、罨発動！　ゴット・バードアタック！　ミリートウムをリリースして、ダーク・アームド・ドラゴンとその伏せカードを破壊する！」

「それこそさせません！　カウンター罨、デストラクション・ジャマーを発動！　手札のネクロ・フェイスを捨て、モンスターを破壊する効果を無効にして破壊します！」

「それこそさせねえ、カウンター罨、トラップ・ジャマー！　手札のスタンピング・クラッシュを捨てて罨カードの発動を無効にして破壊する！」

うう……折角対闇次元の解放用にとっておいたのに……で、でも優奈の手札は残り1枚、ダーク・アームドも倒したし、状況はこっちの方が有利だ。

「……なーんて思っているだろう兄さんに問題です。今私の墓地には何種類闇属性モンスターがいるでしょう？」

「え？　そりゃあ、ダーク・アームドにキラール・トマト、ネクロ・ガードナーとフェイ……ス……ま、まさか……。ゆ、優奈……最後の1枚はダーク・ネフティスじゃ、ない……よな……？」

「そのまさかですよ。墓地に4種類以上存在する時、墓地の闇属性モンスター2体を除外して、手札のダーク・ネフティスを墓地に送り、次の私のターンに特殊召喚します。私はネクロ・フェイスとキラール・トマトを除外して、ダーク・ネフティスを墓地に送ります。」

さらに、除外したネクロ・フェイスの効果発動。このカードが除外された時、お互いデッキトップを5枚除外します」

優奈の除外されたカードは順にダーク・グレイファー、死者転生、D・D・R、邪帝ガイウス、封印の黄金櫃の5枚。俺は順に竜操術、ドラグニティ レギオン、オーバー・ドライブ（オリカ、詳細はまた今度）、ドラグニティアームズ ミスティル、竜の渓谷っついてえええええ！ 竜操術と竜の渓谷のメインカードの3枚が落ちた！ いや、両方とも2積みしてるけど1枚落ちただけでも結構痛いぞこれは！

しかも次のターンにはダーク・ネフティスが来るから次のターンまで迂闊にカードも伏せられない。あれ？ もしかして詰んだ？ いやいやいや、まだチャンスはある筈だ。手札には逆転出来そうなカードがあるし、後はあのカードを引けば形勢逆転出来そうだ。

「ターンエンドです。そして、除外された異次元の偵察機を攻撃表示で特殊召喚します」

「俺のターン、ドロー。……モンスターをセットしてターンエンド」

くそっ、今は耐えるしかないな。とはいえ、そんなに長くは稼げないけどね……。

「私のターン、ドロー。この瞬間、墓地に送られたダーク・ネフティスを特殊召喚します。さらに、手札からダブル・コストーンを召喚。ダブル・コストーンでセットモンスターを攻撃です」

「俺のモンスターはストーム・ファルコン、破壊される。が、破壊されたストーム・ファルコンの効果発動。このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の鳥獣族モンスターを特殊召喚する」

ストーム・ファルコン（オリジナルカード） 3 風属性 鳥  
獣族

攻撃力1400 守備力1100

このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の鳥獣族モンスターを1体特殊召喚する事が出来る。

うん、ただの仮面竜の鳥獣族版だよね。まあ、役に立つから使うけど。

「俺は2体目のストーム・ファルコンを守備表示で特殊召喚する」  
「時間稼ぎですか……なら、さらにダーク・ネフティスで攻撃、吹き荒れて、ダークネス・フェーン」「ストーム・ファルコンは破壊され、デッキからドラグニティ ドウクスを攻撃表示で特殊召喚する」

まずいな……このままじゃ致命傷を受けるのは時間の問題だ。早くなんとかしないと……！

「ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー。……調和の宝札を発動。手札のドラグニティ ファランクスを墓地に送り、2枚ドロー。……くそっ、ドラグニティ ドウクスで異次元の偵察機を攻撃」

「異次元の偵察機は破壊されます」

優奈LP2800

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー。ダブル・コストーンをリリースして、ダーク・ホルス・ドラゴンを召喚します。ダーク・ネフティスでドラグニティ ドウクスを攻撃、ダークネス・フェーン」



「罨カード発動、くず鉄のかかし。この戦闘を無効にする」  
「なら、ダーク・ホルス・ドラゴンで攻撃、ダークネス・フレア」  
「くっ、ドウクスは破壊される」

悠斗LP2700

くっ、今のダメージは結構痛いな…… っっていうか止めるの間違えた、ネフティスじゃなくてホルス止めればほんの少しだけダメージを軽減できたのに。

「ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー。よし、2枚目のドラグニティ ドウクスを召喚し効果発動。墓地のファランクスをこのカードに装備する。さらにファランクスの効果で装備されたこのカードを特殊召喚。行くぞ、レベル4、ドラグニティ ドウクスにレベル2、ドラグニティ ファランクスをチューニング！ 鮮血煌めく白銀の魔槍の担い手よ、今ここに、龍騎の畏怖を示せ！ シンクロ召喚！ 穿て、ドラグニティナイト ゲイボルグ！ ドラグニティナイト ゲイボルグでダーク・ホルス・ドラゴンに攻撃！」

「なにを血迷った事してるんですか。ゲイボルグの攻撃力は2000ですよ？ 攻撃力3000のダーク・ホルス・ドラゴンには敵いませんよ」

あー、そっか。優奈はドラグニティとやりあった事が無いんだっけ？ だからこのカードの効果を知らないのか。

「ドラグニティナイト ゲイボルグの効果発動！ このカードが戦闘を行う時、墓地の鳥獣族モンスターを1体除外する事で除外したモンスターの攻撃力分、エンドフェイズまで攻撃力をアップする！俺はストーム・ファルコンを除外してその攻撃力、1400ポイ

ントアップする！ 貫け、デス・ピアス！」  
「うっ、ダーク・ホルス・ドラゴンは破壊されます」

優奈LP2400

「悠斗の兄ちゃんが優奈ちゃんのライフを抜き返したよ！」  
「あの2人なんて高度なデュエルをしているんだ！？ プロ顔負けだぞ」

えー、マジでか？ まだまだこれからなんだけど……っっていうかこれでプロ顔負けって……。

「ターンエンド」

「私のターン、ドロー。速攻魔法、異次元からの埋葬を発動です。私は除外されているネクロ・フェイス、邪帝ガイウス、ダーク・グレイファーを墓地に戻します。ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー。ドラグニティナイト、ゲイボルグでダーク・ネフティスを攻撃！ ゲイボルグの効果発動。墓地のストーム・フアルコンを除外して1400ポイント攻撃力をアップする！ 貫け、デスピアス！」

「……ダーク・ネフティスは破壊されます」

優奈LP1400

よし、これで逆転した。だけど、怖いな……優奈の墓地には閻魔性モンスターが7種類以上いる。あの2枚を発動する条件は揃っている。いつ来るか分からないし、どちらが先に来るか勝負だな。にしても、なんでネクロ・ガードナーを使わないんだ？ 今なら使い時だったのに……なにが目的なんだ？

「ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。……やった！ 魔法カード、終わりの始まりを発動です。このカードは墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する時発動する事が出来ます。そのカードの内、5体を除外して私は3枚ドローします。私はネクロ・フェイス、ダーク・アームド・ドラゴン、異次元の偵察機、ダブル・コストン、ダーク・グレイブアーを除外し、3枚ドロー。さらに、ネクロ・フェイスの効果発動お互いの墓地からカードを5枚除外します」

優奈が除外されたのはダーク・クルセイダー、ダーク・ゾーン、聖なるバリア ミラーフォース、ダーク・リゾネイター、闇の幻影の5枚。俺が除外されたのは竜操術、デザート・ストーム、ドラグニティ レギオン、ドラグニティ ミリトウム、ドラゴン・インパクトの5枚。つて竜操術が全部落ちたああああ！ なんてこったい！ 一気にきつくなっただぞ！

「私はモンスターをセットして、カードを2枚伏せてターンエンドです。そして、また異次元の偵察機は特殊召喚されます」

「俺のターン、ドロー。ドラグニティ ブラックスピアを召喚し、異次元の偵察機を攻撃」

「異次元の偵察機は破壊されます」

優奈LP1200

「さらにドラグニティナイト ゲイボルグでセットモンスターを攻撃」

「私のモンスターはメタモル・ポット。お互いに手札を捨てて、5枚ドローします」

「ちよ、それはヒドイ」

優奈め！ 俺のデッキを破壊する気か！？ もつデッキのカード

はあんまりないぞ！

「さらに私はライフを半分支払い異次元からの帰還を発動です。このカードは除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚しますが、そのターンのエンドフェイズ、特殊召喚したモンスターは全て除外されます。私が特殊召喚するのは終末の騎士、ネクロ・フェイス、キラー・トマト、ダーク・ネフティス、邪帝ガイウスを召喚します。そして、終末の騎士の効果発動にチェーンして畏カード、激流葬発動です。フィールドのモンスターを全て破壊します」

優奈LP600

ひでえ、手札全て捨てられた上に、優奈に手札補充を許しちまった。しかもこつちのフィールドにモンスターはいない。召喚権は使ったからモンスターの召喚も出来ない。ついでに俺のデッキはもう半分を切っている。またネクロ・フェイスを使われたら詰んだも同然な状態になりそうだ。

「終末の騎士の効果で私は2枚目のキラー・トマトを墓地に送ります」

「……カードを3枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー。墓地のネクロ・フェイス、キラー・トマト、終末の騎士、邪帝ガイウス、異次元の偵察機、ダーク・ネフティス、ダーク・ホルス・ドラゴンを除外して、究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴンを特殊召喚します」

来たよ、召喚条件はかなりキツいけどかなり強いダークモンスターが、しかもネクロ・フェイスのせいでさらにカードを除外されるし、本気で不味いな……。

「ネクロ・フェイスの効果でお互いに5枚除外します」

今回の除外されたカードは省略するが、優奈も俺もかなり痛いカードを除外されたと言っておこう、特に俺は竜の渓谷も全て落とされ、俺の切り札を召喚するためのドラグニティも半分落とされた。かなりヤバいですこれは。

「レインボー・ダーク・ドラゴンの効果発動。フィールド、墓地の闇属性モンスターを全て除外して、除外した数×500ポイント攻撃力をアップさせます。私の墓地には4体の闇属性モンスターがいますので全て除外して攻撃力2000ポイントアップしてレインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃力6000となります。攻撃する前に速攻魔法、サイクロンでくず鉄のかかしを破壊します。レインボー・ダーク・ドラゴンでダイレクトアタック。レインボー・リフレクション」

「ここで終われるか！ 罨カード、ガード・ブロック！ この戦闘でのダメージを0にして1枚ドロウする！」

「なんとか凌ぎましたか……しかし、兄さんのライフは風前の灯も同然です。カードを3枚伏せてターンエンドです。この時、異次元の偵察機は特殊召喚されます」

確かにこのままじゃ確実にレインボー・ダークの攻撃を受けてデッドエンドだ。なんとしても引かなければ、ここから一気に逆転出来るカードを！

「俺のターン、ドロウ！ ……ドラグニティ ドウクスを攻撃表示で召喚して効果発動！ 墓地からドラグニティ ブランディストックを装備する。そしてドウクスを除外して墓地からドラグニティアームズ デュランダルを特殊召喚！」

ドラグニティアームズ デュランダル（オリジナルカード）

8 風属性 ドラゴン族

攻撃力2400 守備力1000

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスター1体をゲームから除外し、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、『ドラグニティアームズ-デュランダル』以外の自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

装備カードを装備したこのカードが戦闘を行うとき、ダメージステップの間、相手モンスターは装備しているモンスターのレベル×100ポイント攻撃力をダウンする。

「ドラグニティアームズ デュランダルが召喚に成功した時、墓地のドラゴン族モンスターを1体を装備する事が出来る！俺はドラグニティ ファランクスを装備！さらに魔法カード、星屑のきらめきを発動。墓地のドラグニティナイト ゲイボルグを選択し、同じく墓地のドラグニティ アクユリスとドラグニティ ドウクスを除外してドラグニティナイト ゲイボルグを特殊召喚！さらに装備されたドラグニティ ファランクスの効果で自身を特殊召喚する……行くぞ優奈、これが俺の本気だ。今まで隠してきたけど、もう手加減する必要が無いと思うからな。全力で行かせてもらう」

正直予想外だった、ここまで強くなつてるとは思わなかったからね。だからもういいだろう、手加減するのはやめにしよう。

「……知ってましたよ。兄さんが手を抜いてデュエルしていた事くらい。当然じゃないですか、私と兄さんには5年程歳が離れているんですから、実力もキャリアも差があるのは当然です」

「なら、どうして今までなにも言わなかったんだ？」

「だって、兄さんが私を強くするためにやった事でしょ？ 私の強さに合わせて手加減する。だから常に私は少し苦戦して勝つように、負けてもなにか得れるものを作り出したり、そうやって私を強くして来たんですから、私のために兄さんは」

……違う。俺はただ自分の自己満足で、優奈が俺が居なくても生きていけるようにしたいだけだ。だから……決して優奈の為じゃない。

「さて、デュエルを再開しましょう」

「……そうだな。俺はドラグニティアームズ デュランダルにドラグニティ ファランクスをチューニング！ 白銀の枢にて眠る龍騎士よ。大いなる冷気を纏い、全てを凍らせる魔剣となれ！ シンク口召喚！ 氷結せよ！ ドラグニティラウンドナイト デュランダル！」

ドラグニティラウンドナイト デュランダル（オリジナルカード）

10 風属性 ドラゴン族

攻撃力2800 守備力2200

ドラグニティアームズ デュランダル+ドラゴン族チューナー1体

このカードは水属性としても扱う。

1ターンに1度、相手モンスターを1体選択して、攻撃力を1000ポイントダウンさせる。このカードの効果で攻撃力を下げられたモンスターは次のターンのエンドフェイズまで効果を無効となる。

そう言う俺のフィールドに1体のドラゴンが現れた。それは白銀の鎧と剣を持ち、翼や頭の一部が氷で覆われている。これこそが俺のエースモンスター群『円卓の龍騎士』の一角、ドラグニティラウンドナイト デュランダルだ。

「……きれい」

「ああ、とても美しいドラゴンだ」

外野で蟹達も見とれているようだ。まあ、確かに美しいけどね。ただ1人、優奈だけは、

「……それが兄さんの切り札ですか？」

「そうだよ。ドラグニティラウンドナイト デュランダルの効果発動！ 相手モンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！

ダイヤモンド・フリーズ！」

「それでもレインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃力は5000、ゲイボルグの効果を使用してもまだ届きませんよ」

「残念だったな、デュランダルの効果で攻撃の下がったモンスターは下がったターンから次のターンのエンドフェイズまで効果が無効化されるんだ。つまり、レインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃力は3000となる！」

「レインボー・ダーク・ドラゴンを破壊されるわけにはいきません！ 罠カード、ツイン・ボルテックスを発動！ 異次元の偵察機とドラグニティナイト ゲイボルグを選択して、破壊します！ これでレインボー・ダーク・ドラゴンを破壊する事は出来ません！」

「それがそうはいかないんだな、これが！ まず手札からシンクロキャンセルを発動してラウンドナイト デュランダルをエクストラデッキに戻し、フランクスとアームズ デュランダルを特殊召喚。デュランダルの効果で墓地からアキュリスを装備して、再びシンクロ召喚！ ドラグニティラウンドナイト デュランダル！ 墓地に送られたアキュリスの効果で優奈の伏せカードを1枚破壊する！」

破壊したのは闇次元の解放。ブラフのようなそうじゃないようなカードだ。もう1枚は……多分ブラフかなにかだろう。聖バリは除



外されてたし、除去カードの可能性は低い。

「デュランダルの効果でレインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃力をさらに1000下げる。これでレインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃力はデュランダルの下回った！ 行けっ！ ドラグニティライウンドナイト デュランダルの、レインボー・ダーク・ドラゴンを攻撃！ 断ち切れ絶氷の剣、セルシウス・キャリバー！」

「まだです！ 畏カード、ハーフ・カウンターを発動！ デュランダルの攻撃力の半分をレインボー・ダーク・ドラゴンに加えます！」  
「甘いわ！ 畏カード、魔宮の賄賂！ 相手の魔法、畏カードの発動を無効にして、破壊する。そして、相手は1枚ドロウ出来るが、その必要はない。ここで終りだ！」

デュランダルの剣を構えると辺りから強烈な冷気が発生し、レインボー・ダーク・ドラゴンの体を凍らせて、一刀両断。その言葉が彷彿されるような太刀筋が閃きレインボー・ダーク・ドラゴンを両断する。その光景はまるで邪悪な龍を狩る龍騎士みたいだった。

優奈 L P O

「……やっぱり、兄さんは強いですね。完敗です」

「まあ、兄の意地があるからね。本気でやるならまだ優奈に越され

るわけにはいかないよ」

デュエルが終わって時は既に夕暮れ、俺はデュエルで疲れきった優奈を久々に背負いながら道があるいている。にしても、今日のデュエルは予想外だったな。まだラウンドナイトを出す予定はなかったのに召喚しちゃったしね……

「……ねえ兄さん」

「ん？ どした？」

「たまにでいいですから、また私と本気でデュエルしてくれませんか？」

「いいよ。その代わり手加減は一切しないからな？」

「望むところです。……つと、言いたいところですが、それはちょっと酷くないですか？ 少しは手加減してくださいよ」

「本気の俺は一切妥協しないからね」

「なんですかそれは。初めて聞きましたよ」

そう笑い合いながら俺は帰り道を歩く、夕日は既に沈みかけていて、空には一番星が輝いていた。

「……ありがとう、さん」

「ん？ なんか言ったか？」

「いや、なんでもありませんよ」

背中で優奈がなにか呟いていたがそれが俺の耳には届かなかった。

さて、明日からフォーチュンカップだ。いっちょ気合い入れて行きますか。

## 第九話 悠斗VS優奈 本気と本気のぶつかり合い（後書き）

ドラグニティラウンドナイトについて。

ドラグニティアームズをシンクロ素材とする6体のシンクロモンスター。風属性＋神属性以外の全ての属性に対応しているモンスターがいて、全てに聖剣や魔剣の名前がついている。レベルは一律で10、ドラゴン族。今回出てきたのは水属性＋風属性のデュランダル、効果は攻撃力ダウンと効果無効の2つです。

とまあ、ドラゴン族ドラグニティには武器（槍）の名前がつけられている事してから考えていたモンスターです。元々はラウンドナイトなんてついていなかったんですが、ちょうど6体思い付いたのでドラグニティナイトとは別の名称をつけようという理由でつけました。

いつものように感想、ご意見、誤字脱字、オリカ案などがありましたら是非お願いします。

次回からフォーチュンカップに入ります

## 第十話 フォーチュンカップ開催！（前書き）

テストがあったので更新が遅れました。今回は短いですが、それでは第十話どうぞ。

## 第十話 フォーチュンカップ開催！

「レディースアード、ジェントルマン！ここにフォーチュンカップが開催するぞー！」

とまあ、司会が言っているように今日はフォーチュンカップの開催日。ガチデツキ作ったわりにはあまりやる気が出ない広瀬悠斗です。いやだってこれ出来レースもいいところじゃん。わざと負けるなんて、原作を守るため以外でする気なんてこれっぽっちもないしね。さてと、出場者控え室にでも行くかな。そう思っただけで出場者控え室に行くと、龍亞や蟹、十六夜アキを含めて、15人程人がいた。あれ？多くない？原作は8人だった筈なのに倍ですかそうですか。

「な、なんで悠斗の兄ちゃんがここにいるの!？」

「ん？あー、ずっと前から参加証が届いてたからね。言わなかったけど」

そう言つと龍亞は顔を青くして、

「す、救いはないの!？」

「あるわけがない。ここから先は一方通行さ。……絶望へのね」

「どこの学園都市最強よ」

とまあ、いつぞやの金髪少女がツッコミを連れてくる。とりあえず言おう、何故知ってるし。因みに龍亞はというと、

「あはは……俺オワタ( ^o^ )」

「龍亞……しっかりしろ」

と乾いた笑いを浮かべているのを蟹に慰められていた。いやー、いいものが見れた満足満足。さてと、そんな事は置いてまずやることは……

「はじめまして……じゃないよね？ 落葉で会ったことありますし」「そうね。でも大して会話もしてないからはじめましてでいいんじゃないかしら？」

「そうですね、じゃあはじめまして。俺は広瀬悠斗っていいいます。あの時は教えてくれなかったですけど、あなたのお名前は？」

「……アリス。アリス・マーガトロイドよ」

アリス・マーガトロイドねえ。ってマーガトロイド！？ そうだ、どっかで見た事ある顔だと思ったら東方に出てくるアリスに似てたんだ！ でも名前も性格も同じだなんて……ま、まさか……

「（あなたの考えているように、多分私も転生者よ。あなたと同じ、ね……）」  
「（！？）」

そんな事を耳元で囁いた彼女の言葉に俺は思いつき動揺する。え？ なんて？ 俺誰にも言っていないのに。それ以前に、私も……つて事はやっぱり彼女も転生者か！？

「（……ちょっと……外で話しましょう？）」「  
「（ああ……もちろんだ）」

そう言われてアリスと部屋から出る。そして、人気のないところに着いたところで、

「さてと、話してもらおうぞ」

「ええ、いいわよ。その代わりお互いに1つずつ聞き合いましょう」  
「いいよ。じゃあこっちから、何故俺が転生者だって分かった」

そうまずはこれだ。さつきも言ったが俺は誰にも自分が転生者だと話していない。それなのに彼女はなんでその事を知ってるか、それを聞かなければ。

「簡単よ。あなたが原作遊戯王5D・sに存在しないからよ」

「！？」

やっぱりか！ 転生者という時点でもしやと思ったけどやっぱりアリスも原作知識持ちか！

「落葉で会った時は原作前だったからもしや程度だったけどフォーチュンカップで参加している上に龍亞達と知り合いなら間違いなく転生者っていう推測なんだけど、間違ってる？」

「……間違ってるない。確かに俺は転生者だ。じゃあこっちの質問だ。お前は本当に転生者なのか？」

「ええ、多分ね」

多分？ ……どういう事だ。と考えている俺の思考を察したのかアリスは、

「私、昔の……いえ、前世の思い出が全くないの。アニメとかゲームとか学問とかの知識はあるんだけど、どうしても思い出だけは思い出せないのよ」

「……は？」

「多分、死ぬ直前に頭でもやられたんだと思うわ。ところで、あなたは前世の記憶はあるのかしら」

「当然あるに決まってる」

「じゃあ、死ぬ当日の記憶は？」

そんなのあるに決まっ……て……あれ？ 俺は死ぬまで何してたんだっけ？ 死ぬ前日の記憶はある。だけど、そこから先の記憶はない。今まで全く気に止めてなかったけど、死んだ日の記憶が丸々ないという事は俺はこの日を最後に急変死したのか！？ いや、それもない。俺は命に関わるような持病も持っていないし、病気にもなっていない至って健康な人間だった筈、だったら何故……？

「……その様子だと無いみたいね」

「……ああ。理由はやっぱり」

「死因が頭に多大なダメージを与えるようなものだったから、でしょうね。でもそうなると思っただけ、しかも死んだ日だけ消えているのはおかしいわ。……もしかすると消されたんじゃないかしら」

「消された？ 一体誰にさ？」

記憶操作なんて若干人間離れた能力を持った人間に会った記憶はないしな。

「そんなの決まってるじゃない。神様よ」

「いや、ねーよ。神様って、中二病みたいな事言われても」

「だってよく転生ものとかであるでしょ。神様にチート能力を貰って転生とか。ま、私達には無さそうだけど」

「いや、そうだけどさ……いくらなんでもあり得ないだろ。後、チートドロ能力がこの世界で使えそうなチート能力だと思う。ないけど」

「ありえない事なんてそれこそありえない、そうでしょ？ だって私達は現に現実からアニメの世界に転生してるんですから」



……それもそうか。いや、そう簡単に認めてしまっていないものなのだろうか？　なんかいけない気がするんだけど……まあ、いいや。

「じゃあ神が存在するとして、俺やアリスをこっちに送った理由はなにさ？　しかもアリスは転生と憑依両方だろ？　そこまでやる理由が分からないし、俺は死ぬ前日までの記憶があるのにアリスは知識はあるのに記憶は全くない。おかしいだろいろいろと」

「……それもそうね。せめて転生したという以外でなにか共通点があればいいのだけれど……」

「だったらお互いにならない記憶を取り戻す為に、協力しないか？　俺は死んだ日の記憶を、アリスは前世の記憶全部取り戻すまで」

ない記憶になにか重大な事が隠されてるかも知れないし、転生者同士協力した方がいいだろう。

「……その言葉は私から言うと思ったのだけど予想外ね」

「失礼な。俺だってこの世界に転生した理由が知りたいんだ」

うん、俺だって言うつもりはなかったよ？　この世界で生きていくつもりだよ？　でもさ、俺と同じ境遇の人間がいたら知りたいじゃない。なんで遊戯王の世界なのか、なんで俺達なのかって。それを知るにはやっぱり同じ境遇の人間と協力するしかないでしょ。

「そう、じゃあよろしくね悠斗」

「こっちこそよろしくなアリス」

そう言って握手を交わした後、俺達は控え室に戻った。

「あ、因みに私のあの悪魔デッキは本気デッキじゃないわよ」

「なん……だと……！？　手加減して優奈に勝ったの！？」

「それはそつちも同じでしょう?」

いやまあ、そうなんだけどさ。あれ、優奈曰く、本気を除いたら傑作だったらしいんだよね。

「あはははは……遊星……俺……終わったよ。俺の冒険はここで終わるんだよ……」

「龍亞……まだ諦めちゃ駄目だ。悠斗に当たらなければまだチャンスはある」

「遊星……でもそれって悠斗の兄ちゃんと当たったら終わりって事だよな?」

「……その時は玉砕覚悟で頑張るんだ」

「普通に玉砕するよ絶対!」

「……まだやってたの?」

「というか悠斗はどれだけ彼にトラウマを与えてるのよ?」

いや、そんな酷いことはしてないけどなあ……。オーバー・ドラゴンのオーバーキルでしょ、1ターンバーンでしょ、完全封殺、それくらいしかやってないけどなあ（十分です）

「ところで悠斗、となりの女性は知り合いか?」

「え、ああうん。実は中学時代の知り合いだね。アリスっていうん

だ（話し合わせて）」

「（了解）はじめまして、アリス・マーガトロイドよ。人形師を指しているわ」

あ、やっぱり転生憑依といえど素体がアリスだから人形師志願なんだ。って事はアリスの本気デツキって人形デツキ？ いや、でもそんなシリーズないしなあ……ないよね？ てかやだよ、アーティフルサクリフェイスとかゴリアテ人形とか、そんなの入ってたら俺号泣するよ？

「因みにアリスはかなりの実力者だから俺でも勝てるか分からないから」

「なに言ってるのよ、悠斗もかなり強いじゃない」

「……あれ？ これ本当に詰んでない？」

「龍亞、まだ諦めちゃ駄目だ。きっと勝機はあるさ」

龍亞はなんかもうこの世の終わりみたいな顔をして笑っていて蟹はそれを慰めていた。……いい加減立ち直りなよ、絶望するのは理解できるけどさ。

「ねえ、もう入場の時間じゃないの？」

「あ、ホントだ。気付いたら他の参加者全員いないし。ってそれ、まずくね……？」

他の人は既にいないって既に入場してたらいろいろとヤバイでしょ。そう思い、俺達はダッシュで入場のゲートに向かった。

……え？ なんですかこれは？ え？ 優奈視点で行く？ そんないきなり言われても……まあ、いいです。私こと広瀬優奈は今兄さんの幼いときからの友達である彰子姉と彰子姉のご学友達と姫美ちゃんとこかげちゃんと一緒にいます。因みにここにいる人の中で兄さんが大会参加者だと気づいているのはこかげちゃんと姫美ちゃんだけです。というか2人も私がなにも言っていないのに気づきましたし、我ながら聡明な友達を持ったと思います。

「それにしても、悠君はいつになったら来るんでしょうか？」

「うーん、もう少しで現れると思いますけど……あ、噂をすれば……」

『それでは、出場選手の入場だ〜！』

そう司会の人が言うと、床から白煙が噴射され、リフトが上がってきた。リフトの上には堂々たる姿で立っている不動さんや絶望した表情をしている龍亞さん、そしていつぞや私を負かせた金髪の女性や何故か知らないけどめっちゃ緊張しているのか動きが若干ぎこちない兄さんとかいました。というか何故に龍亞さんは始まる前から絶望しているのですか……？ 私には理解できません。あと、

「な、なんで悠君があそこにいるんですか！？ しかも、加賀屋君？ らしき人も見えますし！」

「これ絶対悠斗さん無双が起きるよね!? オーバー・ドラゴン出されて対戦相手にトラウマを刻み込むという、いともたやすく行われるがえげつない行為が行われるのですね、分かりま ひい  
! 悠斗さん、こつちを睨んで来た! なんで!? あそこからだと結構距離あるよね!？」

2人とも五月蠅いです。でもこの慌てっぷりはいいですね。因みに兄さんは別に夏乃さんを睨んだわけではなくこの静かな状況で騒いでいる人がいる方角を見ただけですよ。それにしても、この静けさはやはり不動さんでしょうか? 不動さんはサテライト住民は…まあ、いいとして、マーカー付き…つまり犯罪者の烙印を押されてますからね。自分達は出れないのになんで犯罪者が出場してるのかって疑問を抱いているのでしょうか。むしろ、それを無視して兄さんの事で騒いでるこつちが変なのでしょう。とか考えながら辺りの反応を見ていると参加者の1人が不動さんをフォローするような事(あまり興味なかったので聞いてなかった)を言っ、それに続いて兄さんが、

『ま、犯罪者だからとかそんな理由で参加を拒んだり、文句垂れるような人間のデュエルの腕なんてたかが知れてるだらうけどね。この人の方が何倍も強いんじゃない?』

とあからさまに喧嘩を売るような口調でそんな事を言い放ちました。……兄さん、また問題を起こす気ですか……前もそれに近い事を言っって何人か喧嘩(と多対1の変則デュエル)をしたじゃないですか。その後、相手を物理的にも精神的にも相手を痛め付けて、相手はデュエル恐怖症にまで陥ったらしいですが、ご愁傷様です。まあ、それは置いといて、案の定兄さんの挑発に逆上した観客が、兄さんに罵声を浴びせるが兄さんは聞く耳を持たず言いたい事を言ったら直ぐに元の場所に戻り、観客の声を完全に無視してました。

「……悠君、悠君なりにあのメーカー付きの人を庇ったんだね」  
「……ですねえ。はあ全く、自身に敵意を向けさせてメーカー付きの人から集中を逸らすなんて……無茶苦茶というか、馬鹿というか……」

相変わらずですよ、ここら辺は。人を差別したりするような事を極端に嫌う兄さんらしいです。

「そ、それでは気を取り直して、フォーチュンカップの進行について説明していくぞー！ まずは第1回戦、第2回戦で参加者を4人まで絞り込み、そこから総当たりによって一番勝利数が多い選手がキング、ジャック・アトラスへの挑戦権を獲得出来るー！」

……結構めんどくさい進行ですね。さっき宇佐美さんが加賀屋さん（兄さんの中学の友達）がいるって言ってましたし、不動さんもかなり強かった筈ですし、それに……あの金髪の女性となんか特別な力を持つてる女性もいますし、そして兄さんと強いそうな人が何人もいますね。……この大会、とても荒れそうです。まあ、とにかく、

「これよりフォーチュンカップの始まりだぁー！」

フォーチュンカップが始まりますね。

## 第十話 フォーチュンカップ開催！（後書き）

作者の言い訳『何故2人目の転生者が東方のアリスなのか』 答  
『考えたオリデッキが似合いそうなキャラが他に思い付かなかったから』

というわけで2人目の転生者（憑依）、アリスさん登場です。作者は東方は好きですが、アリスより射命丸の方が好きです、ていうか私の嫁。一応転生者（味方側）はあと一人登場予定ですが、まだ先になると思います。

そして、先日、遊戯王の最新弾、photon shockwaveが発売されました。作者も一箱買いました、銀河眼のレリーフやナンバーズを2枚手に入れて軽く有頂天です。というわけで（どいうわけで）ちょっとアンケートなんです、エクシーズ召喚の使用はありでしょうか、なしでしょうか？

あり、なし、召喚方法を変えてあり（その場合はちょっとした例を下さい）の三つで意見を下さると嬉しいです。

ではいつものように、感想、指摘、意見、オリカ案などがありましたら是非お願いします。

……さて、次の龍亞対ボマーどうでしょうか……

第十一話 + ホマーVS龍亞 機械戦争 + 対談風あとがき (前書き)

更新が遅れた上に超難産です。それでは第十一話どうぞ



第十一話 + ボマーVS龍亞 機械戦争+対談風あとがき

『それでは、早速第1回戦第1試合を始めるぞー!』

さあて、始まったね。さて、どっちが勝つことやら……。

「アリス的にはどっちが勝つと思う?」

「そうね。やっぱりボマーじゃないかしら。いくら悠斗が原作キャラを強くさせたとはいえ、世界の抑止力には敵いそうもないからボマーが勝つんじゃないかしらね」

「あ、やっぱりそう思う? それすらもぶち壊せるかなあって思っ  
て結構頑張ったんだけどなあ……」

やっぱり世界には勝てないのかな? いや、まだ始まってないから分からないけどさ。

「やっぱりデツキも改造してあるの?」

「え? うん、まあ……激流葬とか聖バリとかマジでガチなカードは入れさせてないけど、炸裂装甲とかダメージ・ダイエツトは入れたよ、デツキ構築手伝ってた時に」

「……炸裂装甲入れている時点でちよつとガチじゃないの」

「そう? 俺ん所じゃ次元幽閉とか奈落とかデフォだったからなあ

……炸裂はまだ温い方だったよ」

「……どんなところに住んでたのよ……」

酷い時は強制転移で苛められた時もあったなあ……。シンクロした次のターン雑魚モンスターとシンクロモンスター交換させられたり、シューティング・スター出した瞬間に深黒の落とし穴で即退場

なんてざらだからね。

『それでは、対戦するデュエリストを紹介しよう！ 恐らく全世界の少女達が彼女を羨ましく思っている事だろう！ 参加最年少、舞い降りたデュエルのエンジェル、ミス龍可ー！』

うん、とりあえずそいつ男だから。女じゃないから。それと観客ども（一部）、『キヤールカチャー！』ってお前らロリコンか、

『それに対するは、先ほどの熱い言葉が印象的な、黒き暴風ボマー』  
『！』  
『始まるわね。さて、どこまで持つことやら……』

まあ、相手はリアクターデッキでしょ？ こないだ使ってたエナジーランチャーがあれば少しは有利に働くだらう。

『それでは、デュエル開始ー！』  
『『デュエル！』』

龍可、ボマーLP4000

side 龍可

「私のターン、ドロー。手札から魔法カード、スター・ブラストを発動」

スター・ブラスト……確かライフを500ポイントの倍数支払う事で手札のモンスターレベルを1下げるカードだね？ 最初からそれを使うって事は高レベルモンスターを軸とするデッキなのか？

「私は500ポイント支払い、手札のサモン・リアクター・AIのレベルを1下げ、サモン・リアクター・AIを攻撃表示で召喚」

ボマーLP3500

サモン・リアクター・AIは確か召喚に誘発して800ポイントのダメージを与えるバーンモンスターだったよね。リアクターを使うって事はもしかしてこの人のデッキはリアクターデッキなのか？ そうなると、リアクターを残しておくのはまずいよね、早く倒しちゃお。

「カードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ 手札から魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！ 手札のD・ラジカツセンを墓地に送って、デッキからD・モンハンを攻撃表示で特殊召喚！」

「この瞬間、サモン・リアクターの効果発動！ このカードは1ターンに1度、相手がモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時、相手に800ポイントのダメージを与える」

龍亞LP3200

「うう……でもサモンリアクターの効果はこのターン使えなくなつたよ！ 俺はさらに手札から魔法カード、機械複製術を発動！ このカードは自分フィールドの攻撃力500以下の機械族モンスター

を1体選択して、そのカードと同名モンスターを2体まで特殊召喚出来るよ。俺はさらにモバホンを2体特殊召喚！」

よし！ これでモンスターが結構揃ったぞ！

「まだまだ行くよ！ モバホンの効果発動！ ダイヤルオン！ 出た目は4、よって4枚ドロ！ よし、俺はD・ラジオンを特殊召喚！ さらにもう1回モバホンの効果発動！ 出た目は6、よって6枚ドロして、その中であつたD・リモコンを特殊召喚！ レベル4、D・ラジオンにレベル3、D・リモコンをチューニング！世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！ シンクロ召喚！ 愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！ そして、俺はこのターン、まだ通常召喚を行ってないよ、2体のモバホン（既に効果を使用したやつ）をリリース！」

今回が初めてだけど、優奈ちゃんからもらったカードの1枚で、打点が低い代わりに展開力のあるディフォーマーデッキに合うかもしれないと言われて入れたこのカード、

「The Big Saturnを攻撃表示で召喚！」

場面を少し変えて一方、これを見ていた転生者組はというと

「ちょっと、悠斗！ あんたなんてカード渡してるのよ！？ よりにもよってプラネットシリーズの1枚を渡すなんて！」

「知らない！俺は断じて知らない！なんで龍亞がサターンを持っているのさ!？」

全力でパニックっていた。というかアリスが悠斗の胸ぐらを掴んで悠斗を問い詰めていた。

「なにか心当たりないの？サターンとかのプラネットシリーズ持ってる人とか」

「心当たり……心当たり……ありすぎて困るなあ……！」

悠斗の脳内にいつもあり得ないようなカードを持つてるいろんな意味で謎な妹の事を思い出す。脳内で普段あまり表情を出さないのに何故かほくそ笑んでいたのがムカついたので速攻で消す。

「はあ、とりあえず一言、また優奈か！あいついい加減に自重しろよ！」

「それ以前にあんたの妹って何者よ……？」

「知らん。むしろこつちが聞きたい。それよりもThe Big Saturnの効果は知ってるよな？」

「ええ、知識としては知ってるわ。2つ効果があつて、1つは自分のターンに一度、手札1枚と1000ライフをコストに自身の攻撃力を1000ポイント上げる起動効果、そしてもう1つは」

そう、悠斗が懸念しているのはThe Big Saturnのもう1つの効果、その効果はボマーのあるカードと相性が悪く、下手すると龍亞が勝つなんて事になりかねない。その効果とは、

「相手のコントロールするカードの効果によって破壊され墓地に行った時、お互いに破壊された時の攻撃力分のダメージを与える誘発効果。でも龍亞のデッキにはダメージ・ダイエットといっ

たダメージを軽減するカードも入ってる。下手すると龍亞が勝つか  
もしれないわねこれは」

「そこなんだよ……もしここで龍亞が勝つ事があるとボマー特攻イ  
ベントと龍可覚醒？ イベントが無くなっちゃうからな……」

「まあ、なるようになるわよ。それ以前に私達にはなにも出来ない  
し」

場面は戻して。

「なななんとー！ 龍可選手、たった1ターン、それも最初のタ  
ーンから攻撃力2000以上の上級モンスターを2体も揃えたぞー  
！ これはボマー選手、大ピンチだー！」

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動、パワー・サーチ！ ……  
よし、俺は今手札に加えた、装備魔法、ロケット・パイルダーをパ  
ワー・ツール・ドラゴンに装備！ 行くよ、The Big Sa  
turnでサモン・リアクターAIに攻撃！ アンガーハンマー！」  
「サモン・リアクターAIの効果発動！ 一回だけ戦闘を無効にす  
る！」

「ならパワー・ツール・ドラゴンでサモン・リアクターAIを攻撃  
！ クラフティ・ブレイク！」

「くっ、サモン・リアクターAIは破壊される」

ボマーLP3200

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー！ 手札から魔法カード、一時休戦を發動。お互いに1枚ドローし、次の相手ターンエンドフェイズまで、お互いに全てのダメージを0にする。さらに、私はトラップ・リアクターRRを守備表示で召喚。カードをさらに2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ モバホンの効果發動！ ダイヤルオン！ 出た目は2、よって2枚ドロー！ ……ドローしたカードの中にレベル4以下の『D』と名のついたモンスターがいなかったからデツキに戻して、シャッフルするよ」

うーん、どうしよう？ このままトラップ・リアクターを残しておくのは危険なんだけど、伏せカードがなあ……。一時休戦を使われてる今、The Big Saturnを破壊されるのは避けたいし……。今回はやめとこう。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果發動。デツキからランダムに装備魔法を手札に加えるよ。そして、今手札に加えた、エナジー・ランチャーをパワー・ツール・ドラゴンに装備させて、ターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー！ 手札から魔法カード、死者転生を發動。マジック・リアクターAIDを墓地に送り、サモン・リアクターを手札に加える。さらにチューナー・モンスター、ブラック・ボンバーを攻撃表示で召喚し、効果發動。墓地からレベル4以下の機械族モンスターを特殊召喚する。私はマジック・リアクターAIDを攻撃表示で特殊召喚。レベル4、トラップ・リアクターRRにレベル3、ブラック・ボマーをチューニング！（口上が思い付かなかったから省略）シンクロ召喚！ ダーク・ダイブ・ボンバー！ ダーク・ダイブ・ボンバーでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃！ マックス・ダイブ・ボム！」

「パワー・ツール・ドラゴンは装備したカードを墓地に送る事で破壊を無効にするよ。俺はロケット・パイルダーを墓地に送って破壊を無効にするよ!」

「だがダメージは受けてもらうぞ!」

龍亞LP2900

「さらに、マジック・リアクターAIDでD・モンハンに攻撃!」  
「うっ、モバホンは破壊されるよ……」

龍亞LP1800

ま、まずいよ……ダーク・ダイブ・ボンバーの効果使われたら終わっちゃうよこのライフじゃ……。

「リバースカード、リミット・リバースを発動してトラップ・リアクターRRを特殊召喚し、ターンエンドだ。さあ、君の闘志を見せてくれ!」

うっ、完全に情けかけられてる。あの伏せカード、かなりの確率でフェイク・エクスプロージョン・ペンタとデルタ・リアクターの2枚だよね……。どうする……? 魔法も畏も一回は必ず止められる。そして、このターンで最低でもダーク・ダイブ・ボンバーを破壊しないと、次のターンバトルに入る事なく俺の負けは決まっちゃう……。悠斗の兄ちゃんや遊星なら『なにこの無茶ゲーを超えて無理ゲーな状況』とか『まずいな……』って言いながら、覆しちゃうだろうけど、俺にも出来るかな……?

「俺の……ターン! ……これは……! パワー・ツール・ドラゴンの効果発動! パワー・サーチ! ……よし、俺は装備魔法、ク



ラッシュ・バンカーを手札に加えて、クラッシュ・バンカーを発動  
！」さらに800ポイントのダメージを与える！」

龍亞LP1000

「でも、さつきも言ったように、それは一回切りだよ！ 俺はさら  
に手札から魔法カード、百機夜工を発動！ 墓地の『D』を全て除  
外して、この数×200ポイント、自分フィールドの機械族モン  
ターの攻撃力をアップさせるよ！ 俺はThe Big Sat  
urnを選択し、攻撃力を1200ポイントアップさせ、The B  
ig Saturnの攻撃力は4000になるよ！」

よし、これでThe Big Saturnは4000、ライフ  
差分によって2200ポイント上がってパワー・ツール・ドラゴン  
の攻撃力は4500、これなら、The Big Saturnの  
攻撃がダーク・ダイブ・ボンバーを攻撃すれば1400のダメージ  
与える事が出来るし、パワー・ツール・ドラゴンの攻撃が通ればエ  
ナジー・ランチャーの効果で1400の効果ダメージと1900の  
戦闘ダメージで3300ポイント与えられて、一気に逆転勝利を決  
められるね。

「いつけえ！ The Big Saturnでダーク・ダイブ・  
ボンバーに攻撃！ アンガーハンマー！」  
「……ダーク・ダイブ・ボンバーは破壊される」  
「えっ!？」

ボマーLP1800

防がなかった!? いや、確かにパワー・ツールよりは攻撃力が  
低いから防がなくてもなんとかなるけどさ、

「さらに、パワー・ツール・ドラゴンでマジック・リアクターAIDを攻撃！ クラフティ・ブレイク！」  
「畏発動！ フェイク・エクスプロージョン・ペンタ！ さらに、ガード・ブロック！」

！？ デルタ・リアクターじゃない！

「フェイク・エクスプロージョン・ペンタの効果でこの戦闘ではモンスターは破壊されず、ガード・ブロックの効果で戦闘ダメージを0にする。さらに、手札からサモン・リアクターAIを特殊召喚し、1枚ドロー！」

「……俺はこのままターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー！ サモン・リアクターAIの効果発動！ このカードは自分フィールドにサモン・リアクターAI、マジック・リアクターAID、トラップ・リアクターRRの3体がいるとき、3体をリリースして自分の手札、デッキ、墓地からジャイアント・ボマー・エアレイドを特殊召喚する。現れる、ジャイアント・ボマー・エアレイド！」

来た！ 恐らくこれがあの人の切札……！ どうする……？

「ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果発動！ 手札を1枚墓地に送る事で相手フィールドのカードを1枚破壊する！ 私はエナジー・ランチャーを破壊する！ デス・ドロップ！ そして、ジャイアント・ボマー・エアレイドでThe Big Saturnを攻撃！ シャープ・シューティング！」

「畏発動！ ホーリー・ライフ・バリア！ 手札1枚をコストにこのターンのダメージを0にするよ！」

「だがThe Big Saturnは破壊される！ そして、私はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺の……ターン！ パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！ ……俺はダブル・ツールD&Cを手札に加えて発動！」  
「甘いぞ！ 畏発動、魔宮の賄賂！ 魔法、畏カードの発動を無効にして破壊し、相手は1体ドロウする！」

引いたカードは奈落の落とし穴、ジャイアント・ボマー・エアレイドがいる時点で伏せても意味がないカードだ。

「……ターンエンドだよ」

「私のターン、ドロウ！ 手札を1枚をコストにジャイアント・ボマー・エアレイドの効果発動！ パワー・ツール・ドラゴンを破壊し、ジャイアント・ボマー・エアレイドのダイレクトアタック！」  
「う、うわああああ！」

龍亞LPO

「決まったあ！ かなりの接戦だったが大人の意地を見せてボマー選手、2回戦進出だあー！」

ま、負けた……悠斗の兄ちゃんとかにいろいろと教わったから勝てると思ったけど、駄目だった。やっぱり悠斗の兄ちゃん達の背中  
は遠いなあ……

おまけ（対談風あとがき）

悠斗「……なあ」

アリス「なにかしら？」

「どうしてこんな所にいるんだ？ 俺達」

「作者の意向よ。というわけで始まりました、あとがきです。司会  
は私、アリス・マーガトロイドに転生した転生者と」

「普通の転生者、広瀬悠斗でお送りします。まずは更新が最近遅く  
て申し訳ありません。作者がコミケに行ったりとか引越す準備  
で忙しい為、というのもありましたが、一番は作者が遊戯王を引  
退しようかと本当悩んでしまった為更新が遅れました」

アリス「引退ってなにかあったのよ？」

悠斗「まあ、簡単に言うとなんか最近リア友達とタッグフォースも含めて  
デュエルしてもボロ負けして、デュエルに自信がなくなっただよ。  
作者に向かつてあるカードが猛威を奮ってな」

アリス「？ あるカードってなによ？」

悠斗「知ってる人は知っているカード、超融合だよ」

#### 超融合 速攻魔法

手札を1枚捨てる。自分または相手フィールド上から融合モンス  
ターカードに よって決められたモンスターを墓地へ送り、その融  
合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。このカードの発  
動に対して、魔法、畏ま効果モンスターの効果を発動する事はでき  
ない。

「相手のモンスターも巻き込める融合カードね。これがどうして猛  
威を奮ったの？」

「作者のデッキキってBF（一番よく使う）、銀河眼を主体としたサ  
イバー、寄せ集め宝玉獣、未完成ドラグニティ（いい加減にフアラ  
ンクスが欲しい）なんだよ。特に作者愛用BFはカルートやシロッ  
コは入って無いものの、高速シンクロを主体とした（作者的に）」

魔法、罨等のバランスの取れたデッキなんだよ。なによりも、リア友のHEROデッキに入ってる超融合の巻き添えになる事もあんまり無いしな。しかし、漫画版遊戯王GXの最終巻の付属カードで出てきたE・HEROエスクリダオの登場によってな話が変わってしまっただ」

E・HEROエスクリダオ 闇 星8 戦士族 攻撃力2500  
守備力2000 融合

『E・HERO』と名のついたモンスター+闇属性モンスター

このカードは融合召喚以外で特殊召喚する事が出来ない。

このカードの攻撃力は墓地の『E・HERO』と名のついたモンスターの数×100ポイントアップする。

「へえ、闇属性の融合E・HEROなんて出てたのね」

「ああ、これによって作者は超融合を使われてエスクリダオを召喚されてダイレクトアタックを決められるという悲劇が何度も起きてるんだ。作者のデッキの特徴は黒い旋風を軸とした高速展開デッキでシユラの効果でコチを出して、そこからブラック・フェザー・ドラゴンやブラスト等からのアーマード・ウイングのシンクロをするんだけど、シンクロした瞬間に超融合使われたりとか。その後も、そのリア友がBFデッキを使うときは必ずそれを使うから自信がなくなっただけ来たらしいよ」

アリス「まあ……なんとというか、ご愁傷様としか言えないわね。でも確か作者もDNAとキメラテック・フォートレスで相手のフィールドを荒らしたりしてたんでしょ？」

悠斗「まあ、そうなんだけどな。さて、それはおいといて、今回の作者の言い訳ですが、まずは龍亞がThe Big Saturnを使った理由。ぶっちゃけ生け贄2体の機械族モンスターならなんでもよかった。ボマーがダーク・ダイブ・ボンバーを使った理由。寧ろ使わなかったら龍亞が勝っていたと思う。因みに禁止、制限は

アニメ開始時のものとなっていています。後、作者は最近の禁止は知っていますが、かなり前になつたやつは知りません。ダーク・ダイブ・ボンバーを出したターンで決着はついてたのに効果を使わなかった理由 純粹にあの展開でバーンでの決着は駄目でしょ……ってなっております」

「そして最後に、更新が遅れた一番の理由、引越しによつて、当分ネット環境がなくなるため、こちらへも投稿する事にした作者、瀬河ナツの処女作、とある少女の属性使いの宣伝をして終わりたいと思います。それではどうぞ」

学園都市、それは学生達の住み、能力開発が行われる科  
学の街。これは、その街に住む一人の少女とそれを取り巻く少年少女達の物語である。

「私は川里莉紗。どこにでもいる普通の学生だよ」

「はいはい、普通って意味を調べてから言おうな」

いつもよりもさらにノリによつて進む物語

「いや、無理だからね？ どう考えてもそれは出来ないから」

「南森……無理とか不可能とかそう簡単に言っちゃ駄目だよ」

「だって神裂相手に僕が単独で戦うなんて無理があるでしょ!？」

掲載サイト、幻想の天楼出身のキャラクターを多数登場

「川里莉紗……貴様の命もらうぞ……」

「だが断る。っていつかなんで私なのさ？ 神凧町に妹がいるじゃん」

襲いかかる数々の敵。そして、

「学園都市暗部組織『デイフェンサー』のリーダー、『守りの剣』デイフェンサー  
川里莉紗。悪いけど、ここで潰させてもらつよ、魔術師！」

物語は今動き出す。とある少女の属性使い。九月一日から掲載予定

「常識を考えて動こうよ。普通にありえないからね」

「黙りなさい。存在そのものが非常識な人間がいう台詞じゃないわよ」

悠斗「とまあ、題名で分かる通り『とある魔術の禁書目録』の二次創作です。元々は主に禁書の二次創作を投稿されているサイト、幻想の天楼に投稿していた作品です。尚、作者は加筆修正するだけで、基本的に幻想の天楼のと同じ話にする予定です。もちろんキャラクターの使用許可は取っております」

アリス「チヨコさん、ちけつつさん、ランスさん（ransu521さん）キハさん、ありがとうございます。さて、それでは今回はこれくらいでお別れです。司会はアリス・マーガトロイドに転生した転生者と」

悠斗「広瀬悠斗でした。次回、ついにアリスのデッキが明らかに」

第十一話 + ボマー VS 龍亞 機械戦争 + 対談風あとがき (後書き)

これから更新頻度を上げるように努力したいと思います。それと、誰か超融合とエスクリダオ対策を教えてください……かなり辛いです (いろんな意味で)



## 第十二話 人形と英雄の伝説（前書き）

……すっごいお待たせしました。

はい、とりあえず言い訳はあとがきにて言いたいと思います。では

第十二話どうぞ

## 第十二話 人形と英雄の伝説

『それでは第5試合を始めるぞー!』

さて、1回戦も後半へと突入し、アリスの試合となりました。え？ 遊星達の試合は？ ……（遊星達の対戦相手を）放って置いてあげてくれ。死ぬほど落ち込んでいるから。

「さてさて……お手並み拝見といきますか」

「おっ、ついに悠斗の友達の出番か。やっぱり、お前のダチってだけあって強いのか？」

「あ、加賀屋久しぶり。元気にやってる？」

「おう、俺はいつも通り健康優良児だぜ」

アリスがいなくなって、1人になった所で現れたのは俺の中学からの友達で熱血ヒーロー馬鹿でまるでくらげ（十代）みたいな奴、<sup>かがやとみや</sup>加賀屋朱鷺也だ。因みにデッキも十代みたいなヒーローデッキ、どこぞの宮田なんかより遥かに強く、十代とどっこいどっこいの強さを持つ。……いや、あの鬼畜染みたチートドロウがない分まだ弱いかな。

「んで、さっきの質問だけど、あのアリスって奴は強いのか？」

「まあ、それなりに。少なくとも本気デッキじゃなくても優奈のサイバー・ダークに勝てるくらいに強いよ」

「それ普通に強いよな。俺も戦ってみたいけど……それは無理かな」

そう言いながら朱鷺也はこちらを見てくる。ん？ なんだよ、そんな真剣そんな眼をして、

「……悠斗、今回こそはお前の本気が出させてやる」

「そこは勝つてやるじゃね？ 普通。まあ、いいけどさ、なら俺はこう言うべきかな？ まあ、頑張りな。俺の本気は安くないぞ」

「……よく分かってるじゃないか。成長したな悠斗」

「黙れ演劇デュエル馬鹿」

台無しだった。なんでそこで茶々入れるのさ？ せっかく朱鷺也が好きな演劇（演じるよりも見るのが好きらしい）みたいになっちゃうとかっこよく言ってみたのに、

「それより、今回の対戦相手って誰なんだ？」

「確か……自然をどうたらこうたらとか言ってた気がするぜ。名前は確か……リフとかいってたな」

「いや、名前はいいけどさ。自然か……となるとデッキはナチュラル系かな？」

いや、それとも植物族か？ でもそうするとアキと被るからやっぱりナチュラルか。

『それではあ、デュエル開始ー！』

『デュエル』』

アリス、リフレP4000

「お、始まったぞ」

「ん？ ああ、そうだな」

じゃあ、お手並み拝見といきますか。

『私のターン、ドロ。ナチュル・クリフを攻撃表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドです』

リフって男はやっぱりナチュルだったか。んで、アリスのデッキは……、

『私のターン、ドロ。殺人人形キラードールを攻撃表示で召喚』

アリスのフィールドに出てきたのはかわいらしい人形だった。……ただし、青いエプロンドレスについてる血と手に持つてる包丁がなければの話だが。ってかやっぱり人形か。アリスだしそんなシリーズ使いそうだなあ、とか考えていたら的中したよ畜生。

『殺人人形でナチュル・クリフを攻撃』

アリスが攻撃すると殺人人形はナチュル・クリフに襲いかかり、一瞬のうちに滅多刺しにしまった。さらに、そのまま相手プレイヤーにも襲いかかる。……え？ どゆこと？

『ナチュル・クリフを破壊した時、殺人人形の効果が発動。このカードが相手モンスターを戦闘した時、相手プレイヤーは500ポイントのダメージを受けるわ』

殺人人形キラードール 星4 魔法使い族 閻属性 攻撃力1800 守備力700

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える。

『くっ、だがナチュル・クリフはフィールドから墓地に送られた時デッキからレベル4以下の『ナチュル』と名のついたモンスターを特殊召喚する。私は2体目のナチュル・クリフを特殊召喚！』

……うーん、1枚だけじゃなんとも言えないけど恐らく『人形』はバーンを主体としたデッキなのかな？ 8000だったらまだまだ余裕って言えるけど4000での500ダメージはちよつと痛いよな……。

『カードを2枚伏せてターンエンドよ』

『私のターン、ドロー。チューナーモンスター、ナチュル・トライアンプを攻撃表示で召喚。レベル4、ナチュル・クリフにレベル2、ナチュル・トライアンプをチューニング。大いなる自然の龍よ。その力を今ここに示せ！ シンクロ召喚！ 息吹け、ナチュル・パルキオン！ さらにシンクロに使われたナチュル・クリフの効果で私は最後のナチュル・クリフを特殊召喚する』

ナチュル・クリフ3積みかい。いや、リクルーターだからいいけどね。

『ナチュル・パルキオンで殺人人形に攻撃。アースード・ブレス！』  
『畏発動、攻撃の無力化。このターンのバトルフェイズを終了させるわ』

『なら、私はこのままターンエンドだ』  
『私のターン、ドロー。魔女人形を攻撃表示して効果発動。手札から銃撃人形を特殊召喚するわ』

魔女人形

3

闇属性

魔法使い族

チューナー

攻撃力800 守備力800

このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚された時、手札から『人形』と名のついたレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚する事が出来る。この効果を使用したターン、互いのプレイヤーはシンクロ召喚をする事が出来ない。

『さらに銃撃人形の効果発動。手札から『人形』と名のついたモンスターを見せる事で、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える。私は呪殺人形を見せて500ポイントのダメージを与える。シユート・バレット』

銃撃人形 ガンナードール 4 闇属性 魔法使い族

攻撃力1100 守備力500

1ターンに一度、手札の『人形』と名のついたモンスターを相手に見せる事で相手に500ポイントのダメージを与える。この効果を使用したターン、このモンスターは攻撃する事が出来ない。

リフLP2700

うわあ、ひでえ。基本的にバーンデツキなヴォルカニックよりも酷いバーンデツキだぞこれ。

『殺人人形でナチュル・クリフを攻撃。マードーエツジ』

『ナチュル・クリフは破壊され、デツキからナチュル・マンティスを攻撃表示で特殊召喚する』

リフLP1900

『ターンエンドよ』

『私のターン、ドロー。チューナーモンスター、ナチュル・ステイングバグを攻撃表示で召喚。レベル6、ナチュル・パルキオンにレ

ベル3、ナチュル・ステイングバグをチューニング。新緑息吹く大自然に潜む獣よ。その領域を侵す愚者に裁きを与えよ！ シンク口召喚！ 吼えろ、ナチュル・ガオドレイク！』

おお、出たよ。ぶっちゃけ要らなくね？ って思うハズレアカード。バニラでレベル9でシンク口の条件が若干ダルいカード。ってかアンドレと口上が違うし。

『ナチュル・ガオドレイクで魔女人形に攻撃！ アース・バイト！』  
『魔女人形は破壊されるわ』

アリスLP1800

『さらにナチュル・マンティスで銃撃人形を攻撃！』  
『銃撃人形は破壊されるわ』

アリスLP1100

『な、なんとリフ選手、ここで一気に逆転したぞー！ これはアリス選手、ちよつと辛いカー！？』

『ターンエンド（ふふふ、私の伏せカードは奈落の落とし穴、例えガオドレイクを破壊できるモンスターが出てきても即破壊してやる。それに通常召喚してもナチュル・マンティスの効果で破壊すればいいいな）』

『私のターン、ドロー。リバースカード、緊急縫合を発動。ライフを半分払い、墓地の『人形』名のついたモンスターを可能な限り特殊召喚するわ』

緊急縫合 罨

ライフを半分払い、自分の墓地から『人形』と名のついたモンス

ターを可能な限り特殊召喚する。このカードの効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。

アリスLP550

『そして、特殊召喚された魔女人形の効果で、大鎚人形ハンマードールを特殊召喚。銃撃人形の効果発動。手札の呪殺人形を見せる事で500ポイントのダメージを与えるわ』

リフLP1400

『銃撃人形、魔女人形、大鎚人形の3体のモンスターをリリースする事で巨人人形ジャイアントドールを特殊召喚』

そうやって召喚されたのはアリスの身長は何倍もの大きさをもつ巨大な人形、っていうかどう見てもゴリアテです。本当にどうもありがとうございました。なんで俺の嫌な予感は的中するんだ？

『畏発動！ 奈落の落とし穴！ 攻撃力1500以上のモンスターを破壊して除外する！』

ジャイアントドール  
巨人人形 10 魔法使い族 闇属性

攻撃力3200 守備力3000

効果はまだ非公開です。

『巨人人形は破壊され、除外されるけど、まあいいわ。手札から呪殺人形イーストドールを攻撃表示で召喚するわ』

『甘いわ！ 手札のナチュル・ホワイトオークを墓地に送りナチュル・マンティスの効果発動！ 召喚を無効にして破壊する！』



あーあ、これはアリスの負けってあれ？　なんかアリスうつすらと笑ってない？

『ふ、ふふふふ。呪殺人形を破壊したわね……？』

『そ、それがどうかしたの……ひっ！　な、何故破壊したはずの呪殺人形がそこにあるのだ！？』

『呪殺人形の効果発動。このカードは手札、フィールドからカードの効果で墓地に送られた時、相手モンスターの装備カードとなり、装備させたモンスターの攻撃力、守備力は0となり表示形式の変更は出来なくなるわ。さらに装備させたモンスターは生け贄、シンク口、エクシーズはいいとして……そういった素材にも出来なくなるわ。まあ、例外として融合召喚は出来るけど』

カード  
呪殺人形 2 魔法使い族 闇属性

攻撃力0 守備力0

このカードが手札、またはフィールドからカードの効果によって墓地に送られた時、相手モンスターを1体選択し、このカードを装備する。このカードを装備したモンスターは攻撃力、守備力が0になり表示形式を変更する事が出来ない。また、このカードを装備したモンスターはアドバンス召喚のコストにする事が出来ず、シンク口、エクシーズ召喚の素材にする事が出来ない。

……こ、こええええええええ！　というか普通に壊れてるだろこれ！？　リリース、シンク口、エクシーズ出来ない上に表示形式の変更も不可！？　どうしろって言うんねん！？　しかも攻守0とか壊れすぎててなにも言えないよ……。

『殺人形でナチュル・ガオドレイクに攻撃』

『う、うわあああああ！』

「な、なんとー！ 大自然を守る会会長リフ選手、ここで敗退だあー！ それにしてもアリス選手、恐ろしい！ あの冷笑を見た瞬間、私も背筋がゾクツとしたぞー！」

「……悠斗、女って怖いな」

「いや、あれば例外だからな？」

さて、仮にアリスとやり合う事になったとして、怖いのはやっぱり呪殺人形だよな。それにアリスはまだシンクロも使っていないし、エクシーズ召喚の事を言っていたという事はエクシーズ召喚も使うんだろう。この世界でエクシーズ召喚を使うのは少しマズイと思うけど一応俺のデッキ（サイドデッキに封印してるけど）にも入ってるし、人の事言えないよなあ。最悪俺も使うしね。とにかく、まだアリスのデッキに入っているカードは殆どわからないのが現状だし、次の戦いもしっかりと見て対策を練らないとな。

side 優奈

……またですか？ 私あんまり表側（私主観）に出たくないんですけど。めんどくさいですし、めんどくさいですから。普通に彰子

姉視点でいけばいいじゃないですか。

「へい、お前ら楽しんでるか？」

とか、考えていると、どこから沸いたのか知りませんがいつの間にか兄さんがそこに立っていました。

「あ、悠君。大丈夫なんですか？ 試合次ですよ？」

「んまあ、そうなんだけどな。暇だったし、宮田に言いたい事があったからな」

「え！？ わ、私ですかっ！？」

いや、そこまでびびらなくても大丈夫だと思いますよ。

「ああ、宮田。次の試合はしっかりと見といた方がいいぞ。あいつのデッキはお前のデッキの完成形とも言えるデッキだからな」

「次って確か……加賀屋君。ああ、そう言う事ですか。確かに加賀屋君のデッキはゆまちゃんのデッキの完成形みたいなデッキですね」

ああ、あの無駄に引きがいい加賀屋さんはHEROデッキでしたね。まあ、私のガチである次元ダークにはあんまり通用しなかったですけど、

『それでは、選手の入場だあー！ まずは、普通の高校生、でもデュエルに対する熱意は誰にも負けない熱血デュエリスト、加賀屋朱鷺也ー！ それに対するは同じ高校生だが怨み辛みを晴らして幾星霜、呪いのプロフェッショナル、黒崎奈落ー！』

呪いのプロフェッショナルってなんですか？ にしてもあの女性、スゴい負のオーラですね。見えて怖いです。

『楽しいデュエルにしような!』

『……はい』

『それではー! デュエル開始ー!』

『『デュエル(ー!)』』

朱鷺也、奈落LP4000

『先行は俺が貰うぜ! 俺のターン! ドロー! モンスターをセツト、カードを2枚伏せてターンエンドだ!』

『……わたしのターン、ドロー……マッド・デーモンを攻撃表示で召喚……。さらに魔法カード、名推理を発動……レベルを1つ選択してください……』

名推理? 彼女のデッキは高レベルデッキなんでしょうか? それとも他に目的が……?

『なら俺はレベル6を選択する』

『……いきます。ドロー、1枚目はユベル・Das Abscheulich Ritter、このカードは通常召喚出来ないのです。ドロー、2枚目はダークネス・ネクロスフィア、このカードも通常召喚出来ないのです。ドロー、3枚目は真紅眼の不死竜はレベル7で通常召喚可能なモンスターなので、真紅眼の不死竜を特殊召喚です』

読めませんね。悪魔族にアンデット族の混合デッキなんでしょうが名推理の意図が分かりませんね……。それと兄さん、となりで『なんでユベルを持つてるんだとか……?』とか言いながら私を見ないで下さい。今回は私は知りませんから。

「……真紅眼の不死竜でセットモンスターに攻撃です。アンデット・メガ・フレア」

「畏発動、和睦の使者！ このターン俺ののモンスターは破壊されず、戦闘ダメージは0となる！」

「……カードを1枚伏せてターンエンドです……」

「……さて、これは加賀屋さんが不利ですね。攻撃力が2400と1900のモンスターが1体ずつ、加賀屋さんのフィールドには不死竜の攻撃であらわになつたE・HEROフォレストマンが1体。つてフォレストマン？ ……融合ですね、これは。」

「俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果発動！ デッキから融合を手札に加える！ そして融合を発動！ 手札のネクロ・ダークマンと、スパークマンを融合！」

おお、これは久々に見えるかも知れませんが、ダーク・ブライトマンが、

「出ですよ！ E・HERO THEシャイニング！」

「……え、ええええええ！？」

「こ、ここでシャイニング！？ ここは正規融合でブライトマン出してやれよ！」

「いえ、分かりますよ！？ 確かにシャイニングの方がステータスも効果も強いですけど！」

うわあ、今絶対ブライトマン『解せぬ』って思ってるでしょうね。

「さらに融合を発動！ 手札のオーシャンとフィールドのフォレストマンを融合！ 現れる、E・HEROジ・アース！」

うわあ、スゴいですね。だから兄さん、私を睨まないで下さい。今回は本当になにもしてないですから。

「シャイニングで、真紅眼の不死竜を攻撃！ オプティカルストーム！」

「……真紅眼の不死竜は破壊されます……」

奈落LP3800

「さらに、ジ・アースでマッド・デーモンを攻撃！ ジ・アース・マグマ！」

「……マッド・デーモンも破壊されます……」

奈落LP3200

「ターンエンドだ」

「……私のターン、ドロー……。墓地の悪魔族モンスター3体を除外してダーク・ネクロフィアを守備表示で特殊召喚します……。さらに、モンスターをセット、カードをセットしてターンエンドです……」

「俺のターン、ドロー！ 手札から融合回収を発動！ 墓地の融合とフォレストマンを手札に戻すぜ！ そしてモンスターをセットしてターンエンドだ！」

「……私のターン、ドロー。……魔法カード、闇の誘惑を発動します。2枚ドローして、ネクロ・フェイスを除外します。……そして、ネクロ・フェイスの効果でお互いのデッキを除外します。……さらに、魔導雑貨商人を反転召喚し効果発動、魔法、罫カードが出るまでカードをドローします」

「おっと、今のネクロ・フェイスの効果でHEROは4枚除外されたからシャイニングの攻撃力はさらに1200アップして3800

になるぜ！』

……そう言って彼女はドローし始め、8枚位ドローした所で、

『……ドロー、私が引いたのは魔法カード、生者の書 禁断の呪術、よって手札に加えます。……そして、闇王プロメテイスを攻撃表示で召喚して、効果発動です。……墓地の闇属性モンスターを任意の数除外して、エンドフェイズまで除外した数×400ポイント攻撃力がアップします。私は墓地の闇属性モンスター8枚を除外し、攻撃力は3200ポイントアップして攻撃力4400となります』

……やっと分かりました、彼女のデッキの意図が。恐らく彼女のデッキは除外デッキ、それも恐らく次元の裂け目を使わず、ネクロファイアとかの効果で除外するデッキですね。ユベルは分からないですが、ダークネス・ネクロスファイアは一種の切札みたいなものなんでしょう。でも、恐らく本当の切札はあの2枚でしょう。

『……最後に生者の書を発動して、私の墓地に存在する真紅眼の不死竜を特殊召喚して、あなたの墓地にいるネクロ・ダークマンを除外します。……闇王プロメテイスでシャイニングを攻撃です、ダーク・パニツシュ』

『くっ、シャイニングは破壊されるが畏発動！ ヒーローシグナル！ 俺はデッキからE・HEROエアーマンを特殊召喚する！ そして、エアーマンの効果発動！ デッキからレディ・オブ・ファイアを手札に加えるぜ！ さらにシャイニングの効果で俺は除外されたスパークマンとネオスを手札に加えさせてもらう！』

朱鷺也LP3900

『……さらに、真紅眼の不死竜でセットモンスターを攻撃です。ア

ンデット・メガ・フレア』

『フォレストマンは破壊される!』

朱鷺也LP3300

『……ターンエンドです』

……さて、このターンで決めないと加賀屋さんはちょっとキツイですね。加賀屋さんのフィールドにはジ・アースとエアーマンの2体で黒崎さんの手札にはスパークマンと融合、レディ・オブ・ファアアそしてネオスの4枚。一方の黒崎さんは闇王プロメティスと真紅眼の不死竜、ダーク・ネクロフィアに伏せカード3枚。さて、どうなる事やら……。

『俺のターン、ドロー! 手札から、魔法カード、アドバンス・ドローを発動! フィールドのジ・アースをリリースして二枚ドローする! ……俺は、このドローに全てを賭ける! ドロー!』

そう言っただけで加賀屋さんはカードを二枚ドローする。……あ、これはもしかしたら加賀屋さんの勝ちですね。

『手札から融合を発動! 手札の沼地の魔神王とスパークマンを融合して、E・HEROシャイニング・フレイム・ウイングマンを召喚! さらに魔法カード、異次元からの埋葬を発動して、除外されているワイルドマンとエッジマン、そしてネクロ・ダークマンを墓地に戻す! そして墓地にネクロ・ダークマンが存在するとき、一度だけレベル5以上のE・HEROをコストなしで召喚する事が出来る! 現れる、ネオス!』

おー、流石というかなんというか、あっという間に高レベルモン



スターを2体も並べましたね。というか兄さん、さつきから『除外されてたなら先に言え』とか、『あまりシナジーのないカードだな』とかうるさいです。普通に嫌な人になってますよ？

『シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は墓地に存在するE・HEROの数×300ポイントアップする！ 俺の墓地には9体のHEROがいる！ よって2700ポイントアップしてシャイニング・フレーム・ウィングマンの攻撃力は5200だ！ さらにE・HEROレディ・オブ・ファイアを攻撃表示で召喚！ いっけえ！ シャイニング・フレア・ウィングマンで闇王プロメテイスを攻撃！ シャイニング・シュート！』

『……畏発動です、モンスターレリーフ。闇王プロメテイスを手札に戻して、ジ・エンド・スベリッツ終焉の精霊を特殊召喚します』

……やっぱりですか。除外を軸とする闇属性デッキなら入ってますよね。

『……終焉の精霊の攻撃力は除外されている闇属性モンスターの数×300ポイントとなります。除外されている闇属性モンスターは14体、よって攻撃力は4200になります』

……普通に足りませんね。そして、これで終了ですね。シャイニング・フレア・ウィングマンの効果で4200のバーンダメージを受けて終わりですね。

『……終焉の精霊は破壊され、終焉の精霊の効果発動。このカードが破壊され、墓地に送られたとき除外された闇属性モンスターを全て墓地に戻します』

『この瞬間、シャイニング・フレア・ウィングマンの効果発動！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与えるぜ！』

『……この瞬間、最後の罨発動です。ピケルの魔方陣。このターンの効果ダメージを0にします』

……用意周到ですね。流石に4200ダメージは受けませんか。でも、それがなくても既に詰みですねこれは。

『なら、ネオスで真紅眼の不死竜に攻撃！ラス・オブ・ネオス！』  
『……真紅眼の不死竜は破壊されます』

奈落LP2100

『さらにエアーマンで魔導雑貨商人を攻撃！』

奈落LP500

『そして、レディ・オブ・ファイアでダイレクトアタック！』  
『……私のライフは0で、私の負けです』  
『おおーっと！ここでデュエルに決着が着いたあー！この濃密なデュエルを征したのは加賀屋朱鷺也選手だあー！』

なんか少し危なげでしたがなんとか勝ちましたね。あれ？ なんか加賀屋さんと黒崎さんでしたっけ？ 2人がなにか話してますね。なにになに

『そういえば、黒崎ってうちのクラスの黒崎だよな？ 黒崎って強かったんだな』

『……いえ、加賀屋君程ではないです』

『楽しかったぜ！ またデュエルしような！』

『……はい、是非またデュエルしましょう』

……あれ？　なんか黒崎さんの顔がうつすらと赤くなってませんか？　そして兄さん、『くっそ、あの野郎俺の目の前でフラグ立てやがって……妬ましい』とか言ってるやないで下さい。彰子姉達が軽く引いてます。

「兄さん、そろそろ兄さんの試合じゃないですか？」

「パルパルパルパル……はっ。あ、そうだったな。じゃあ行ってくる」

「頑張ってくださいね悠君」

「まあ、出来るだけ頑張るよ」

そう言っただけ兄さんは観客席を離れ、控え室へと向かう。私も見送りトイレに行きたい為、一緒について行く。一緒に歩いている時、

「ねえ、兄さん」

「ん？　なんだ？」

「1回戦、勝てると思いますか？」

と聞いてみました。聞くのも野暮のような気がしますが一応聞いてみます。すると兄さんは、

「さあ、相手次第かな？　でも朱鷺也との約束もあるし、アリスや遊星さんともデュエルしたいし……あまり負けたくないってのが本音かな？」

「まあ、兄さんなら余裕だと思いますが。どのデッキで戦う予定なんですか？」

「うーん、1回戦は手を抜いてもいいと思うんだけど……アリスや朱鷺也もいきなり本気で来てたしなあ。やっぱり本気で行くべきか

なあ？ という訳で恐らくドラグニティを使うかな？」

ドラグニティですか……こないだのデュランダルみたいなモンスターを使うんですね。私もまだ兄さんが言う『ラウンドナイト』は一枚しか知りませんが、他のカードも見れるでしょうか？

「んじゃ、ここからは選手以外立ち入り禁止だからここでお別れだな。またな優奈」

「はい、兄さん、頑張ってくださいね」

「おう」

そう言っただけ兄さんは控え室に続く通路に入って行きました。……さて、私も早くトイレを済まして戻りますか。そう思ったその時、

「おい、お前今の奴の妹か？」

「ええ、そうですが一体なんのようです」

「!?」

いきなり声をかけられて、いきなり口を塞がれました。な、なんです！？ なにが起きてるんです！？

「ッ！　　ッ！」

「ッ！」

「ッ！」

「へへッ、これも兄貴が勝つ為だ。悪く思つなよ」

そう言われ、私はなにかを嗅がされて意識を失いました。……兄さん、サレンダーだけは絶対しちゃ駄目ですからね……。

## 第十二話 人形と英雄の伝説（後書き）

作者の言い訳。

その一、9月半ばで半分位まで完成していた>うっかり削除してしまつた>意気消沈気味だったのでゆつくりと執筆。

その二、人形シリーズの調整。最初は異常に壊れていて友達にだめだし食らつたり。

その三、RPGツクールVX買った。

その四、神霊廟、零式、ともの3などなどやってた（おい

という感じで忙しかつたんです。あ、やめてください石投げないで。まあ、他にも書いていたつていうのもありますがそれは置いて、人形シリーズについて、

アリス（転生者）の使うシリーズ。何かしらのアクションによって効果ダメージを与えるバーンデッキ。また、サポートカードもいくつか存在するが、どれも一癖ある為、少し使いにくい仕様となっている。エクストラデッキは融合、シンクロ、エクシーズの三つを使う。ぶつちやけ、知識が豊富じゃないと使いにくい上級者用デッキ……だと思えます。

と今回はこれくらいで終わりにしたいと思います。それではまた次回！

第十三話 悠斗の怒り。吼えろ、キメラテック・オーバー・ドラゴン（前書き）

宣言通りの更新！ ぶっちゃけ今までで一番手札調整が疲れました

### 第十三話 悠斗の怒り。吼える、キメラテック・オーバー・ドラゴン

「さて、そろそろ行きますか」

「頑張れよ悠斗。お前が勝たないと俺と戦えないんだからな」

「分かってるよ」

朱鷺也に渴？ を入れられ、ステージに向かおうとすると、

「広瀬悠斗だな？」

と、いきなり声をかけられた。振り返ってみると、そこにはとてモガラが悪そうな男がそこにいた。

「そうだけど、あなたは？」

「俺はレギオン、お前の対戦相手だ」

「へえ、そうなんだ。楽しいデュエルをしましょうね」

「……なにを言ってるやがる。お前が一方的に勝られるだけだ」

……は？ なにを言っているんだ？ そう思っているとレギオンは俺たちに位にしか聞こえない声で、

「てめえの妹はあずかった。返して欲しければこのデュエルわざと負けることだな」

「！？」

なんだと？ 優奈が攫われた？ こいつに？ ……………、

「という訳だから、せいぜい俺に勝られて負けてくれや。それじゃあな」

そう言っただけの男は去っていくが、特に気にしない。それよりもだ……、

「お、おい悠斗大丈夫か？ 優奈ちゃんなら俺や宇佐美で探し……殺す」は？」

「あの糞野郎！ 優奈を誘拐するなんてただじゃおかねえ！ 肉体的に……は勘弁してやるが、精神的にズタズタにしてやる！ デュエルが出来なくなるくらいになあ！」

「……あーあ、あのレギオンって奴、終わったな」

ははははは！ ドラグニティで相手してやろうと思ったけど気が変わった。鬼畜サイバーでトラウマを刻み込んでやる！

「朱鷺也、なるべくあの野郎を処刑するために時間かけるから、それまでに優奈を見つけてくれよ」

「あ、ああ！ 任せろ！ 優奈ちゃんは必ず見つけてやる！」

「いくらなんでもこの広いスタジアム内を一人で探すのは無理よ」

朱鷺也と優奈を探す打ち合わせをしていると、またまた突然背後から声が聞こえてきた。振り返って見ると、そこにはアリス、蟹、龍亞達がいた。って聞こえてたの？

「悠斗の兄ちゃん！ 優奈ちゃんは俺達で手分けして探すから悠斗の兄ちゃんはデュエルに専念してよ！」

「そうね。幸い、頭悪そうな連中っぽいし、人気の少ない場所をしらみ潰しに回って行けば見つかるでしょ」



「アリス……龍亞君……それに遊星さんも……」

「悠斗、優奈の事は俺達に任せて、悠斗は全力でデュエルするとい  
い。……正直悠斗のデュエルが見れないのは残念だが仕方ないな」

そう言つて、遊星達は四人で打ち合わせを始める。……はは、こ  
いつらと来たら……よし、

「……優奈の事よろしくお願いします。あいつは、俺のたった1人  
の家族なんで」

このデュエル、絶対に勝とう。あの野郎に制裁を加えた上で、圧  
倒的勝利を納めよう。そう決意して、俺はデュエルステージへと向  
かった。

さて、選手召喚は飛ばして既にデュエルに入りますよ。今俺は優  
奈を誘拐した奴と対峙している。本当は今にでも殴りかかりたかつ  
たが、ここはこらえる。我慢しようとしたのだが、

「よお、一方的にやられる覚悟は出来たかあ？」

なんて、言われたから一気に怒りが有頂天に、ギアは一気にフル  
スロットル、でも冷静さは忘れない。だから、

「……おい」

「あん？」

「10ターンだ。10ターンハンデをくれてやる。その間、俺はお前に攻撃はしない」

完膚なきまでに叩き潰す。

「だから、俺を倒すならその間に倒すんだな」

「……上等だ。やってやんよ」

「「デュエル！」」

悠斗、レギオンLP4000

「先行は俺がもらうぜ！ 俺のターン、ドロ！ インヴェルズの先鋭を攻撃表示で召喚！ カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

なるほど、相手はインヴェルズデッキか。少し厄介なデッキだな。さて、俺の手札は……微妙に事故ってるかこれは？

「俺のターン、ドロ。サイバー・ドラゴン・ドライを攻撃表示で召喚。さらに魔法カード、エヴォリユーション・バーストを発動。このカードはサイバー・ドラゴンが存在する時のみ発動する事が出来る。が、サイバー・ドラゴン・ドライは通常召喚した場合、サイバー・ドラゴンとして扱うから発動出来る。俺はインヴェルズの先鋭を破壊する。カードを2枚伏せてターンエンド」

サイバー・ドラゴン・ドライ（CO2さんの考えてくれたオリジナルカード） 4 光属性 機械族

攻1700 守1600

このカードが裏側守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わずにそのモンスターを破壊する。

このカードの通常召喚に成功した場合、このカードのカード名は

「サイバー・ドラゴン」として扱う。

また、このカードが墓地に存在する場合、このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

さて、次のターンからしばらくはラーヴァが手札にあるからなんとかなるけど、早急にモンスター引かないとまずいなこれ……というかこのデッキモンスター30枚近く入ってるのになんで魔法カード固まってるし。

「俺のターン、ドロー！ インヴェルズを呼ぶ者を攻撃表示で召喚！ サイバー・ドラゴン・ドライを攻撃だ！ さらにこの瞬間罠カード、侵略の手段を発動！ デッキのインヴェルズ・ホーンを墓地に送って攻撃力800ポイントアップだ！」

「罠カード、くず鉄のかかし発動。1回だけバトルを無効にして、このカードを再びセットする」

「ちっ、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

引いたのは天罰。ヤバい本当に事故ってるかも。

「サイバー・ラーヴァを攻撃表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ インヴェルズを呼ぶ者をリリースして、インヴェルズ・マデイスを攻撃表示で召喚！ そしてインヴェルズを呼ぶ者とインヴェルズ・マデイスの効果発動！ デッキからインヴェルズを呼ぶ者とインヴェルズ・ホーンを特殊召喚！」

やばっ、相手のデッキ回りに回ってる。

「インヴェルズ・マデイスでサイバー・ドラゴン・ドライを攻撃！」

「畏発動、くず鉄のかかし。バトルを1回だけ無効にする。そしてこのカードを再セットする」

「ならインヴェルズ・ホーンでサイバー・ドラゴン・ドライに攻撃！」

「さらに畏発動、ガード・ブロック。ダメージを0にして1枚ドロ―する。サイバー・ドラゴン・ドライは破壊される」

「インヴェルズを呼ぶ者でサイバー・ラーヴァを攻撃！」

「サイバー・ラーヴァは破壊される。が、サイバー・ラーヴァの効果発動。このカードが戦闘で破壊された時、このターン俺が受ける戦闘ダメージは0になる。さらにデッキから2体目のサイバー・ラーヴァを特殊召喚」

「ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロ―」

よし、やっとモンスター来た！

「サイバー・ヴァリーを攻撃表示で召喚、さらに魔法カード、機械複製術を発動。サイバー・ヴァリーをさらに2体特殊召喚して、ターンエンド」

「俺のターンだ！ ドロ―！ インヴェルズを呼ぶ者をリリースして、インヴェルズ・モースを攻撃表示で召喚し効果発動！ ライフを1000ポイント支払い、相手フィールドのカードを2枚手札に戻す！ 俺はくず鉄のかかしとサイバー・ラーヴァを手札に戻す！ さらにインヴェルズを呼ぶ者の効果でインヴェルズの斥候を特殊召喚！」

レギオンLP3000

え？ 何故にラーヴァ？ くず鉄は分かるけど、ラーヴァの効果は破壊は免れないから、ラーヴァ倒してヴァリー攻撃すればいいの

に。

「インヴェルズ・モースで、サイバー・ヴァリーを撃つ！」

「サイバー・ヴァリーの効果発動。このカードが攻撃対象になった時、このカードを除外して、バトルフェイズを終了する。そして俺は1枚ドロー」

「ターンエンドだ」

残り6ターン。だけど、ヴァリーを破壊しない限り実質4ターンつてところかな？

「俺のターン、ドロー。サイバー・ラーヴァを再び召喚してターンエンドだ」

「俺のターンだ！ ドロー！ インヴェルズの斥候とインヴェルズ・モースをリリースして、インヴェルズ・ガザスを攻撃表示で召喚して効果発動！ フィールドの魔法、罫を全て破壊する！」

「それにチェーションしてカウンター罫発動、天罰。手札のくず鉄のかかしを墓地に送り、インヴェルズ・ガザスの効果を無効にして破壊する」

「ちっ、ならインヴェルズ・ホーンでサイバー・ラーヴァを攻撃！」

「サイバー・ラーヴァの効果でダメージは0になり、デッキからサイバー・ラーヴァを特殊召喚する」

「さらにインヴェルズ・マデイスでサイバー・ヴァリーを攻撃！」

「サイバー・ヴァリーを除外して効果発動。バトルフェイズを終了し、1枚ドロー」

「くそっ！ カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー」

……なんでこんなに固まってるのかなあ？　これが立て続けに来るなんておかしいでしょ。

「永続魔法、強欲なカケラを2枚発動してターンエンドだ」

「俺のターン、ドロ！ 永続罫、エンジェル・リフト発動してインヴェルズの斥候を特殊召喚！ そしてインヴェルズの斥候をリリースして、二体目のインヴェルズ・マデイスを召喚し効果発動！

墓地からインヴェルズ・ガザスを攻撃表示で特殊召喚！ インヴェルズ・ホーンでサイバー・ラーヴァを、インヴェルズ・ガザスでサイバー・ヴァリーを攻撃！」

「当たり前だけどサイバー・ラーヴァの効果でダメージは0になり、サイバー・ヴァリーの効果によりこのカードを除外してバトルフェイズを終了し、1枚ドロする」

「畜生！ ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロ。この時、強欲なカケラに強欲カウンターを1つ乗せる。さらに魔法カード、一時休戦を発動。お互い1枚ドロして、次の相手ターンのエンドフェイズまで全てのダメージを0にする。さらに速攻魔法異次元からの埋葬でサイバー・ヴァリーを墓地に戻して、ターンエンドだ」

さて、どう出るかな？ そろそろ半分を切ったから焦って来るな。

「俺のターンだ！ インヴェルズの先鋭を召喚してターンエンド！」

「後3ターン。俺のターン、ドロ。この瞬間、強欲カウンターがさらに1つ乗り、2枚の強欲なカケラの効果発動。このカードを墓地に送り4枚ドロ。カードを3枚伏せてターンエンド」

「俺のターンだ！ インヴェルズの先鋭でダイレクトアタック！」

「畏発動、威嚇する咆哮。このターン相手は攻撃宣言する事が出来ない」

「ああ！ うっぜえ！ ターンエンドだ！」

『おおつと広瀬選手！ 宣言通り10ターン耐えるつもりなのか！  
!? 一回も攻撃をしないぞー！ だが、レギオン選手の攻撃は広

瀬選手の堅い防御により、全て阻まれるー！』

今になって実況が聞こえてくる。というか、一回も攻撃しないっていうか、ぶっちゃけ出来ないに近いんだけどこれ、。

「俺のターン、ドロー。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ ……ちっ、少し飛ばしすぎたかインヴェルズ・ガザスで攻撃！」

「罨カード、攻撃の無力化。攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「ラストターンだ。俺のターン、ドロー。このままターンエンドだ」

「俺のターン！ ドロー！ へへへ、来たぜ！ まずは罨カード、デストラクション・ポーションを発動！ インヴェルズ・ガザスを破壊して、その攻撃力2800ポイントライフを回復するぜ！」

レギオンLP5800

これは……来るかな？ インヴェルズ最大の攻撃力を持って、ライフ半分払ってリセット効果持ちのモンスターが、

「さらに速攻魔法、侵略の一手を発動！ インヴェルズ・マデイスを手札に戻し、1枚ドロー！ そして、もう1体のインヴェルズ・マデイス、インヴェルズ・モース、インヴェルズの先鋭をリリースして、インヴェルズ・グレイズ召喚！ そして、インヴェルズ・グレイズの効果発動！ ライフを半分支払い、フィールドのこのカード以外のカードを全て破壊する！」

「その効果にチェインして罨発動！ 和睦の使者！ 相手はこのターン、俺は戦闘ダメージを受けない！」

あつぶねえ！ もし、このまま攻撃されてたら負けてかも知れない。鬼畜サイバーにしときながら、攻撃を止めたりするカード結構入れといてよかった……！

「ちっ！ なら、暗黒界の取引を発動。お互い1枚引いて1枚捨てる！ 俺はインヴェルズ・ギラファを墓地に送る！」

「なら俺はサイバー・ジラフを墓地に送る」

「そして魔法カード、悪夢再びを発動して、インヴェルズ・マデイスとインヴェルズ・ギラファを手札に加えてターンエンドだ！ さて、てめえのハンデとやらもここで終わりだが、この状況から、ひっくり返せるかコラア！」

「俺のターン、ドロー！ さらに貪欲な壺を発動し、サイバー・ラーヴァ2体、サイバー・ヴァリー3体をデッキに戻し、シャッフルして2枚ドロー！」

よし、やっとマテリアルとボンドが来た！ これでやれる！ そして一言、正直相手が暗黒界の取引を入れてるのが意外でした。

「さらに速攻魔法、フォトン・リード発動！ このカードは手札のレベル4以下の光属性モンスターを1体特殊召喚する。俺はプロト・サイバー・ドラゴンを特殊召喚！ さらに速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！（何回か使ってるから分かんと思うけど）一応説明しておく、このカードは攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時に発動でき、同名モンスターを可能な限り特殊召喚する。その代わり相手もモンスターを1体選択し、可能な限り特殊召喚できるけど、インヴェルズ・グレスは特殊召喚出来ないだったよな

あ………？

「……ちっ、ああそうだ」



「プロト・サイバー・ドラゴンはフィールドに存在するときサイバー・ドラゴンとして扱う！ あと墓地のサイバー・ドラゴン・ドライは墓地にいる時、サイバー・ドラゴンとして扱う。よって俺はデッキからサイバー・ドラゴン3体と墓地のサイバー・ドラゴン・ドライを特殊召喚！ カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

さあ、次で来るぜ。オーバー・ドラゴンがな！ そして、その時がお前の処刑タイムだ！

「俺のターンだ、ドロー！ インヴェルズの斥候を特殊召喚！ さらにインヴェルズの斥候をリリースして、インヴェルズ・モースを召喚！ インヴェルズ・グレスでプロト・サイバー・ドラゴンを攻撃！」

「プロト・サイバー・ドラゴンは破壊される」

悠斗LP1900

「さらに、インヴェルズ・モースでサイバー・ドラゴン・ドライを攻撃！」

「サイバー・ドラゴン・ドライは破壊される」

悠斗LP1200

『おおーつと！ ここで広瀬選手、ここで初ダメージだあ！ しかもレギオン選手が有利になったー！』

「ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー。……罫カード、リミット・リバーズを発動して、サイバー・ジラフを特殊召喚して、効果発動。このターン俺は効果ダメージを受けない。さらに罫カード、チェーン・マテリアルを発動、このターン手札、フィールド、墓地、デッキ全てを融合

に使うことが出来る。そして、パワー・ボンドを発動！ 俺はサイバー・ドラゴン3体、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ2体、サイバー・ドラゴン・ドライ3体、……（長いので以下省略）……サイバー・ジラフを1体、計25体の機械族モンスターを除外！ 現れる、キメラテック・オーバー・ドラゴン！ キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は融合素材となったモンスターの数×800となる。俺が融合に使用した数は25体、さらにパワー・ボンドの効果で攻撃力は倍になり、キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は40000となる！」

「な、攻撃力40000だと!？」

『ななななんとー！ 広瀬選手、ついに動いたと思ったらいきなり攻撃力40000という大会史上いや、デュエル史上初となりかねない攻撃力を叩き出したー!』

MCの実況と共に観客も少なからず動揺していた。まあ、動揺しないのは『落葉』常連か中学時代の仲間か宇佐見辺りだろうな……だって、この世界って攻撃力3000オーバーで驚くじゃん。

「そして、アーマード・サイバーンを召喚してキメラテック・オーバー・ドラゴンに装備して、カードを1枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズ、チェーン・マテリアルの効果でキメラテック・オーバー・ドラゴンは破壊されるがアーマード・サイバーンを身代わりにして破壊を免れる。さあ、これがあなたのラストターンだ。足掻いて、苦しんで、絶望しな」

「お、俺のターン！ ……くそっ……！ モンスターを全て守備表示にしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。リバースカードオープン、異次元からの帰還！ ライフを支払って除外されたモンスターを可能な限り特殊召喚する！ 俺はサイバー・ヴァリー3体、サイバードラゴンを特殊召喚！ そして、サイバー・ヴァリーの第2の効果発動！ この力

ードとフィールドのモンスター1体を除外する事で2枚ドロー出来る、俺はサイバー・ヴァリーとサイバー・ヴァリー、サイバー・ヴァリーとサイバー・ドラゴンを除外して4枚ドロー！」

これで俺のデッキはないに等しい。これで決められなかったら、俺の負けだなこれは。

「装備魔法、ミスト・ボディをインヴェルズ・グレズに装備、さらに魔法カード、H・ヒートハートを発動し、キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力を500ポイントアップと貫通効果を得る！そして、速攻魔法、リミッター解除とオーバー・ドライブを発動！リミッター解除の効果は省略してオーバー・ドライブの効果だが、このカードはエクストラデッキから召喚されたモンスターの攻撃力を2倍にする！ただし、発動したターンのエンドフェイズに攻撃力を半分にするけど、まあ関係ないか」

オーバー・ドライブ（オリジナルカード） 速攻魔法

このカードは自分エクストラデッキから特殊召喚されたモンスターを1体選択し、選択されたモンスターの攻撃力を2倍にする。

このカードを発動したエンドフェイズ、選択したモンスターのモンスターの攻撃力は元々の半分になる。

「よって、キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は40500を4倍して、攻撃力162000になる！……さて、覚悟は出てくるよなあ？」

「ま、まて！約束を忘れたのか？ てめえが俺に負けねえとお前の妹が酷い目にあうぞ！」

「妹？ 妹ならそこにいるぜ」

そう言っただけ俺が指を差したほうを見ると、そこには蟹に寄りかか

りながら立っている優奈の姿があった。まだ意識がはつきりとしていないのか、だるそうな表情をしながら優奈は『やっちゃんえ兄さん』と言ったような気がした（長年一緒に生きてきた兄の勘がそう言っている）。オーケー、今まで我慢してきた怒りとテンション（こちらはとところどころもれていた）を放出するぜ！

「な、なん……だと……!?」

「じゃあ、これで覚悟は出来たよなあ！ キメラテック・オーバー・ドラゴンでとりあえずインヴェルズ・モースに攻撃い！ エヴォリユーション・レザルト・バーストオ！」

「ぐおおおおお！ 俺のライフはゼ「なに勘違いしているんだ？」……は？」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンのもう1つの効果、このカードは融合素材にした数だけ相手モンスターを攻撃する事が出来る。よって、俺はインヴェルズ・マデイスに1回、ミスト・ボディの効果で戦闘体性を得たインヴェルズ・グリーズに23回攻撃を残している！ ぶっちゃんけお前のライフはだからもうデュエルは終わってるけど、俺の怒りが収まらないからそのまま追加攻撃だ！ レボリユーション・レザルト・バースト、24連打あ！」

そう叫ぶと同時にオーバー・ドラゴンの24本の頭から光線が放たれる。えーっと、大体200万越えのオーバーキルって所かな？ 流石に俺も始めてこんな数値叩き出したな。普通にやりすぎたくださいなこれ。

『き、決まったあー！ 圧倒的！ 究極的な攻撃力をもって、レギオン選手を打ち倒して、広瀬選手、2回戦進出を決めたぞおー！ それにしても凄い！ これほどまでのダメージを与えた選手はかつていなかっただろう！ 会場の観客も呆然として、ものすごい静かだー！』

うん、やり過ぎだな。勝ったのに歓声すら来ないよ……べ、別に寂しい訳じゃないんだからね！……止めよ、自分でやって気持ち悪いと思っただ俺がいる。とりあえず、こいつを一発殴ってからセキュリティに通報だ。そう思い、俺はレギオン（だっけ？）の野郎に近づいて、硬く握った拳を振り抜いた。そして、そのまま胸ぐらを掴み、

「治安維持局局长、レクス・ゴドウィン！」

そう叫んだ。因みに名前は治安維持局のホームページにフルネームで書いてたから呼んでも大丈夫だと思う。

『……なんでしよう』

「こいつとどつかにしているこいつの仲間が俺の妹を誘拐して俺に負けを強要してきた。『負けなければ妹を酷い目にあわす』ってね。幸い俺の友達が妹を助けてくれたけど、これって立派な誘拐罪と恫喝だよな？」

『……そうですね、直ぐにセキュリティに連絡してその方達を連行しましょう。それと、妹さんを念のため医務室に連れていった方がいいでしょう』

「……言われなくてもそうするさ」

そう言って俺はレギオンを掴む手を放し、ステージから降りて蟹のいるところへ向かう。……あとはセキュリティが蟹を入れた牢獄とかにぶちこむだろうからそれでいい。それよりもだ、

「優奈、大丈夫か？」

「……ええ、まだ頭が働きませんが、体に異常はないと思います」

「そうか、良かった……ホントに無事で良かった……！」

「ちょ、兄さん……何泣いてるんですか……？」

優奈が無事だと分かった時、俺は少し涙を流していた。何故なら俺にとつて優奈は大切な妹であり、たった1人の家族だからだ。俺らには既に両親はいない、親戚はしらないけど会ったことがない。そこで優奈を失ったら俺は1人になりそうで怖かったのかも知れない。だからこそ、優奈が無事だった時は本当に安堵した。

「……遊星さん、妹を、優奈を助けてくれて本当にありがとうございます。お礼つて言う訳じゃないですし、この程度でお礼にはならないですけど、これくらいいしないと気がすまないなのでこれ、受け取つて下さい」

そう言つて俺は何枚かのカードを遊星（流石にこの状況で蟹と呼ぶ気はない）渡す。え？ なにを渡したかつて？ それは今は秘密つて事で。でも、恐らくのちに遊星の役に立つカードだと思つている。

「……分かった受け取つておく」

「そうして下さい。俺じゃ使うことの出来ないカードですし、それなら遊星さんが持つていた方がそのカードも幸せでしょう。じゃあ、俺は優奈を医務室に連れて行きますので」

「ああ。……優奈、お大事にな」

「……ええ、遊星さん、ありがとうございます」

そう少し会話して、俺は蟹と別れ、俺は優奈を背負い、通路を歩いていく。

「……兄さん」

「なんだ？」

「……………怒ってます……………?」

「いや、怒ってないけど心配した、すっげえ心配した。もう本気でサレンダーするか悩む位に心配した」

「うっ……………すいません本当に……………」

心配したかと聞いてくる優奈に対してそう返すと優奈はばつが悪そうに謝ってくる。

「いや、冗談だよ？ 心配したのは冗談じゃないけど。とりあえずこれからトイレとかが行くときは宇佐美や夏乃とかをついてきてもらいな。あいつらなら多少の事ならなんとかしそうだし」

「……………そうですね。これからはそうします。とりあえず、私は寝てますので、医務室に着いたら教えてください」

「りょーかい。さてと……………医務室どこだろう……………?」

その後アリスと朱鷺也と合流して医務室に無事たどり着いた。べ、別に迷子にはなっていないんだからね！

### 第十三話 悠斗の怒り。吼える、キメラテック・オーバー・ドラゴン（後書き）

作者の言い訳。

その一、速攻魔法『オーバー・ドライブ』について、シンプルで強力なカードが作ってみたかった。今まで作ったのは一癖あるようなカードばかりだったし。

その二、優奈が誘拐された、正直悠斗を怒らせる為。今度誘拐されているときの優奈の心情を書いてみようかと。

と今回はこれくらいです。さて、次回は龍可対精神の人（名前忘れた）ですが……どうしましょうね、色んな意味で。ある意味超展開になりそうですが、温かい目で見守ってくれるとありがたいです。

来週はネギまを更新する予定なので、更新は少なくとも二週間後の予定です。……あ、でももしかしたらその前にタッグフォーエス6購入記念に『もし悠斗がタッグフォーエス6』に出たらを書くかもしれない。TGマジ強い。そして、初手からグランエルはマジ鬼畜



第十四話 精霊界へ Aパート（悠斗サイド）（前書き）

少し遅れてすいません。かなり難産＋超展開ですがあたたかい眼で見てくださいるとうれしいです。それでは十四話どうぞ。

第十四話 精霊界へ Aパート（悠斗サイド）

「……うん、身体に異常はないわね。まだ薬の効果が切れてないから眠気は抜けないのは時間がたてば直ると思うから」

「そうですか、よかったです……優奈、体調はどうだ？」

「……うん、身体は大丈夫なんですが、とにかく眠いです……」  
「眠いって言ったって、どうする？ 眠いなら宇佐美に頭下げて送ってもらうけど、俺は一応参加者だからまだ帰れないけど」

宇佐美なら今度なんか埋め合わせすればしぶしながらも承諾してくれるだろう。……何を要求されるか分かったもんじゃないからちょっと怖いけど、

「うーん……まだ敗者復活戦が残っていて、龍可さんがデュエルするらしいんですけど……まあ、しょうがないですね。帰ります」

あ、そういえば後少しで龍可のデュエルが始まるんだった。こないだ、優奈と二人で龍可のデッキを魔改造しまくったからなあ……こんな感じに、

『ここはやっぱりテイカーじゃね？ 他にもクリボンとか使うんならシモツチとかレフィキュルとかもいいんじゃない？』

『でもそれならギフトカードとか押し売りとか入れないといけないじゃないですか。それなら……なんてどうですか。ちょうど龍可さんのデッキは光属性主体ですし』

『ああ、それいいかもな！ ならこれとこれも入れてと……』

『あ、あの悠斗さん、優奈ちゃん、あんまりやりすぎないで下さい』

ね……?」

「分かってる分かってる。クリボンとサンライトユニコーンはしっかりと入れとくから」

「……後はどうなってるか分かりませんがね」

「ちょ、ちよつと優奈ちゃん今不吉な事言わなかった!? ねえ、優奈ちゃん!」

……うん、これ以上はやめておこう。龍可がかわいそうだ。最終的にはぶつちやけやりすぎた感が漂ってたし……いや、だってタツグフォースの龍可普通に弱いんだもん。何度あのデツキを魔改造したいと考えたことが。という訳で今回の試合は本当に大変なことなと思うなあ……。

「んじゃ、ちよつと宇佐美呼んでくるから優奈はまあ、入り口で待っていてくれ。先生、妹を入り口まで連れてつといて下さい」

「分かったわ。なるべく早く送ってくれる人を連れてきて下さいね」

「了解です」

~~~~~しばらくお待ち下さい~~~~~

「んじゃ、優奈を頼むぞ宇佐美……じゃなくて彰子」

「はい、任せてください。あと、初めて名前で呼びましたね」

「お前が脅迫地味な事言ってきたんだろ」

あの後ダツシユで彰子のところに行き、事情を説明して、優奈を送ってもらえるかと頼むと、今度買いい物に付き合つのと、名前を呼ぶ事で承諾してくれた。なんか解せない。というか軽く脅迫だった気がする。

「じゃあ、行きましよう優奈ちゃん」

「……ええ、すいません彰子姉、迷惑かけます」

「いいんですよ。気にしないでください」

「じゃあ、今度買い物に付き合う必要「それはダメです」……なん  
でさ、気にしないでいいんじゃないのかよ」

「あれですよ、ただし悠君、あなたはダメです、みたいなの？」

何それすつげえ解せない。まあ、そんな事思っても仕方ないので  
素直に見送って控え室に戻る。ん？　なんか急に眠くなってきたん  
だけど……

「あら悠斗、もう帰って来たのね。試合が始まりそうだったから先  
に戻らせてもらったけど、優奈の調子はどうなの？　ってなんか眠  
そうね悠斗」

「んー、別に大した問題はなかったよ。そして眠そうなのはアリス  
もじゃないか」

「そうなのよ、龍可の試合が始まった途端眠くて眠くて……」

って事はアリスも眠くて、俺も眠い。俺らの共通点は転生者とい  
う事。そして龍可のデュエルで起こる事と言えば……、

「……アリス、このデュエル中絶対に起きてるぞ」

「え？　どうしたのよいきなり」

「今寝たら確実にカードの精霊世界に飛ばされる。確実にだ。そん  
な死亡フラグバリバリな世界に飛ばるのは御免だぞ俺は」

「……なるほど、そういえばそんなイベントがあったわね、知識し  
かないけど。なら起きてる事にしましょう。気を紛らわせるために  
聞けけど悠斗、あなたは今回のデュエルどちらが勝つと思う？」

うーん、龍可とデュエルカウンセラー（だっけ？ あんまり記憶にないけど）のデュエルかあ……確か超魔神イドだっけ？ エースカードが攻撃力2200だったよなあカードって。……うん、

「問答無用で龍可かな？」

「あら？ そこは世界の修正力的な意味で相手って言うと思ったのに、どうしてかしら？」

「だってな、俺と優奈のせい龍可デッキには や が入ってるんだぞ？ 負けるわけないだろ？」

「はあ！？ あんた ってガチとか言うレベルじゃないわよ

！？ あんたリアルであった私が受けたあの悲劇を繰り返す気！？」

「お、おおう。アリス落ち着け。というか知識はあっても記憶はないんじゃないのか？ というかあのカードはまだ禁止カードではなかった気がするけど」

「……それ位トラウマとして魂に残ってるんじゃないかしら？ だってあれは強すぎじゃない。その名前聞いて一瞬だけ私のトラウマが想起されたのだけだ」

「どんな事があったんだろ？ というかどんなデッキ使ってたんだろ？ 確かにあのカードは強いけど、トラウマになるような猛威を振るった記憶はないんだけどなあ……。というか魂に残るレベルで嫌なカードだったんかい。」

「まあ、見てようぜ。俺と優奈が調子に乗りすぎて魔改造してしまった龍可のデッキを、正直どうしてこうなったと思うようなデッキになったからな。最大攻撃力が2200程度の相手なんて目じゃないぜ？」

「……なんか、実際にありえそうで怖いわ……」

『……フィールド魔法、古の森を発動……』

……あれ？ 既に始まってね？ っていつかもうカードの精霊世界にダイブするところじゃね？ そう思った瞬間急激に眠気が……！

「あ、アリス……正直思った、抗えないわこれ。うん無理、寝る」「諦めるの早すぎるわよ……でもまあ、概ね同意するわ。これは抗えないわね……」

そう言って、俺達の意識は闇に落ちた。

『……て……さい。起き……下さい』

なんかさっきから耳元で話しかけてくる人がいる。けど俺は眠いんだ。そう簡単に起きてたまるか。

『うーん、……に頼まれて来たのに肝心な相手が現在進行形で寝てるよ……。こんな時どうすればいいんだろ？……？』

はっはっはっ、どこのどいつに頼まれたか知らないがさっさと帰るがいい。そう思ったが、

『よしっ、こうなったら得意の風霊術で……！』

その言葉を聞いて意識が覚醒していく。そうだ、もし俺の仮定が正しければここは、って風霊術だって!?

「えーい、風霊術、みやび」畏発動、魔宮の賄賂！ 魔法、畏の発動を無効にして破壊する！ そして相手は1枚ドロー！」あ、起きた。しかも流れるように風霊術を無効にして来ました」

あ、あつぶねえ！ デュエルだったらデッキトップに戻るだけだけど、リアルじゃどんな効果になるか分からないからな、下手したら空に打ち飛ばされて、空の旅をするかもしれないし、リアルが簡単に想像出来ないのはなるべく回避しようしよう。さて、それよりもだ……、

「……いきなり攻撃しかけて来るとはいい度胸だなこの野郎。しかも寝てる所を襲うとは卑怯だな」

「え、いや私はただあなたを起こそうと……」

そこにいた精霊は緑色のポニーテールなマントみたいなのを着ている魔法使い風の女の子、というか『風霊使いウイン』だった。リアルで見ると結構可愛いが、だがしかし、駄菓子菓子、

「俺の眠りを妨げた罰だ！ ドラグニティナイト ゲイボルグを召喚して、畏カード、バーストブレス発動お！ 吹き飛ばせゲイボルグ！」

「しゅ、守備力1500の私にはツライ！」

俺の眠りを妨げた罪は重い。攻撃力2000のブレスを食らって死ぬがよい。

~~~~~再び、しばらくお持ち下さい~~~~~

「さて、何か言う事は？」

「すみませんでした……」

「よろしい。で、一体なんの用なのさ？」

「えっとですね、かくかくしかじかですね」

「成る程、つまりお前の上司？ がここに人間が来るからそこに行つてサポートしろと」

「まあ、上司というよりは里の長ですけど、まあそんな所です」

……確かに、ダグナー編では精霊界やべえ、とかそんな話もあった気がするけどなんで俺がここに来ないといけないのさ？

「あ、それはね、現在進行形でこの世界に邪悪なるものが来てるからだね」

「……それって、危くないか？」

「……うん」

そう思った矢先、木々の間から1体のモンスターが！ って、

「……ガスタ・イグル？ にしてはなんか黒いな」

「！ 気をつけて！ そいつ邪悪なるものに侵されてるよ！」

「へ？ いや、なにを言ってるんだよ？ ガスタ・イグルはお前と同じ風属性だろ。しかも攻撃力200でリクルート専用のチューナーのぶつちやけそこまで強くないモンスターだぜ？ そんなモンスターが邪悪な『コケツ！』痛あ！ ガスタ・イグルにつつかれた！ てかお前絶対にそんな鳴き声じゃないよな！？」

くそっ！ これが攻撃力200の本気なのか！？ 地味に痛え。



というか血が出てるし、

「そういえば、古の森<sup>こく</sup>で直接的な攻撃をしたらどうなるんだ？」  
「もちろん、しばらくすると森の裁きを受けて破壊されますよ」

ほほう、つまりこのガスタ・イグルはもう少しで破壊されると。  
そう思った矢先、おや……？ ガスタ・イグルの様子が……？

『ゴゲッー！』

……おめでとう、ガスタ・イグルはダイガスタ・イグルスに進化したよ。さて、ちょっと冷静に状況を確認してみよう。相手、ダイガスタ・イグルス、攻撃力2600守備力1800のシンクロモンスターで、エンドフェイズに墓地から風属性モンスターを除外して相手の表側になっているカードを1枚破壊する効果をもつ上級モンスター。こっち、風霊使いウイン、攻撃力500守備力1500の効果モンスター、リバーズ時に相手の風属性モンスターのコントロールを奪える効果を持つけど現在表側だと思うので発動は不可能。俺、攻撃力守備力はなく、残りライフは3800か7800のどちらか。多分0になったら死の為、ダイガスタ・イグルスの攻撃を受けるわけにはいかない。デッキはドラグニティだった。……うん。

「逃げるぞ、割りとかちで！」

「り、了解です！」

無理です。勝ち目ありません。というか古の森の効果で破壊されるにしても、2600のダイレクトアタックなんて食らったら普通に重傷レベルだ。間違いない死ぬと思う。因みにウインを盾にするのは論外だ。ほら、女の子だしそこまで外道でもないし、

「ど、どうするんですか！？ このままじゃ、普通に死んじゃいますよー!?」

「落ち着け！ どうせこいつを倒したところで次の邪悪なるものとかいづのが来るんだろ!? いや、倒さなくても来るんだろうけど……だったら　　!」

そう言った瞬間、さらにモンスターが現れるって今度はラヴァルバル・ドラゴンとドウローレンかよ！ どっちも森につれてきたらダメなモンスターだろ！ でも、

「　　一気に薙ぎ払うまでだ！ 畏発動、激流葬！ フィールドのモンスターを全て破壊する！」

「おお、確かに新手が来たことによって使えますけど、それ、私も死にませんか？」

……あ、しまった忘れてた。でもこの状況で破壊を防ぐカードなんてこのデッキあったかなあ……あ、これなら大丈夫じゃね？

「……さ、さらにチェーンして畏発動、強制脱出装置。風霊使いウインを手札に戻す！ ってこの場合はどうなるんだろう?」

「あ、それはですね。ただ上空に　　」

その言葉が最後まで紡がれる事はなかった。何故なら言い切る前にウインが上空に飛ばされたからだ。……成る程、空の旅に出るのか……すごい飛距離だな。

「　　ゲフツ！」

そして地面に落ちると。というか首から落ちてるけど大丈夫なんだろうか？

「せ、精霊じゃなかったら死んでいました……」

「それでも生きてるのを見ると俺はお前がモンスターなんだなあって思うよ。でもまあ、とりあえず今出てるモンスターは一掃したな」「そうですね……とりあえず増援が来る前にこの森の主、精霊龍様に会いに行きましょう」

「あ、やっぱりそれが目的なのね。てっきり目的がないのに呼び出されたのかと思ったぞ」

よかった、エンシエント・フェアリー・ドラゴンなら何か知ってるだろうし、何で俺やアリスが転生したのか聞いてみたいしな。

「それでは行きましょう。精霊龍様はこの森の最深部にいると聞いてますので、多分こっちです」

「了解、んじゃ行きますかね」

そうして、俺はウインの先導について行き、古の森の深部へ……エンシエント・フェアリー・ドラゴンが封印されていて、既に邪悪なものに侵されてる森の最深部へ……。

「悠斗さん！ 次来ました！」

「おーけー！ 畏発動、炸裂装甲！ さらに、ゴット・バード・ア

タック！」

あれから森を進み始めてしばらく経過する。どんどん木々が少なくなってきたり、襲ってくるモンスターは増えてくる。俺はそれらを可能な限り攻撃を行わずまほや毘で倒していく。とはいえ、このままだとじり貧だなあ。毘は既に三順してるし、そろそろ激流葬とかでも一掃しきれなくなってきたし、

「悠斗、次っ！」

「ちよつとは休ませてくれよな……次は一体どいつだ!？」

『グギヤアアアア!』

……トラファスファイア、攻撃力は2400とちよつと火力不足が否めないモンスターだが、今の俺にはちよつと分が悪い相手だ。理由は簡単、コイツの効果は毘の効果を受け付けない効果なのだ。今使えるカードは奈落の落とし穴、聖なるバリアーミラーフォース、次元幽閉、ブラックホールの4枚。まず奈落、聖バリ、次元幽閉は除外。ブラックホールはウインを巻き込むので却下。さて、本気でどうするかな……？

「ゆ、悠斗さん！ まず、まずいじゃないんですかこれは!？」

「……ああ、下手したら死ぬかもしれないなこれは……」

『グギヤアアアアア!』

迫り来るトラファスファイアの凶爪、咄嗟にウインを庇う。

「全く、しょうがないわね。やりなさい、上海」

『シャンハイ』

突然一筋の光芒が走る、光芒は一瞬にしてトラファスファイアを貫

く。こ、この光は……、

「あら悠斗、まだ生きていたのね」

「あ、アリス！ やっぱアリスも来てたのか！？」

「まあね。……でも起きたらいきなりイビリチュア・マインドオーガスに襲われた時は死ぬかと思っただわ」

「……」

精霊界、容赦なさすぎだろ。俺はイグルスでアリスはマインドオーガスって初戦から出すモンスターじゃないよな。

「……この先にいるのよね、シグナーの龍の一体が」「らしいな、さっさと行こうぜ」

「そうね。私も聞きたい事があるし、行きましょう。早くしないと龍可のデュエルが終わって夢から覚めるかもしれないし」

そう言っただけで俺とアリスは走り出す。ウインはそれについて行く。そして、

「これで終わりよ！ ダークエンド・ドラゴンで、ダイレクトアタック！ ダーク・フォッグ！」

「キハハ、キイーハッハッハッハッ！」

森の最奥に着くとそこではちょうど龍可のモンスターが相手にダイレクトアタックを仕掛けているところだった。えーっ、もう終わりですか？ どんなデュエルだったか知りたいんだけど……。

「……ダークエンド・ドラゴンやめて……ああ、私のモンスターが……墓地送りだから効果も使えないわ……」

「お前本当になにがあったんだ！？」

すごく気になるんだけど。いやホントに。確かに強えけどそこま  
でトラウマになるか!? あ、龍可が元の世界に戻された。さて、  
動きますか、

「アリス、行くぞ!」

「ゴツデスとのコンボともやめて……ハッ! 私は一体何を……!  
?」

「よかった、正気に戻ったか! とにかくあの石像? 見たいな所  
まで急ぐぞ!」

「え、ええ!」

「……あれ? 私忘れられてる?」

そう言っつてエンシエント・フェアリー・ドラゴン(の石像?)に  
近づくと、

『まだいたか! 人間め!』

怒っつてらっしやるー!? めっちゃ怒ってるし! どんどん  
ればいいんだ!? とか混乱してると、

「 怒りをお沈め下さい、精霊龍さま」

と、隣からそんな声が聞こえてきた。誰の声かなあっと思いな  
がら隣を見てみると、そこには真剣な顔をしたウインの姿があっ  
た。こいつ、真面目になるときもあるんだなあ。

『……貴様は魔法の里の』

「はい、私は魔法使いの里から大魔法使い様の命を受けてやっ  
てきました風霊使い、ウインと申します。こちらは大魔法使い様の  
宣託

通りにやって来られた人間の世界からの住人です」

『ほう、ではあなたが現実からの来訪者という人達ですか』

「え、ええそうですけど。俺達を知ってるんですか？」

『もちろんです。少し前に神と名乗る人物がここを訪れて、いつか一組の男女がここを訪れると言って来たのです』

「「っ!？」」

か、神だって!？ まさかアリスの予想が本当にあたるなんて思わなかったけど、まさか本当に神がいるとは思わなかったよ!

「そ、それは一体、どこにいるの!？ どんな格好だったの!？」

「お、おいアリス! 落ち着け!」

「落ち着いてないでいられないわよ! 昔の私の手がかりが分かるかも知れないのよ!？」

た、確かにそうかも知れないけど、アリスの焦りっぷりは正直尋常じゃないぞ!？ とか思っていると再び突発的な眠気っというかこれは俺達の意識を強制的に刈り取るような眠気だぞ……!

「教えて! あなたが見た神というのはどういうものだったの!？」

私達を、私を転生させたのは一体誰なの!？」

「落ち着けアリス! でも教えてくれ、俺達を先生させたのは一体誰なんだ!？」

『それは女神のような神々しさを身に纏う人でした』

女神……? ってことはそいつは女性なのか……? まずい、意識がどんどん闇に落ちていく。だけど、これだけは聞かないと……、

『……そいつは俺達が知っている人物か?』

『それは分かりません。しかし、間違いなくこの世界にい

ます。それだけは確かです』

「……分かった。俺はそれだけ聞ければ十分だ。アリスはどうだ？」

「……私もいいわ。これ以上の情報は望めなさそうだし。帰りましよう」

『 すいません。お役に立てず。しかし、最後にこれだけは言わせて下さい。どうか、どうかこの世界を邪悪なるものから守ってください………』

その言葉を最後に俺達の意識は闇に落ちた。問題、謎はたくさん残ってるけど何とかしないとなあ。そう思いながら俺は神の存在について考えながら意識を闇に落とした。



第十四話 精霊界へ Aパート（悠斗サイド）（後書き）

相変わらずの作者の言い訳。

その一、どうして精霊界へ？>ちよつと行かせてみたかった。後はエンシェント・フェアリーと対峙させたかった。

その二、ウインを出した理由>悠斗の本気が風属性の為、因みに上海人形は言わずもがな

その三、龍可がダークエンド・ドラゴン>大体悠斗と優奈のせい。二人の魔改造したデッキについては次回。

とまあ、今回はちよつとアレな回でした。次回はまともなデュエル回になると思います。それではまた次回！

番外編 昔語 昔の悠斗君と彰子ちゃん（前書き）

10突破記念の作品です。昔のお話なので時間軸がおかしい事にな  
ってるかもしれませんが、お気をつけ下さい。

番外編 昔語 昔の悠斗君と彰子ちゃん

……あつ。は、初めまして。私、宇佐美彰子っていういます！今は9歳です。突然なんです私には大切なお友達がいます。それは……、

「あー、空が蒼いなあ、憎たらしい程に蒼いなあ……」

……この男の子です。黒いボサボサな髪に、適当に着てきたような服装、そして気だるそうな雰囲気を纏った男の子、広瀬悠斗君、あだ名は悠君です。悠君とは家が近所で幼稚園からの付き合いなんですけどたまにとても難しい事を言うんですよ……、

「ん？ どうした彰ちゃん。まるで俺を珍妙な人間を見るような目で見て」

「ち、珍妙……？ 相変わらず言ってる事は分かりませんがもう授業終わりましたけど、悠君はなにを考えていたんですか？」

「んー、恒久的な世界平和と世界の破滅を救う方法かな？」

……また、訳の分からない事を真剣に考えてみたいのです。というかたまに適当にはぐらかされてるような気がするんですが……。

「それで、彰ちゃんの方はどうしたんだ？ 授業終わったなら先に帰ればいいのに」

「え、えつと……その……それは……一緒に帰りませんか？」

「……いいけどさ、たまには俺と違う奴と帰らないのか？」

うう……分かってる癖に痛いところを突いてきますね。

「……私あまり友達がいないんですよ」

「うん、知ってる」

くう！ だったら聞かないでくださいよ！ 分かってるのに聞くとか悠君趣味悪いですよね！？

「？ どうした？ 帰るんじゃないのか？」

「帰りますけど、帰りますけど！ ほんっと趣味悪いですよね！」

「ありがとう。よく言われる」

「褒めてません！」

ああ、もう！ これだから悠君は苦手なんです！ ……嫌いじゃないですけど。悠君は普段からこうやって私やクラスメートの人達をからかうんですよ。それでもやり過ぎませんし、近づいて来なければ何もしませんし。……授業はまともに受けてないのに成績優秀ですし、デュエルは大人でも勝てない実力の持ち主ですし。

「というかさ彰ちゃん、いい加減俺以外に一緒に帰れる友達探しなよ」

「と、友達はあるんですけど帰りが一緒に友達がいないんですよ！」

「ついでに遊ぶような友達もいないんですよ、わかります」

「ああ、もう揚げ足取らないで下さい！」

「発言する権利を取られるとは、世も末だな」

「別にそこまでは言ってますん！」

……なんか嫌いじゃないですけど、心が挫けそうなんです。と、軽く落ち込んでいると悠君が少し真面目な声音で、

「でも真面目な話彰ちゃんには俺以外の友達を、特に女友達を作ったほうがいいと思うぞ。マジで」

「わ、分かってますよ！ 悠君年下の癖に生意気です！」

「おっと、それを彰ちゃんに言われるとは思わなかったわ。つーか大して変わらなくね？」

「悠君は11月生まれ、私は5月生まれ。半年位私の方が年上です」

「（本当は俺の方が16歳以上上なんだけどなあ……転生前を含めると25歳過ぎてるのか俺……）そーですねー」

む、なんか引つかる物言いですね。

「……お、あんなところにいい相手が。へい、そこのがきんちよども！」

「え？ ちよつと悠君？」

「な、なんだよ。がきんちよつとお前も大して変わらないだろ！？」

「なにを言うか、精神年齢的に圧倒的に勝ってるから大違いさ」

はあ、なんか悠君がよく分かりませんが空き地にいた同じくらいの男の子と女の子二人ずつのグループに声をかけてます。……なんか嫌な予感が……、

「ちよつとコイツと一緒に遊んでくれない？」

「えー！ 嫌だよ！ 俺達は俺達のグループで仲良く遊んでるんだから！」

まあ、そうですね。いきなりそんな事言われたらそうなりますよね。

「お前ら仲間外れはいけないって習わなかったのか？」

「それも習ったけど知らない人と遊んじゃいけないとも習ったよ！」

「なるほど、一理ある。俺は広瀬悠斗、こっちは宇佐美彰子。気軽にうさ耳とでも呼んでやってくれ。んで、お前達の名前は？」

「え？ お、俺は加賀屋朱鷺也だけど……んで、こっちは」

「……レイン恵」

「僕はツアン・ディレだよ！」

「窪田修司だ」

「オーケー、じゃあこれで俺達は知り合いだな？ というわけでこいつと遊んでやってくれ」

な、なんて強引な……ほら、あちらの4人も抗議の声を……  
……？ 2人しか文句言っていないんですが……、

「だ、だったらデュエルで勝ったら俺達の仲間に入れてやる！ ただし、お前ら二人と俺とツアンのタッグデュエルでだ！」

「えー、やっぱりそんな展開になるのね……（流石全てがデュエルで出来ている世界）。オーケー、その代わりに俺からもちょっと条件がある。ここにいる全員自分のデッキのエースモンスターを出してくれ！」

悠君にそう言われて全員自分のデッキからエースモンスターを取り出します。私のエースモンスターは……ジュラック・タイタンですね。でも、一体なにをするんでしょうか？

「さて、ここにお前らのデッキのエースモンスターと今日俺が持ってきたデッキ3つのエースモンスターがある。えっと、レインだけ？ ちょっとこのカードをシャッフルしてくれ」

「分かった。けど何を？」

「いや、普通にやってもつまらないし、ちょっと面白みのあるデュエルにしようと思って、簡単に言つとその中にあるカードを1枚引いて、引いたカードに対応するデッキでデュエルしようぜ」

な、なんとという無茶苦茶な提案をするんでしょう……そんな提案飲む訳「いいぜ、おもしろそうだ！」え？ 飲むんですか？ いいんですか結構無茶苦茶な上に運が絡むんですよこれ。悠君の家で何度もやらされてますので私は慣れてますけど、初心者にはきついですよこれ。と内心思っていたんですがあちらが了承してしまったので文句を言う事が出来ず、そのままルールまで決まっていきました。ルールは4000ライフのバトルロイヤル方式ですが、パートナーをかばう事はなしのタッグデュエルになりました。そして、運命のデッキ決めの時間になりました。一応こっちはやった事があるという事で後に引くことになりました、まずは男の人がカードを引きま

す。  
「ん？ ハ・デスって事はレインのデッキか？ レインデッキ借りるぞ」

「うん、頑張つて」

「僕は……何これ？ ジュラック・タイタン？」

「あ、それ私のデッキです……」

「そうなの？ じゃあちよつと借りるよ」

「あ……はい」

という感じで男の人は恐らくアンデットデッキで、女の方は私の恐竜さんデッキになりました。そして、私達は……

「これは……真六武衆・シエンか？」

「あ、それ僕のデッキだ。はい」

「あんがと、ちよつと借りるぞ」

「じゃあ、最後は私ですね……」

なんかまだ悠君のデッキが3つあるから少し怖いですが、ここは

もう運に任せましょう！ そう意を決してカードを引きます。引いたカードは黒いカードで、黒い星が反対側に4つあります。そのカードの名前は……

「エヴォルカイザー・ラギア……？ こんなカード初めて見ましたよ……」

「うわっ、しまった……まさか本当に俺のデッキを引く奴がいるとは思わなかったよ。というか適当にデッキトップをめくっただけだからこのデッキだった事すら気づかなかった……それ、俺のデッキだ……ほれ」

そう言われて悠君は私にデッキを渡して来ます。えっと、これは……恐竜族と爬虫類族の混合デッキでしょうか？

「デッキ確認できたな？ じゃあ、行くぞ」  
「……デュエル（です、だよ）！」「……」

全員LP4000

「先攻は俺のターンだ！ ドロー！ イモータル・ルーラーを攻撃表示で召喚！ カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー。モンスターをセット、同じくカードを2枚伏せてターンエンド」

「僕のターン、ドロー！ ジュラック・ヴェローを攻撃表示で召喚！ 何も伏せないでターンエンドだよ！」

「わ、私のターン、ドロー！ 私もモンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンドです」

このデッキの使い方が分かるまでは防御に徹するしかありませんねこれは……。



「俺のターン、ドロ―！ ピラミッド・タートルを攻撃表示で召喚！ さらにイモータル・ルーラーの効果発動！ このカードをリリスしてデッキからアンデットワールドを手札に加えてそのまま発動！ このカードの効果で墓地とフィールドのモンスターは全てアンデット族になり、さらにアンデット族モンスター以外アドバンス召喚する事が出来ない！ そして、ピラミッド・タートルで広瀬だっけ？ のセットモンスターに攻撃！」

「俺のモンスターは紫炎の足軽、破壊されるが効果発動。デッキから真六武衆 ミズホを攻撃表示で特殊召喚する」

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロ―。手札から魔法カード、増援を発動。俺はデッキから六武衆 ニサシを手札に加える。さらに永続魔法、六武衆の結束を発動してニサシを召喚、ニサシが召喚されたことにより六武衆の結束にカウンターを1つ乗せる。ニサシでピラミッド・タートルに攻撃」

「ピラミッド・タートルの効果でデッキからゾンビ・マスターを特殊召喚する！」

朱鷺也LP3800

………すごいです。二人とも自分のデッキじゃないのに見事に使いこなしています。

「ターンエンド」

「僕のターン、ドロ―！ ジュラック・グアイバを攻撃表示で召喚して、六武衆 ニサシに攻撃！」

「まあ、当然ながら罫発動、和睦の使者（何で入っているんだろう………）、このターン俺のモンスターは破壊されず戦闘ダメージも0になる」

「なら、ジユラック・ヴェローで宇佐美だっけ？ のセットモンスターに攻撃！」

ひい！ 私に攻撃してきました！ わ、私のセットモンスターは確か……、

「私のモンスターはエヴォルド・ウエストロ、守備力は1900なので破壊されませんし、反射ダメージを受けてもらいます！」

ツアンLP3800

「さらに、エヴォルド・ウエストロのリバース効果発動！ デッキから『エヴォルダ』と名のついたモンスターを特殊召喚します！ 私はエヴォルダ・エリアスを守備表示で特殊召喚します！ そしてエヴォルダ・エリアスの効果発動です！ このカードが『エヴォルド』と名のついたモンスターの効果で特殊召喚された時、手札の炎属性、恐竜族、レベル6以下のモンスターを特殊召喚します！ 私はエヴォルダ・ケラトを特殊召喚します！」

「あ、もう1体レベル6モンスターいなかったんだな」

「え、ええそうですねどうしてですか？」

「いや、なんでも」

？ よく分からない事言ってきましたね悠君は。レベル6モンスター2体揃えたら何かあるんでしょうか？

「うう、カードを2枚伏せてターンエンドだよ」

「私のターンです、ドロー！ エヴォルダ・ディプロドクスを攻撃表示で召喚します。行きます！ エヴォルダ・ケラトでゾンビ・マスターを攻撃です！」

「残念だったな。畏発動！ 攻撃の無力化！ 攻撃を無効化してバ

トルフェイズを終了する！」

「……ターンエンドです」

うう、止められてしまいました。しかもゾンビ・マスターが残ってますし……。次のターンまずいです。

「俺のターン、ドロー！ この瞬間、畏カード、針虫の巣窟を発動！ デッキからカードを5枚墓地に送るぜ！」

え？ 自分のデッキのカードを5枚墓地に送るんですか？ 墓地に送られたカードは闇竜の黒騎士、ゾンビ・キャリア、生者の書、リビングデッドの呼び声、馬頭鬼の五枚。リビングデッドと生者の書が落ちたのはおいしいですね。

「そしてゾンビ・マスターの効果発動！ 手札の魂を削る死霊を墓地に送り、闇竜の黒騎士を特殊召喚！ そしてもう1枚のゾンビ・キャリアを攻撃表示で召喚！ レベル4、闇竜の黒騎士にレベル2のゾンビ・キャリアをチューニング！ 摂理に反し蘇りし冥府の王よ、生ある者を全て滅ぼし、不浄なる国を築け上げる！ シンク口召喚！ 蘇りし魔王八・デス！ 八・デスで六武衆 ニサシに攻撃！」

「ニサシは破壊される」

悠斗LP2950

「さらにゾンビ・マスターでカモンを攻撃！」

「カモンは破壊される」

悠斗LP2650

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

ああ、悠君がピンチです。でもなんでまだ余裕そうな顔をしているんでしょうか？

「俺のターン、ドロ。まずはリバーズカード、六武衆推参！を発動。墓地のニサシを特殊召喚する。この時、六武衆の結束に2つ目のカウンターが乗り、六武衆の結束の効果発動、このカードを墓地に送り乗っているカウンターの数だけカードをドロする。カウンターの数は2つ、よって2枚ドロ。さらに永続魔法、六武の門を発動。さらに六武衆の師範を攻撃表示で特殊召喚。この瞬間六武の門に2つカウンターが乗る。さらに六武衆 ザンジを攻撃表示で召喚して、さらに六武の門にカウンターが乗る。そして六武の門の効果発動。このカードに4つカウンターが乗っているとき、デッキ、墓地から六武衆と名のついたモンスターを手札に加える。俺は真六武衆ーギザンを手札に加え、ギザンを特殊召喚。そして再び六武の門にカウンターが乗る。最後に大將軍紫炎を特殊召喚。このカードはフィールドに2体以上六武衆が存在する時、特殊召喚する事が出来る」

…… 为什么呢。一気に体勢を立て直しましたよ悠君。

「大將軍紫炎でジュラック・グアイパに攻撃」

「畏発動！ 援護射撃！ 相手モンスターが攻撃してきた時、自分フィールドに存在する他のモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力分アップするよ！ 僕は攻撃力1700のジュラック・ヴェローを選択して、ジュラック・グアイパの攻撃力は1700ポイントアップしてジュラック・グアイパの攻撃力は3400になるよ！ これによってジュラック・グアイパの攻撃力はシエンの攻撃力を上回ったよ！ ジュラック・グアイパの反撃！」

「ぐおつ、今回なんかついてないな……！　　だけど、紫炎の効果でニサシを墓地に送る事で破壊を免れる！」

悠斗LP1750

あ、悠君のテンションに火が付きましたね。声のトーンが上がりましたし、

「なら、六武衆の師範代でジュラック・グアイパを攻撃！」

「ジュラック・グアイパは破壊されるよ！」

ツアンLP3400

「追撃で真六武衆　ギザンでジュラック・ヴェローを攻撃！」

「ジュラック・ヴェローは破壊されるけど、ジュラック・ヴェローの効果発動！　デッキから2体目のジュラック・ヴェローを特殊召喚するよ！」

「まだまだ！　六武衆　ザンジでジュラック・ヴェローを攻撃！」

「ジュラック・ヴェロー（同じ行動なので以下省略）最後のジュラック・ヴェローを特殊召喚するよ！」

ツアンLP3200

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！　僕は魔法カード、死者蘇生を発動！　墓地のジュラック・グアイパを特殊召喚するよ！　さらにジュラック・モノロフを攻撃表示で召喚！　レベル4、ジュラック・ヴェローにレベル3、ジュラック・モノロフをチューニング！　燃え盛る灼熱の恐竜よ、その焔にて我に齒向かうものを焼き尽くせ！　シンクロ召喚！　踏み潰せ！　ジュラック・ギガノト！」

「ゆ、悠君！ これはまずくないですか！？」  
「落ち着け！ まだ逆転の手は残されている！」

まだ残ってるって、ギガノトの効果で、グアイパとギガノトの攻撃力は800ポイントアップして2500と2900とどちらも上級モンスターレベルなんですよ！？

「ジュラック・グアイパで六武衆の師範代を攻撃！」  
「師範代は破壊される！」

悠斗LP1350

「さらにジュラック・グアイパの効果発動！ このカードは相手モンスターを戦闘で破壊したとき、デッキから攻撃力1700以下の『ジュラック』と名のついたモンスターを特殊召喚する！ ただし、この効果で特殊召喚したターン攻撃する事は出来ない！ この効果で私はジュラック・デイノを特殊召喚！ そして、ジュラック・ギガノトで六武衆 ザンジを攻撃！」  
「ザンジは破壊される！」

悠斗LP250

「カードを1枚伏せてターンエンドだよ！」

まずいです。悠君のライフはもう風前の灯です。私のライフはまだ余裕がありますが、でもさっき見た限りじゃこのデッキに攻撃力2000を超えるモンスターは3体しかいない上にその内の2枚はあのよく分からない黒いカードですし……、

「私のターンです、ドロー！ 私は魔法カード、化石調査を発動し

ます！」

でも、一体何を手札に加えれば……、

「レベル6モンスター、エヴォルダー・エリアスか、エヴォルダー・テリアスを手札に加える！」

「え？」

「いいから！ このどちらか手札に加える！ んで、手札を加えたカードを特殊召喚しろ！」

「は、はい！ 私はエヴォルダー・テリアスを加えます！ さらに魔法、超進化薬を発動！ フィールドのエヴォルド・ウエストロをリリースして、エヴォルダー・テリアスを特殊召喚します！」

悠君の言うとおりに召喚しましたが、これから一体どうすれば……？

「いいか彰ちゃん！ 今彰ちゃんのフィールドにはレベル4のモンスターが2体、レベル6モンスターがずつついる！ そのデッキを使われた時点でもう隠す気にならないから言うけど、その状況で召喚できるモンスターが2体いる！」

「え！？ で、でも私の手札には融合もチューナーモンスターいらないですよ！？ それなのにそんなモンスターいるんですか！？」

「いる！ ていうかそのデッキは正直な話試作段階だったからどっちも入れてないし！ だけどそのデッキにはシンクロにも融合にも負けない強力なカードがエクストラデッキに入っているんだ！」

「エクストラデッキ……まさかさっきの黒いカードの事ですか！？」  
「そうだ！」

そうだって……召喚方法も分からないのにどうやって召喚すればいいんですか！？

「モンスターを重ねろ！ モンスターを重ねてモンスターの限界を超越するんだ！」

「ゆ、悠君？ さつきから言ってる事がよく分からないんですけど……？」

「考えるな！ イメージしろ！」

「悠君！？ 実はテンションが上がすぎて自分でもなに言っているか分かってないでしょう!?」

イメージしろってもう既に意味が分かりませんよ！ いいでしょう！ 私なりにやってみますよ！ でも今の状況じゃそれも出来ません、なので！

「私はフィールド魔法、バーニング・ブラッドを発動します！ これでアンデット・ワールドの効果はなくなり、全てのモンスターは元の種族に戻ります！ そして私のモンスターは全て火属性、よって攻撃力を500ポイントアップです！」

「でも、そのカードの効果で僕のモンスターの攻撃力も上がるよ！ 構いません！ というかそうでもしないとにも出来ないですから。行きます！」

「私はレベル6のエヴォルダー・エリアスとエヴォルダー・テリアスでオーバーレイ！」

「オーバーレイ!? なんだそれ!?」

「そんなの初めて聞いたよ！」

相手の2人がなにか叫んでますけど今はそんな事気にしません！ 私は、私なりに限界を超えるだけです！（意外と言葉に影響されやすい人）



「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築します！  
エクシーズ召喚！ 進化の軌跡、業炎を息吹く竜、エヴォルカイ  
ザー・ゾルデ！」

そう宣言して召喚したモンスターは白くて細い体躯をした竜で、  
その竜の周りにはなにかオレンジ色の球体が2つ回っていました。  
これが……エクシーズ召喚……なんかすごいです。

「な、なんかすげえモンスターだけど罷発動！ 奈落の落とし穴！  
相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚、特殊召喚、反転  
召喚した時、召喚した相手モンスターを破壊して除外する！」

「残念ですけど、エヴォルカイザー・ゾルデはオーバーレイユニッ  
トが存在する限り戦闘以外は破壊されません！ よって奈落の落とし  
穴は不発です！」

「んだとっ！？ じゃあどうやったら倒せるんだよ！？」

「簡単だ。戦闘破壊するか、こいつにモンスター効果を使  
わせてオーバーレイユニットを全て取り除くか、どちらかだ」

相手の男の子が聞いてきた質問に答えたのは悠君でした。そうい  
えばこのデッキは悠君のデッキでしたね。

「オーバーレイユニット……？ そういえばそのデッキはお前のデ  
ッキだったな、そのカードは一体なんなんだ！？」

「エクシーズモンスター、同じレベルのモンスターを複数体重ねて  
特殊召喚するモンスターの限界を超越したモンスターさ（悠斗は  
エクシーズ召喚のエクシーズを超える等の意味をもつ動詞、exc  
eed（エクシード）の変化形だと勘違いしております。実際の  
エクシーズのスペルはXYZです）」

「エクシーズ……モンスター……だと……？」

……なんでしよう、このなんちゃってシリアスは。続けてもいいですよ……？

「続けますよ！ 私はさらにレベル4のエヴォルダー・ケラトとエヴォルダー・ディプロドクスをオーバーレイ！ 2体のモンスターをオーバーレイ・ネットワークを構築します！ エクシーズ召喚！ 進化せし帝王の竜、エヴォルカイザー・ラギア！ 行きます！ エヴォルカイザー・ラギアで蘇りし魔王八・デスを攻撃です！ ヴオルカニック・ブレイズ！」

「ハ・デスは破壊される！」

朱鷺也LP3350

「そして、エヴォルカイザー・ゾルデでジュラック・グアイパを攻撃です！」

「ジュラック・グアイパは破壊されるよ！」

ツアンLP3100

「カードを1枚伏せてターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！ 手札を1枚デッキの一番上に戻してゾンビ・キャリアの効果発動！ このカードを特殊召喚する！」

「させません！ エヴォルカイザー・ゾルデの効果発動！ オーバーレイユニット（以下ORU）を1つ取り除いて特殊召喚に成功したモンスターを破壊します！ サモン・キャンセラー！」

「はあ！？ なんだその効果！？ しかもゾンビ・キャリアはこの効果を使い墓地送られる時、墓地に行かず除外されるし、シンクロも出来ねー！ クソッ！ ターンエンドだ！」

よかったです。これで何とか悠君のターンまで繋げられました。流石にこのモンスター達が強くても2体1は辛いですし、

「ナイスだ彰ちゃん、助かった。俺のターン、ドロー！　まずはフールド魔法、六武院を発動！　さらに畏発動！　究極・背水の陣！　ライフが100になるように払い、墓地の六武衆と名のついたモンスターを特殊召喚する事が出来る！　俺はミスホ、ギザン、ニサシ、師範代を特殊召喚！　これによって六武院にカウンターが4つ乗り、六武の門に8つカウンターが乗るぜ！　そしてミスホの効果発動！　ニサシをリリースして、ジュラック・ギガノトを破壊する！」

「残念だけど、君はここでゲーム・オーバーだよ！　畏発動、ボムガード！　自分フィールドのモンスター1体が破壊される効果が発動された時、その効果を無効にして破壊し、相手に500ポイントのダメージを与えるよ！」

「残念なのはそっちです！　エヴォルカイザー・ラギアの効果発動！　ORUを2つ取り除く事で、魔法、畏の発動、モンスターの召喚、特殊召喚を無効にして破壊します！　エクストラ・ブレイク！」

「え！？　そんな効果まであるの！？」

「彰ちゃんのアシストによってミスホの効果は発動し、ジュラック・ギガノトを破壊する！」

す、すごいです！　エヴォルカイザー・ラギアは召喚や魔法、畏を無効にする能力、エヴォルカイザー・ゾルデはORUがある限り効果破壊が効かず、特殊召喚を無効に出来る効果を持ってて、その上普通に攻撃力も高いですし……、

「六武の門の効果で俺は六武衆　イロウを手札に加え通常召喚！　大將軍紫炎でジュラック・デイノを攻撃！」

「ぐっ、ジュラック・ディノは破壊されるよ！」

ツァンLP1800

「そして六武衆の師範代でツァンにダイレクトアタック！」

「う、うわあああああ！」

ツァンLP0

やりました、これで1人は倒しました！ 後は……、

「さらに真六武衆 ギザンでゾンビ・マスターに攻撃！」

「ゾンビ・マスターは破壊される！」

朱鷺也LP2550

「そしてイロウとミズホでダイレクトアタックでとどめ！」

「う、うわおおおおお！」

そのまま悠君がもう1人も倒します。これで、

「俺達の！」

「勝利です！」

「……すげえ！ お前達すっげえ強えよ！ 約束は約束だ、お前達2人とも俺達の仲間に入れてやるぜ！ むしろ大歓迎だ！」

「あー…… 歓迎オーラのところ悪いんだけど、遊んで欲しいのはこいつだけで、俺は家に帰るぜ」

「そうなのか？ じゃあな悠斗！ また遊ぼうぜ！」

「ああ、機会があったらな」

そう言って悠君は家に帰ってしまいます。って、ちょっと待つてください！

「悠君！ 悠君ちょっと待って下さい！」

「ん？ どうした彰ちゃん、折角遊ぶ友達が出来たのになんで俺追っかけてきてるの？」

「だって、悠君がいないじゃないですか！ 今回こうやって遊ぶ友達が出来たのだって悠君のおかげで、私は特になにもしてないじゃないですか！」

「何を言うか。彰ちゃんのおかげで勝てたようなもんじゃないか。俺はただ切欠とチャンスを与えただけさ」

「でも、悠君がいなかったらこうはなりませんでしたし、それに私は悠君と一緒に遊びたいです！」

だって、悠君は私の最初の友達ですし、悠君の事が ですから、

「あんがとう、でも今日は親父達夜勤で朝まで帰って来ないらしいから夕飯作らないといけないしな。どっちにしても遊べないんだよ」

あ……、そういえば悠君の両親ってD・ホイールとかを作ってる技術者でしたね。その前はモーメント開発をしていたんでしたっけ？ よく覚えてませんが、

「だから今日は家に帰らないといけないんだ。優奈の相手もしないといけないし。それとほらこれやるよ」

「エヴォルカイザー・ラギア……これってさっきのデッキじゃないですか」

「ああ、彰ちゃんの方が使いこなせそうだし、やるよ。その代わりにあんまり他の人に見せびらかすなよ？」

「で、でもいいんですか……？ これ、悠君のデッキじゃ……」

「そうだけど、それまだ試作だからいいよ。だけど、あいつら以外には絶対に見せない事、これだけは約束な？」

「は、はい。分かりました……」

「よし、じゃあ俺は帰るから。また明日な」

そう言っつて悠君は手を振りながら去っていきました。私も新しく出来た友達のところに戻ります。さて、悠君から貰ったこのデッキ、しっかりと使いこなせるようにいろいろと勉強しないとイケませんね。それで、いつかこのデッキで悠君に勝ってみせます！

「ただいまー」

「お帰りなさい兄さん。結構早かったですね」

「まあ、今日は親父達帰って来ないから夕飯作らないといけないからな」

ここは悠斗の家、悠斗が家に帰ると玄関には彼の妹、優奈がいた。

「でも、デュエルしてきたんでしょ？ 一体誰とやってきたんですか？」

「ん？ 彰ちゃんとちよつとタツグデュエルしてきた」

「彰子姉とですか？ 珍しいですね、彰子姉が他の人とデュエルするなんて」

「まあ、無理やりさせた感があるけど、それでも結構彰ちゃんもノリノリだったぞ。特にラギア召喚した時なんてかなりノリノリに叫んでたぜ？」

「……なんか想像出来ないんですけど」

「だろうな。俺もビックリだった」

普段の宇佐美を知っている彼ら兄妹からすれば想像できない事なのだろう。優奈はどんな感じだったのか想像できないでいた。

「あれ？ でもラギアって兄さんが見つけた時すごく驚いたカードですよ？ 彰子姉にあげたんですか？」

「ん？ ああ、あいつは恐竜族を主体としたデッキだろ？ だからあのデッキごとやった」

「……デッキごとって太っ腹というか大胆ですね」

「だって俺恐竜族あんまり使わないし」

「（……それなら最初から仕込まなかったんですが、無駄な事してくれませぬ……）」

「どうした優奈、そんなジト目で俺を見てきて」

「……いえ、何も」

優奈の少し非難な目に全く気づかず部屋の中に入って行く。

「時に優奈、今日はなにが食べたい？」

「……別になんでもいいですけど、強いて言うならカレーですかね。というかカレーが食べたいです」

「なんでもよくないじゃん。というツツコミは置いといて、カレーな、分かった」

そんな感じで広瀬家の夕食はいつも通りに過ぎていった。



番外編 昔語 昔の悠斗君と彰子ちゃん（後書き）

作者の言い訳。

その一、何故にデッキを違うようにしたか>そうでもしないとエヴォルデッキを宇佐美が使えないから

その二、というか何故エヴォル？>TF6で宇佐美がエヴォルだったから、マジで驚いた。

と今回はこんな感じですね。次回は本編に戻ります。それではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1294s/>

---

遊戯王5D's 転生者が歩む原作世界

2011年12月25日00時59分発行